
東方狂喰録

玖月 瑠羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方狂喰録

【Nコード】

N7503U

【作者名】

玖月 瑠羽

【あらすじ】

これは、幻想郷が出来る前の物語である。この世界に封印された、一人の男がいた。彼は、何故封印されていたのか、誰にも打ち明けようとはしなかった。彼は神であり、人であった。喰らい神と呼ばれた彼の物語りが始まりを迎えたのだった。

ブログ（前書き）

初めまして、玖月くつき 瑠羽るはと言います。今回、初めての投稿になります。誤字脱字があると思いますが、温かい目で見守ってください。少しずつ改善して行こうと思いますので、今後とも宜しくお願いします。

ブローグ

月明かりすら届かない静かな暗い闇の中、一人の少年が歩いている。かれこれ何十時間も歩いているのに、疲労を見せずに黙々と一定の速さで歩き続ける。それから何分——いや、何時間歩いたのだるか、目の前によく光が見えた。普通の者なら、喜び光りの元へと走り出すのだが、少年は光が見えたと歩みを止めた。何かに怯えるかのように震えているのだ。

「出れるのか？ 化け物の僕が」

光が徐々に強くなり、少年の姿が照らし出される。短髪のボサボサの茶色い髪に、美しい蒼い瞳。右腕だけ露出した薄茶色のコートを着ていた。右腕から右手の指の先まで包帯で嚴重に巻かれ、焼き印で押されたのだろうか、黒い文字が均一に押された跡がある。

『良いのさ。そろそろ、始めようか』

何処からか声が聞こえた。声の主は何処にもなく、右腕を露出した薄茶色のコートを着た少年しかいない。だが、声の主はとても楽しそうに笑ったような感じだった。

「でも、僕らは壊れた存在だよ」

『いや、違つさ。俺らは壊れちゃいないさ。さあ、光の向こうへ行こつぜ』

悲しい表情で言う少年は、右腕の刻印が打たれた白い包帯を優し

く触っている。何か忘れたい事でもあるのか頭を振り、光の方へと歩き始めた。

「あの光の先にあるのが、夢か幻か」

『または、絶望と言う名の現実なのか』

少年はゆっくりと光の先へと歩き始めた。だんだんと光に近付くにつれ眩しくなり、手で光を遮りながら歩き続ける。そして、少年は光の向こうへと消えた。

僕はずっと闇の中を彷徨い歩いていたが、どうやらようやく闇から出る事が出来たみたいだった。だが周りを見渡せば、見覚えのない風景が広がる。樹々が目の前の湖を覆うかのように立ち、何か大きな物が叩きつけられたのか、地面に大きな跡が残っていた。確かに僕が封印されていた時は、ここには家が立っていたはずだった。周りにはビルが立ってたりしていたのだが、その景色は何処にもなかった。

「僕たちがいた時代から、何年後の世界だろう」

じつと前を見ながら言うと、右腕から右手の指先まで巻かれた焼き印で打たれた刻印入りの白い包帯から返事が返って来た。

『さあな。ただ分かるのは、俺らがいた第一世代は俺達以外が滅亡した。その後の世界、第二世代の世界だろう』

「第一世代？ それを言うなら、第一文明じゃないのかい。……いや、待てよ。僕らがいた世界が滅び、新たに生命が生まれ、新たな世界を作る。そう考えるなら、確かに第一世代でも合っているか」

納得をしながら、ゆっくりと空中へと飛びあがった。空から見ると、第一世代が滅亡したことを再確認できた。あるはずの家やビル、車の通る音もなく、あるのはただ樹が生い茂っているだけの世界だった。

ただ、森の奥の方に町が見えた。なんだか懐かしさを感じる町だった。取りあえず、あそこに行けば何か面白いことがあると思うが、まず確認しないといけない事があった。それは、ここが第何世代の世界なのかだ。

「僕らだけが生き残った、ただそれだけか。一様だけど、確認の為に解放をするよ」

僕は目を閉じ、巻かれている包帯にそつと手を置いた。包帯からの声はなく、これから言う一言を待つかのように脈動しているのを感じた。緊張しているのだろうか、脈動がしだいに早くなる。それを確認した後、ゆっくりと宣言をした。

「第666階層……解、放！！ 目覚めよ、狂い神」

宣言と同時に包帯が解け始めた。解けていく包帯は、首の方へと巻き付き始めた。先ほどまで白かった包帯は紅く染まり、完璧に巻き終えたと同時に少年から発する空気が変わった。少年は空を見上げ、深呼吸をし立と同時に目を開けた。

「おいおい、俺ら何年寝てるんだよ。もう何十億も寝てるぞ！？ はあ、もつと早く起きてりゃ、こんな事態にならなかったんじゃないか」

言葉づかいも変わり、先ほどまでの少年とは違っていた。包帯に

巻かっていた腕から発せられた声の主と、なんとなく同じ口調だった。

『何十億って、僕らが封印された日からだよな。じゃ、第二世代が
生きている可能性はあるね』

首元に巻かれた刻印の入った包帯から、先ほどの少年の声が聞こえた。まるで精神が入れ替わってしまったように、態度が変わっていた。

「汐、^{おし}ここは第二世代じゃない。この世界は第三世代だ」

『え？ そうなの……それは寝すぎたね。封印なんて、もう第一世代が消滅したと同時に消えていたのにね。七夜、^{ななや}どうやら僕らは寝すぎたようだね』

七夜と呼ばれる青年は微笑みながら、ゆっくりと周りを見渡しなから下に降りた。

「ああ、その通りだ。でも、寝すぎたおかげで、第666階層の解放も暴走せずに解放できるように調整も出来た。もう、あの時のような現象は起きない。それだけでも、まあ、長く寝ていて損はなかったな」

『ああ、確かにその通りだね。でも、この世界はどんな所なんだろうね』

地上に降りたと同時に包帯が解け、右腕に巻き付いた。そして、先ほどまでの雰囲気も変わり、汐と呼ばれた少年と同じ雰囲気に戻った。

「さて、第三世代はどんな楽しい世界なのか」

『ああ、楽しみだな。汐、さあ行くでしょうぜ』

そして、僕らは目的地へと歩き始めた。目的地は、先ほど上空に上がった時に見えた町だ。さて、町まで何日かかるか分からないけど、僕らは歩いて行くのだった。

プロローグ（後書き）

まだ初めてなのでこんな感じのプロローグですが、興味沸いてくれたら嬉しいです。

一話 いきなりですが、諏訪対戦 〱前編〱（前書き）

初めまして、今回が処女作となる東方狂喰録。

これからも頑張って書いていきたいと思っております。

東方キャラの能力など違っていることがあるかもしれませんが、アドバースなど頂けると私はとても嬉しいです。

七夜『これ、プロローグの時に書くべきだったんじゃないね』

玖月「それ言わないで、私のミスだからorz」

一話 いきなりですが、諏訪対戦 〈前編〉

side 汐

何日も歩き続け、ようやく森を抜けた。いや、抜けたと言つべきなのだろうか。目の前に見えるのは、町ではなく一本道だ。確かに町がある方角へと歩いていった筈なのだが、目の前にあるのは一本道なのだ。町がある方角を歩いていたはずなのにだよ。それも、さつきから多くの神様の気配が感じる。

「迷ったね。空飛んでいけば良かったね」

『ああ、確かにその通りだな。でも、なんだかこの山から神々の争いの匂いがするな』

右腕に巻かれた焼き印を打たれたような刻印が入った白い包帯から、何やら楽しそうな感じの声が聞こえた。彼の名は「七夜」である。僕の友達である。

『ほお。これは沢山の神力を感じるな』

七夜が楽しそうに言っている。七夜は第一世界るとき、多くの人間たちに『妖怪』と言われていた。だが、彼は妖怪ではなく神様である。『鎖ノ神』と呼ばれる、多くの汚れを封じる鎖を作った神様である。だが、神々は七夜が嫌いだったため、何も罪を犯していない七夜を神々の世界から追放する為、罪をなすりつけ『狂い神』と呼び追放したのだ。

「七夜、神殺しの鎖を解放しても良いかい？ 僕にとって、君を追

放した神々は殺すべき対象だ」

『汐、それは駄目だ。俺は、奴らに感謝しているんだ。お前と言う存在に会え、こんなにも楽しい時間を過ごせているんだ。復讐なんてツマラナイ事をする必要は、ない』

懐かしそうな感じで言っている七夜の声を聞いて、僕は何も言わず前にある一本道を進む。歩いている最中に多くの神様同士が戦っているのが見えたが、僕らは気にせず前へと歩き続ける。

『ククク。どうやら、楽しい物が見れそうだな』

急に七夜が楽しそうに喋って来た。なんだか懐かしい匂いがしたが、気にせず歩いていると、奥の方から爆発音らしき音が聞こえた。

『大和の神と……ここの神の戦いみたいだな。まあ、戦いを見学するでしょう』

「なんだか、邪魔者扱いされて殺されそうだな」

心から思った感想をぶつけると、此方の方へと何かが空から向かってきている。良く見れば樹で出来たモノのようなのだが、あの高さの一撃は殺されかねない為、前へと歩き始める。

『ほほお、俺達を殺す気みたいだぜ？ どうする、汐』

「決まっているだろ？ 売られた喧嘩は——」

後方から爆発音が聞こえた。振り返ると、そこには一本の樹の柱と言えば良いのだろうか、僕が先ほど立っていた所を丸太が地面を

砕いてた状態で立っていた。

「『買うまでだ』」

いつもの僕らだったら喧嘩を買うことはしないのだが、目覚めたばかりなので体を動かしたい気分なので買うことにした。

「どっちが戦う？ 僕的には、七夜の方が良いと思うけど」

『いや、今回は汐が戦いな。俺はお前のサポートをする事にする』

今まで感じた事のないほどの力を感じ、久しぶりに微笑みながら目的地へと向かった。

しばらく歩いていると、不思議な格好をした二人の女性が見えた。一人は、円状の大きな綱を背負った青い髪の女の人と、目玉が着いた帽子をかぶった金色の髪の小さな幼女がら立っていた。

「はあ、ようやく到着したよ。七夜、寝ちゃえ駄目だよ」

『だって、暇だったんだもん』

可愛らしく言っているのが、なんだか無性にムカついた。何か文句でも言っただけよと思うたのだが、何を言っても七夜には無駄なので諦めた。

「さてと、何のつもりかな。僕らに御柱らしき物を落として、僕らは争い事が嫌いなんだけど」

「それがどうした。我らの戦いの邪魔をするつもりなのだろう」

青い髪の女性が、何やら怒った表情で言ってきた。どうやら、戦いの邪魔をしてしまったらしい。だが僕的にはあの攻撃が無かったら、戦うつもりなど全くなかったのだが。

「いや、ここから町がある方角を確認したくて来ただけさ」

「そんな嘘が通じると思ってるの。もしかして、私の街を壊す気だね」

今まで落ち着いた表情だった金髪の少女が、何やら怒り心頭で此方を睨みながら言い放つ。綺麗な玉を周りに纏い、攻撃する準備をしている。

「はあ、だから嫌なんだ。ちゃんと話を聞いてくれない神様は、まったくコレだから」

流石にこの一言を聞いて、二人とも此方へと攻撃を放ってきた。激しい弾幕の嵐が此方へと放たれ続ける。

一話 いきなりですが、諏訪対戦 〱前編〱（後書き）

折角なので前後編で分けました。理由は聞かないで……orz
では、後編で会いましょう

一話 いきなりですが、諏訪対戦（後編）（前書き）

どうも、今回は後編まで載せました。

諏訪対戦中に、目覚めた汐。

この後、一体何が起こるのか……こつこ期待！！

一話 いきなりですが、諏訪対戦（後編）

side 諏訪子

軍神と言われた大和の神である神奈子との弾幕勝負をしている中、何やら変な空気を感じ私は攻撃をするのを止めた。

「何のつもりだ！！ 攻撃を止めるなど」

急に弾幕を放つのを止めたので、神奈子も弾幕を放つのを止めた。私は何発か頬をかすめたが、そんな事はどうでもよかった。

「ちょっと待つて。なんだか変な気を感じない」

神奈子は目を閉じ何かを確認していた。私もこの感覚がなんなのか確認するために目を閉じた。

「な、なんだこの禍々しい神力！？ こんな力、今までに感じた事が無いぞ！！ どう言うことだ、諏訪子」

私だつて解らないのに、神奈子は此方に近づき睨みつけて来た。あまりにも怖いので、少し離れて周りを確認しながら神奈子に向かって言った。

「私にだつて解らないよ！！ ただ、言えるのは……」

「ああ、此方に向かってきている事だけだな」

お互いに感じた事のない神力に、どうして良いのか解らず悩んでいる。だが、相手が此方に向かってきているのだ、やることは一つである。

「この勝負は、一次おあずけだ」

「うん、そうだね。まずは、此方に向かってきているのが誰か、見定めなくちゃ」

段々と近づいてくる禍々しい神力に、神奈子は御柱を投げ放った。落ちた御柱は確実に相手を捕えていたみたいだが、当たることなく不発に終わったみたいで、まだあの神力を感じる。私としては、今の攻撃は不味いと思ったけど、過ぎた事を言うのはしょうがなかった。

「一体、何者なんだ」

神奈子が怯えている。あの軍神と言われた神奈子が、ここまで怯えているのだ。私だって、怖かった。今すぐにでも逃げたい気分である。

「はあ、ようやく到着したよ。七夜、寝ちやえ駄目だよ」

ようやく着いたのか、溜め息を吐いている一人の少年が見えた。短髪ของボサボサの茶色い髪に、美しい蒼い瞳の少年。右腕だけ露出した薄茶色のコートを着ていた。右腕から右手の指の先まで白い包帯で嚴重に巻かれ、焼き印で押されたのだろうか、黒い文字が均等の位置で押された跡がある。

『だって、暇だったんだもん』

何処から聞こえる、若い男性の声。何処から聞こえるのか、大体目星がついている。どうやらあの右腕に巻かれた包帯から、禍々しい神力が放たれていた。つまり、あの包帯に封じられた者の声なのだと思った。

「さてと、何のつもりかな。僕らの所に御柱らしき物を落として、僕らは争い事が嫌いなんだけど」

目の前の少年から、今までに感じた事が無い力を感じた。まるで何もかもを喰い殺すような、とても怖い力を感じた。こんなに怖いのは、生まれて初めてだった。

「それがどうした。我らの戦いの邪魔をするつもりなのだろう」

怒った表情の神奈子に対し、少年は溜め息を吐いていた。此方としては穏便に済ませるたいけど、先ほどの御柱の攻撃で穏便に済ます事は出来なくなった。

「いや、ここから町がある方角を確認したくて来ただけさ」

この少年が私を崇めてくれている街に降りたら、何が起こるか分からない。もしかしたら、私を崇めてくれる町を滅ぼすつもりかもしれない。そんな感情が頭の中を過ぎる。負の方へと考えがまとまり始めているのだ。

「そんな嘘が通じると思ってるの。もしかして、私の町を壊す気だね」

私は弾幕を身にまとい、攻撃の準備を整える。きつと町を壊すに

決まっていると、頭の中をずっと駆け巡る。この少年は危険過ぎると、何かが訴えている。

「はあ、だから嫌なんだ。ちゃんと話を聞いてくれない神様は、まったくコレだから」

少年はまたため息を吐いた。それと同時に、私と神奈子は弾幕を少年に死んでもおかしくないほどの弾幕の雨をぶつけた。弾幕を放つのを止め、少年の気配を確認する。砂煙が昇り、少年を肉眼で確認することが出来ない。だが、まだ生きていることだけは分かる。

「さあ、始めるとするか」

そして、少年の声が聞こえたと同時に、私達は絶句した。あの弾幕の雨を喰らったはずなのに、怪我どころか服に傷が一つもなかった。

side
汐

いきなり弾の雨が降り始めたが、防御するわけでもなく弾を見つけていた。色とりどりの弾に目が言ってしまったのだ。だが、コレに当たれば大怪我になるのは確実だ。取りあえず、僕に当たる弾幕を防ぐ。目の前に落ちる弾幕は後方に下がり、後は黒い物体で全て防いだ。砂煙が舞う中、僕はじっと前を見続け、微笑みながら言う。

「さあ、始めるとするか」

この黒い物体の名は『絶』と呼び、神である僕的能力である。神

としての名は「喰らい神」である。コイツの能力によって、神力・魔力・妖力・靈力を自在に使えるのだが、使うのが面倒なので神力のみで防いだ。

「どうする、七夜。誰から喰らう」

『いや、めんどいから止めよう。お腹すいたし』

砂煙でようやく晴れ、周りが見渡せるようになった。僕はやる気だったのだが、急にそう言った七夜に、軽く呆れたのと同時にやる気がなくなった。流石は七夜、やる気をなくす天才である。でも、確かに僕もお腹が空いている。こんな状態で出来れば戦いたくないと言っ感情が頭を過ぎる。

「やっぱ、やめた」

僕がそう言うと、二人は絶句していた。誰でもそうなるに決まっている。だって、あの弾幕の雨を無傷で立って居られるなど普通はない。

「っな！？ 私達と戦わないと言っのか」

青髪の女性がそう言うと、黙って頷き目の前の賽銭箱の隣まで歩き、二人の方を振り向いて言った。

「だって、僕らは君たちの戦いを邪魔するつもりはないし。ただ、お腹が空いたから町に行ってご飯を食べただけ。君たちが戦っているせいで約十億年も寝てた僕らを、無理やり起こした君たちの力量も知りたかったけど、最終的には観戦しに来ただけだから」

満面の笑みで言うと、二人は一度互いの顔を見つめて再度此方へと振り返り同じ言葉を口にした。

「十億年！？」

「まあ、その話は追々するから。さあ、君たちの決闘を見せてよ。この神社の神様を決める戦いを、僕らの目の前でね」

楽しそうに言ったと同時に、二人は黙って頷きもう一度距離を置いた。互いに睨みあいながら、空へと昇り色とりどりの弾を放つ。互いの弾が体をかすめる。だが、武の方は青髪の女性が上らしく、金髪の少女の背後に回り込み、御柱見たいな物を叩き落とした。

「私の勝ちだ」

見事、青髪の女性が勝った。金髪の少女は気絶しているみたいだが、目玉が着いた帽子は此方を見ている。

「御二方、良い勝負だった」

僕は微笑みながら拍手を送る。こうして、この対戦は幕を閉じた。その後、宴会が開かれるらしい。ちなみに青髪の女性は神奈子、金髪の少女は諏訪子と言らしい。僕と七夜は、これから開かれる宴会に招待されるのだった。

一話 いきなりですが、諏訪対戦 〱後編〱（後書き）

はい、一話 後編が終わりました。
今回は、諏訪対戦の話でしたが、まだ諏訪対戦の宴会が御座います。

さて、次回は何か起こるのやら？

では、また会いましょう ノシ

二話 汐と神奈子と諏訪子（前書き）

今回は諏訪対戦が終わり、宴会の話です。

さて、いろいろと考えながら書いています。

でもね、書いていてお腹が空いてしまうんです。

理由ですか？

理由は分かりません（汗

二話 汐と神奈子と諏訪子

side 汐

諏訪対戦という戦いが終わり、皆が宴を開いています。僕ですか？ 僕は今厨房を借りて、ご飯を作っています。山菜の炒め物や御浸しなどを作っていました。

「さてさて、コレで終わりかな」

『ああ、終わりだ。さて、食べるとしようか』

包帯が巻かれた右腕の方から七夜の声が聞こえた。そう言えば、一つ誤解を産まないように説明しておく。七夜は男性ではございません、女性です。それもとて美しい女性です。鎖の神の時は女性口調だけど、狂い神の時は男口調になる。何故、そんな事をするのか聞いた事があつたが、ただ一言「その方が面白いだろ」だとか。僕には全くもって分からない。

「もし、貴方様は七夜様で御座いますか」

「ご飯を食べようと箸を持つとしたら、背後から女性の声が聞こえ振り返った。綺麗な着物に白桃の色に近い羽衣を着た女性が、此方へと向かって来た。

『天照様、御久し振りで御座います』

七夜は懐かしい旧友にあつたかのような声で目の前の女性に言う。その声は、正しく女性の声だった。いつもの七夜なら男性の声で答

えるのだが、今は女性の声だ。それを聞いて、目の前の女性——天照様が嬉しそうな、でも悲しむような表情になった。

「七夜様……その節は、大変申し訳ございませんでした」

その場で土下座をした天照様に対し、七夜は何も言わなかった。本来なら僕と七夜の意識を変えるべきだと思うのだが、七夜はそれを拒否したのだ。何故だろうか、この重い空気になんとか居づらい。

『私は、私の意志であの輪から抜けたのです。天照様のせいでは御座いません』

「ですが、私がまだ幼かったばかりに、七夜様を孤独にさせてしまった」

『良いですよ。昔のことなど、もうどうでも。私にとって、汐のそばに居られればそれで良いのです。私にとって汐は大切な存在。それに、私は狂い神で御座います故、もう貴方様がたの御傍には戻れなません』

七夜は怒ることもなく、優しそうな声で天照様に話す。

「ですが……そうですね。七夜様には、何を言っても無駄なことを思い出しました」

『フッフ、その通りだ。俺に何を言っても無駄さ』

いつも通りの男性の声に戻った。天照様もなんだか楽しそうに微笑んでいた。僕も微笑みながら、茶碗にご飯とみそ汁をよそった。今回の味噌汁は『御芋』が入っている味噌汁だ。

「これは、貴方が作ったのですか」

天照様が興味があるのか、ジツとご飯を見つめている。みそ汁の香りと、山菜の炒め物を見れば誰だつれお腹がすく。取りあえず、天照さまの分もよそり一緒に食べる事になった。ちなみに、七夜の分はない。何故なら、僕と七夜は繋がっているのだ。僕が満腹になれば、七夜も満腹になるのだ。

「喰らい神様の料理は素晴らしいですね」

『だろう？ 汐の作る料理は神々の食卓に出したって文句は言えない、最高級の一品を作れる』

楽しそうに会話しているのは良いが、僕が作る料理はそんなに高級の一品とは言えないと思う。いつも作る料理と言え、一般の家庭に出ている白米とみそ汁、そして焼き魚と言ったものだ。

「ですが、これほど美味しい物が作れるのに、独身なのですか」

『ああ、そうなんだよ。本当に困った者だと思わないかい』

七夜と天照様が意気揚々としている。僕は黙々とご飯を食べているのだが、流石に怒りが込み上げて来た。確かに独身だが、何故だろう殺したいほど怒りが込み上げて来た。

「御二方、喰い殺しますよ」

「『うめんなさい』」

謝ったので許すとして、僕は無言で食べ始めた。だが、二人とも楽しそうに会話をしている。まあ、聞いてて楽しいからこのままで良いと思ったりもする。

「御馳走様でした」

食べ終え食器を流しに入れる。洗い物は人型の『絶』達にまかせ、僕らは宴会会場に戻る。ちなみにだが、この絶は人型などの様々な形を思った通りに変える事が出来る。

「絶って便利ですね」

「天照様、目を輝かせながら欲しがるのを止めてください。彼らは僕の一部ですから」

残念そうな表情で此方を見ている。神様の威厳と言うものが崩れたのではないかと思っただが、まあ、気にしないことにした。

「で、この状況は何……」

「うわーん、負けちゃったよ。汐、慰めてえ」

諏訪子が泣き上戸だと言うが良く分かった。神奈子は……寝ている。酒樽が二、三本転がっている。

「飲みすぎで倒れたのかな。さすがに酒樽を二本以上開けて、頭にタンコブ出来てれば……タンコブ？」

神奈子の頭を良く見ると、大きなタンコブが出来ていた。どうやら酒樽を積み重ねていたのだろう、何かしらの振動で酒樽が神奈子

の頭の上に落ちてこの有り様になったらしい。

「他の神様たちも、楽しそうに飲んでいるね。こんなに酒樽を空にして、明日の日に二日酔いみたいな形にならなきゃ良いけど」

『ああ、これは確実に二日酔いコースだな』

「汐おおお、うわああああん」

改めて思った、諏訪子はこのままで良いと思う。多分、子の可愛さが新参者を増やすのだろう。そう考えると、天照様もこのままの方が新参者が増えるのではと思ってしまった。

『安心しな。貴方の料理で新参者が増えるから』

「なんだろう。それは素直に喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか」

言わば料理で釣るってことだ。そんなので釣るのは嫌だなど、心の中で呟いた。

「では、私は帰りますね。鎖の神様、喰らい神様」

『ええ、さようなら。また会える日があつたらね』

「ええ、また会えましたら」

そう言つて、天照様は帰られた。七夜と天照様がどう言う関係なのか凄く気になった。だが、それを聞くのは止める事にした。これは僕と七夜との約束だ。互いの過去は『決して』触れてはならない。

『汐、気になるんじゃないのか』

「気にはなるけど、約束だから仕方が無いさ。それに『謎があるから人生は楽しい』でしょ」

微笑みながら七夜に問うと、楽しそうに笑い始めた。どうせ聞いた所で答えてくれないのだ、それなら聞かない方が良くいに決まっている。

『ああ、その通りだ！　流石は俺の相棒だぜ。これだから、お前のそばを離れられねえぜ』

楽しそうに笑っているの、今日は機嫌が良いらしい。久しぶりに御酒を飲む事にした。第一世代が生きていた頃は、よく街の人と一緒に御酒を飲んでいたが、過去の話などもう忘れた。長く寝すぎたせいである。

「はあ、七夜。君はもう少し周りの事を考え——って、無理があったか」

『おいおい。俺だって周りの事くらい考えるさ。ただ、俺らが楽しいと思えば良いのさ』

本当に楽しそうに言っているの、なんとなく諦めが着いた。でも、七夜がいる時が一番楽しいのは明らかである。

「君がそれを言うのかい。まあ、良いけどさ。諏訪子、僕にもお酒頂戴」

「良いよ、今持って来るね」

凄い速さで酒を取りに行った。うん、素晴らしい速さだ。シマパンが見えた事は内緒にしとくとして、僕は神奈子の口の中にある物を入れた。これは俺のいた第一世代の商品で、これはもの好きな奴しか買わないとされる物だ。誰だって解るよね。そう、これは――

「ぎゃあああああああ」

デスソースだ。原液を一滴入ただけでこの反応だ。流石はデスソース、僕らの想像を遥かに超えた行動をやってくれる。そこに痺れる憧れ――ないな、うん。

『ククク、流石は汐だな。これなら、二日酔いは起こらないな。代わりに何か大切な物がなくなるが』

「ひゃれひゃー!! わひゃひのくひのにゃひゃに、にゃにをいへひゃ（誰だ!! 私の口の中に、何を入れた!!）」

サドンデスを絶に喰わせ、何事もなかったかのように諏訪子が帰って来るのを待っていた。

「御酒持って来たよ……って、神奈子!? どうしたのその顔!? 舌を出して泣いて」

「ひゃれひゃが、わひゃひのくひのにゃひゃに（誰かが、私の口の中に）」

「うん、何いているのか分からないよ」

うん、見ていて楽しいわ。諏訪子から御酒と杯を貰い、それを見

ながら飲み始めた。とても柔らかな甘みのある味が口の中に広がる。こんなに美味しい物を飲んだのは、初めてなような気がした。こんなに柔らかな甘みは、飲んだことがなかった。

「美味しいでしょ？　これ、私のお気に入りなんだ」

「ああ。こんなに美味しいのは、初めてだよ」

なんだかんだで酔いが覚めた諏訪子と、サドネスの原液を垂らして悶絶していた神奈子と一緒に御酒を飲み始めた。神奈子は水を飲み、酔いを覚めると同時に舌の痛みを無くそうと奮闘している。

「あはははは。諏訪子も大変だったんだな」

「そうだよお、私だって大変だったんだよ」

諏訪子と神様になった時の話をしている。見た目が幼い神様に誰が信仰を持つのか、如何すれば持つことが出来るのか、頑張つて考えて今の地位を手に入れたらしい。

そんな話を聞きながら楽しい時間を過ごしていると、皆が酔い潰れていた。酒に強いはずの皆が、倒れている。空の酒樽を見ると、もう三十をゆうに超えている。

「あらら、こんなに飲んだのね。はあ、夜風に当たって来るか」

周りにいた者たちは爆睡状態だった。だから、僕の足音に気付かずに眠っている。皆がバラバラな方角で寝ているので、外に出るのが結構大変だった。背中に諏訪子がくっついていてる事に気づかず、なんとか外に出た。

「はあ、涼しいな。でも、流石に飲みすぎたな。僕って御酒に弱いんだけどな」

『酒樽を十五個空けたお前が言うか』

七夜が呆れた声で言っただけを軽く無視して、黙って空を見上げ夜風に当たる。満点の星空のを見つめている中、何処からか見られている感じがした。

「誰かな？ 僕を見ても面白い事はないけど」

『あら、何時からお気付きになられたのですか？ 喰らい神様』

森の方から声が聞こえたのでそちらの方を向くと、何やら空間が裂け始めた。裂け目が広がらないように両端にリボンがついている。裂け目が広がり、紫色の世界が広がる。沢山の眼が此方を見ているのだが、別に怖いと感じなかった。

「あははは、君の気配は今さっき感じたんだ。で、君は僕らに何の用があるんだい」

『私の理想の実現のために、貴方様の力が必要なのです』

裂け目から美しい女性が現れた。とても紫と白を基調とした服を着た、美しい金髪のロングヘアの女性の妖怪。時折見せる決意を固めた強い眼差しに、心引かれるものがあつた。そして彼女の理想がなんなのか分からないが、その理想がどうなものなのか分からない。だが、彼女の理想には興味があるのは確かだ。

「なら、一つ条件がある。この条件を達成できれば、君の力になっ

てあげよう」

「如何すれば良いのかしら」

扇子を広げ口元を隠す女性に、僕は微笑みながら言う。なんでも叶えられる自信があるのだろう。でも、そんなに難しい物ではないのだから。

「君の名前を覚えてくれるかな。名前も知らない相手の願いなんて、僕は聞けないからさ」

「フフフ。本当に貴方様は面白い御方ですわ。私の名前は八雲 紫で御座います」

丁寧に御辞儀をする紫。いつも通り七夜が楽しそうに笑い始めた。それにつられ、僕も笑ってしまった。キョトンとする紫を見て、僕は紫に言う。

「僕らの名は『紅咲 汐』と『紅咲 七夜』だよ。宜しくね、紫さん。それと、僕らの事は汐、七夜と呼んでください」

「え、ええ」

やはり戸惑っているようだ。何せ、神様を名で呼ばせるのだ。普通の神様なら、そんなこと絶対にしないと思う。だが僕らにとってこれが当たり前なのである。

「笑ってスマナイ。新たな友が出来る事に、嬉しくなっちゃってな。これからも宜しく頼むよ、紫殿」

「ええ。これから宜しく願いしますわ」

こうして、僕らは紫と友達になった。ああ、そう言えば背中に抱きついている諏訪子は爆睡しているよ。とても気持ち良さそうに寝ているので、なんだか僕の背中が気に入ってくれたみたいで嬉しかった。

「なるほどね。妖怪と人間などが共存する世界を作りたいと」

「その通りですわ。その為には、私一人の力では不可能です」

悔しそうに話す紫の顔を見て、なんとなく昔の自分を思い出した。無力だった昔の僕自身を思い出した。

「そうだね、確かに一人じゃ何もできない。でも、二人合わされば成功するさ」

「ええ。そうよね、その通りよ。私は頑張るわ、夢を叶えるために」

紫がやる気になったようで、扇子を閉じ裂けた空間へと歩き出す。僕も神社の中へと向きを変え、諏訪子をおんぶした状態で歩く。紫の気配は消え、諏訪子の寝息と神社の方から聞こえる空の酒樽が一斉に落ちる音だけだった。

『これからが楽しみだな。紫と言う妖怪の夢が叶ったとき、何が起こるのか……ククク、本当に楽しみだよ』

「そうだね、僕も楽しみだよ。妖怪と人間などが共存できる世界が本当に実現したら、僕らも救われるよね」

僕は笑いながら諏訪子を起こさない程度に笑いながら、神奈子たちのいる神社へと歩き始めた。

二話 汐と神奈子と諏訪子（後書き）

汐さん、僕にも貴方の料理を食べさせて。

そう思いながら、僕は今日も魚を焼いて食べてます。

汐と七夜の設定は、もう少し書いてから載せようかと思っております。

では、また会いましょう ノシ

三話 人里で暮らすのね（前書き）

今回はオリキャラが出ます。

でも、僕的には可愛いキャラを出そうと考えてたけど……

結局は、こうなってしまったのですorz

三話 人里で暮らすのね

僕らは今、諏訪子達が守っている町に居ます。里よりは大きく、都にしては小さいです。でもこの町は活気があって、とても住みやすい所です。で、僕らがこの町で何をしているかと言うと、路銀集めをしています。言わば、働いていると言った所です。神様の姿で働くのはなんだか嫌なので、神力を封じ、靈力を解放して人間の状態で働いています。

「はい、注文の品出来たから運んで！！ 後、五番卓の注文をもらってきて」

「はい、分かりました！！ 行ってきます」

そして、僕はとある料理店の厨房で料理を作っています。人が足りないらしく手伝って欲しいと言われ、手伝っている最中です。さらに今は、御昼時である。多くの御客が来ると言われるこの店で、休む暇もなく厨房で注文の品を作っている真つ最中です。

「注文入ります！！ 焼き魚定食二人前に、熱燗二本です」

「はいよ！！」

ここの料理長と一緒に作っている。若い連中はご飯と味噌汁を作り、料理長と僕は野菜の炒め物などを作っている。この調理場に漂う美味しそうな匂いで、お腹が空いてしまった。でも、そんな事よりも料理を作るのに忙しい。

「はい、焼き魚定食二人前と熱燗二本ね」

「はい、運んできます！！ コレで最後が注文です！！ 山菜のおにぎりと野菜炒め定食一人前です」

「はいよ！！」

出来立ての料理を運んで行く接客をしている女性を見て、最後の注文の品を作り出す。僕はいつもの通り山菜のおにぎりは若い連中にまかせ、野菜炒めを作り始める。この時代に醤油と塩などがあるのはとても助かる。そんな事を考えていたが、なんとか作りあげる事が出来たので接客の女性を呼ぶ。

「山菜の野菜炒め定食できたよ！！ 運んでくれ」

「はい！！ 運んできます」

そう言つて、出来立ての料理を運んで行つた。これで、ようやく終わった。僕は額から出た汗を手で拭き払い、コップに水を入れて飲む。厨房は火を絶やさず点けていた為に、厨房はとても暑いのだ。

「いやあ、本当に助かったよ。汐さんがいなかったら、今週は店が開けなかったよ」

「いやいや、気にしないでください。一週間だけ働いただけですから、それにお金もこんなに貰っちゃってなんだか悪い気がしますよ」

そう言いつつ、僕は給料をお財布の中に入れ料理長に言った。彼はニコヤカニ笑つと、良いんだよと言いながら、皆の文の料理を作り始めた。

「こんにちわ」

厨房の裏玄関から声が聞こえ振り返ると、そこには水色の着物を着た黒の短髪の幼い少女が立っていた。少女と言っても、人間ではない。どちらかと言うと狐の妖怪と言って良いと思う。狐独特の黄色い尻尾と頭に生えている耳が、彼女が妖怪であるという何よりの証拠である。でも、耳と尻尾を隠せば、水色の着物を着た可愛らしい人間の子どもである。

「やあ、天音ちゃんじゃないか。今日もご飯を買いに来たのかい」

料理長が優しい表情で少女に問いかけている。天音と言う狐の妖怪は、モジモジとしながら頷いた。彼女はいつもこの時間にやって来るのだが、話を聞くと両親が病気で亡くなり、今は一人で森の中で生きているらしい。まあ、ここいらは安全らしいから生きていく上では危険はないが、でも食べ物などの食に関しては流石に無理がある。

「あの……汐さんのお弁当が……」

「ん？ 僕の作った弁当が良いのかい？」

黙って頷く天音ちゃんに、僕は料理を作り始めた。コレが天音ちゃんに作ってあげられる最後の弁当になるが、僕は少し多めに天音ちゃんのお気に入り、山菜と野菜の炒め物と稲荷寿司を作っている事にした。

「天音ちゃん、汐は明日から旅に出るのだったさ」

「え……そうなんですか」

悲しそうな声で言われるとても辛いのだが、その問いかけに頷きながら料理を作る。今は四段目の稲荷寿司に取りかかっている。一段目から四段目は、稲荷寿司で染めている。最後の五段目が、山菜と野菜の炒め物である。

「僕らは旅人だからね。いろんな町に行って、いろんな料理を食べ歩きたいんだよ」

『まあ、そう言うことさ』

七夜が急に喋り出したが、働く当初に前もって僕の右腕について話してあるので、皆が驚かずに聞いてくれている。当初は驚いてたが、僕的にはそんなに驚くことではないと思っている。

「そうなん……ですか」

さらに悲しそうな表情をする天音ちゃん。この表情をされると、僕はとても弱いのだ。特に、天音ちゃんに対してだけだね。そんな事を思っていると、七夜が急に笑いながら天音ちゃんに言った。

『なら、一緒に旅でもしようじゃないか。俺は構わないし、旅は多い方が楽しいからな。それに、寂しそうな顔されちゃ、俺らも悲しいからな』

「でも……良いのですか」

申し訳なさそうな声で聞いてくる天音ちゃんに対し、七夜は肯定

する。それも僕の意見なしで事が進んでいる。まあ、僕はどっちでも良かったけどね。

まあ、そんなこんなで、天音ちゃんと一緒に旅が始まった。最初は静かだった天音ちゃんも、七夜のセッションに慣れたのか、明るく元気にはしゃぐようになった。

「さて、ここが妖怪の山の近くにある里か」

僕らは、アレから一週間近く歩いて、紫が言っていた目的地である里に着いた。何でもココでしか食べれない団子があるらしく、天音ちゃんと僕はとても楽しみである。僕こと『喰らい神』は『食を司る神』らしく、道中でそんな話をしていたら、出会った人達が手を合わせてくれた事で、信仰心も少しついたらしく神力が今までより少し増えた。

「汐様が神様なのは解りましたが、なんで今は人間の状態なんですか」

蝶を追いかけながら楽しそうに言う天音ちゃんを見ながら、クスクスと笑いながら答える。

「僕は元々、ただの人間だったんだよ。神様になったって、僕は人間としていた。ただその気持ちに素直に従っているだけさ」

「そうなんですか？ 私には理解しかねます」

蝶を追いかけるのを止め、此方に満面の笑みで答える。そんな天音ちゃんを見て、七夜が笑いながら答える。

『俺は、神界から追放された者だ。そして、汐は人間であり神。俺らにとつて神の姿でいるよりかは、人間の姿でいた方が楽しいのさ』

「そう言うことだよ。僕は神様としているよりかは、人間としての方が楽しいんだ。だって、そのおかげで天音ちゃんに出会えたんだからね」

微笑みながらそう答えると天音ちゃんは首をかしげたのだが、すぐに納得したような表情で頷いた。

「なんとなくだけど、分かったような気がします」

先ほどまで蝶を追いかけていた天音ちゃんは、こっちへと走って向かって来ている。可愛らしく黄色い尻尾を振りながら、楽しそうに笑っていた。

「さあ、早く里へと向かおう。なんでも、紫が僕らの為に家を用意してくれたらしいよ」

『俺らの家ねえ』

「楽しみですね！！ 汐様、七夜様」

そんなこんなで、僕らは里の中へと入った。里の中では人が楽しそうに働いている。こんなに活気が良い里は、見たことが無かった。

「凄いです！！ 凄いです！！ 凄い活気の良い里ですね、汐様、七尾様」

『ああ、こんなにも活気の良い里は初めてだ。第一世代には無い、優しさで包まれているな』

僕らが里の人達を見ていると、それに気が着いたのか御茶屋の女の子と目があつた。ニコツと微笑んで見ると、急に指を指して「可愛い！！ って、狐の妖怪よ」と叫び始めた。

「妖怪だと！？ って、可愛い妖怪だな」

天音ちゃんが今にも泣きそうになったので、優しく抱き上げ頭を撫でた。急に『可愛い』や『妖怪だ』と言われて、驚いて泣いてしまった。そして、そんな事態になった事で、里の人達も驚いている。それを楽しそうに七夜が笑いながら言う。

『ククク。天音もまだまだ子供ってところだな。でも、まあ……この里は面白い奴らが多いな』

「あははは。まあ、そうなるね。さてと、紫の指定された場所に行こうか」

「ヒック……汐しゃま」

泣き続ける天音ちゃんの頭を優しく撫でながら、里の奥の方へと歩き始めた。この里の気の流れは、とても良かった。こんなにも温かな優しい気の流れは初めてだ。だからだろう、里がとても活気が良い。

「いや、本当にココは活気があって良いね」

さて、しばらく歩いていると、目の前に一軒の家があった。出来立てのなのか、周りの家に比べて綺麗である。その家の前に、見覚えのある一人の女性が立っていた。紫と白を基調とした服を着た、頭にかぶった白いZUN帽子をかぶっている女性だ。彼女が僕らが言っていた「八雲 紫」である。

「フフフ。貴方達って本当に神様なのかしら。私の知っている神は、神力を出しながら来るのだけだ」

「言っておくけど、僕らを其処らの神様と一緒にしないでくれないかい。僕らは人間として、この世界を見ていくつもりなんだから」

頬を膨らませながら紫を見ると、扇を広げ口元を隠しながらクスクスと笑っていた。先ほどまでずっと泣いていた天音ちゃんは、僕と紫が話しているのを見て泣きやんだ。僕と紫を見ながら、天音ちゃんが衝撃の一言を口にした。

「この紫のお姉さんは、汐様の恋人ですか」

その一言で七夜が爆笑した。そして、僕と紫の時間が一瞬にして止まった。天音ちゃんは七夜が爆笑したので、さらに混乱し始めた。

「私が、汐の恋人……」

「僕が、紫の恋人……」

互に見つめ合い、数秒して溜め息を吐いた。それもほぼ同時のタイミングでだ。息が合っていると言われれば、それを認めたくは

ないが合っている。

「まあ——別に良いわ。取りあえず、ここが汐の家よ」

「後でちゃんと天音ちゃんに言っておくよ。はあ、でもここが僕らの家か……。取りあえず、中に入ろうか」

『本当に面白いわ。アハハハハハハハハ』

先ほどから爆笑している七夜をほつといて、僕らは家の中に入る。家の中には必要な家具などが一通り揃っており、これからここで暮らすのに不自由ないようになっている。

「これからは、ここに一時的ですが住んでもらいます。そして、時期が来たとき、汐たちの力を借りて私の夢を叶える。人間と妖怪たちの理想郷を」

紫の目は、真っ直ぐに僕を見つめている。それだけ彼女にとって、この夢が大切なのだと分かる。

「一時的と言うことは、夢が叶ったと同時にココを出て行くと言うことだね」

「ええ。そして、汐たちの為に本当の家を提供いたしますわ」

どうやら紫が提供してくれたこの家は、一時的に提供する家らしい。でも、こんなに立派な家を提供してくれたのに、何も返さないのもなんだか悪い気がする。

「紫、ありがとう。お礼に何か作るから、ちょっと待ってて」

「フッフ。礼なんていらないけど、喰らい神の料理には興味があるわね。では、御言葉に甘えさせて貰おうかしら」

そして、僕らは紫の夢を叶えるまでの間、この里で暮らすことになった。

三話 人里で暮らすのね（後書き）

はい、僕はこうなることを予想していませんでした。

天音ちゃんを考えた当初は、キツネではなく猫にしようと思ったのですが、結局キツネにしました。

何故かって？

キツネって可愛いと思いませんか？

僕はそう思うのです。

さて、そろそろ次話を書くでしょう。

では、また会いましょう ノシ

四話 妖怪の山へ（前書き）

遅ればせながら、ようやく四話が書き終えました。
まだ五話は書いていません。次はどの話を書こうか悩みながら考えております。

さて、今回は妖怪の山へと向かいます。
その理由が、うん

まあ、読めば分かります。（腹減った）；D；

四話 妖怪の山へ

「はあ、なんてことだ」

僕は今、とても困っている。僕が神様であると里の人にばれた（主に紫のせいだ）。それについては別に困っていないし、逆に僕らみたいなのを崇めてくれて凄く感謝してる。なんだか僕の家の前に賽銭箱作ってくれて、いつも早朝にお金を入れてくれる。さらには、僕の為に右腕を露出された着物を作ってくれたのだ。天音ちゃん達が似合うと言ってくれているが、今日は灰色のズボンに白いＴシャツを着ているが、そんな優しい里の皆さんに此方もお礼をしたいと思っていたのだが――

『赤カブと白カブの漬物を作ろうとしたら、これが』

そう、僕らは漬物を作ろうと思っていたのだ。だが、漬物石がなくなっているのだ。この目の前にある壺の蓋の上に置いていたはずなのだが、なくなっているのだ。壺がなくなつたのなら中身目的で盗まれたと言えるのだが、なんせ盗まれたのが『漬物石』だけなのだ。

「これじゃ、汐様の美味しい紅白カブの御漬物が食べれないです」

今にも泣きそうな天音ちゃんの顔を見て、そつと優しく頭を撫でる。天音ちゃんは、僕の漬けた漬物が好きなのだ。だから天音ちゃんは、大好きな漬物が食べれなくなるがら悲しいのだ。目を細めながらも瞳を潤ませる天音ちゃんの姿を見て、僕は決心した。

「よし、決めた。妖怪の山に入る鬼に頼んで石を作って貰おう」

『おいおい、なんで妖怪の山に行くんだ。そこらへんにある石じゃ駄目なのか？ やっぱり、重さとか関係があるのか』

「うん。ちょうど良い重さじゃないと駄目なんだ。あの漬物には最適な大きさと重みは、そこらへんに転がってないしね」

壁に掛けてあるお気に入り薄茶色のコートを羽織り、軽く背伸びをしてから玄関へと向かう。天音ちゃんは下駄を履き、玄関の戸を開ける。一緒に来るかと思ったが、漬物の壺を守るらしく家に残ると言つて漬物の中身を見ていた。中にあるのは先週だったか、漬けておいた胡瓜だけなのだが。天音ちゃんを一人にするのは流石に可哀相なので、僕の相棒である絶を置いて行くことにした。彼は天音ちゃんと仲が良いので、安心して任せられる。そして、影の中に居るもう一匹の絶に御酒を持たせた。御酒を持たせた絶は、僕の影の中に入り眠り始めた。

『ククク。さあ、行こうか』

「うん、そうだね七夜。天音ちゃん、行ってくるね」

「行つてらっしゃいませ。汐様、七夜様」

そうして、僕らは妖怪の山へと向かう。妖怪の山の途中にある森の中で、良くご飯を食べにくる妖精たちと出会った。悪戯好きの妖精達だが、僕に良くなつているらしい。ちなみに里の人も良く来るので、そろそろ店でも開こうかと思っている。

「へえ、漬物石がなくなっただ」

妖精達に漬物石紛失事件を話したことで、妖精達が沢山の石を持って来てくれた。だが、どれも僕の探している重さの漬物石はなかった。

『妖怪の山に住む鬼神なら、作って貰えると思ったんだけどないと思うか』

「うにゃ、いると思うニヤスよ」

ネコミミ付けた妖精が答えるのを見て、なんだかすごく違和感を感じた。何故にネコミミ付けているのかと、本気で思ってしまった。さらに、言語が凄くおかしいような気がするのだが、僕の気のせいなのだろうか。それとも、疲れているのか目眩がした。

「どうしたニヤスカ？ ご飯の神の人」

『汐よ。俺も疲れているのだろうか、コイツが妖精に見えない』

「七夜、君はきつと疲れているんだよ。そして、僕もね」

僕らは溜め息を同時に吐き、目の前の妖精をジト目で見つめた。でも、それに気付かず楽しそうに笑っている。この子と一緒にいると、本当に疲れてしまう。

「さて、山に向かおう」

「行つてらっしゃいでニヤス」

「『はあ……………』」

溜め息と同時に山の方へと向かった。多くの妖精が楽しそうに着いて来たのだが、目の前に山が見えたと同時に消えた。多分、彼女たちも山に登るのは嫌なのだろう、あんな場所に行くよりかは森の中で遊ぶ方が楽しいのだろう。取りあえず、僕らは目の前にある妖怪の山に登ることにした。

「へえ、この川にいる魚って大きいね。ここで釣りとかしたら、最高だろうな」

木々が広がる中、綺麗な川が流れている。僕のいた世界では川は汚れ、自然はあまりにも少なかった。でも、この世界——いや、時代はとても自然豊かで、とても住み心地が良かった。

『ああ、確かにその通りだな。ここの空気は美味しいし、ここで釣りをしながら天音と一緒にご飯を食べるとか、最高だろうな』

想像してみると、とても楽しそうな風景が広がった。いずれ一緒にここに来ようと思いつつも、山頂に居ると言われる鬼神に会う為に歩き始めた。しばらく登っていると何やら此方に向かってくる気配を感じ周りを見渡すと、何やら白い物体がこっちに向かってくるのが見えた。

「そこまでです！！ この山から出て行きなさい、人間」

目の前に白い布地の巫女服に近い服を着た、犬のような白い尻尾と耳を生やした女性が現れた。なんだろう、涙が出始めた。こんなに嬉しいのは何年ぶりなんだろう、僕はその場でうずくまり泣いてしまった。

「え！？ な！？ ええ！？ どうしたんですか」

急に泣き出した僕を見てどうしたら良いのか分からず、両手を上下に振りながら慌てていた。

「いや、僕を人間と見てくれる妖怪がいて、凄く嬉しくて……ありがとう」

僕は目の今の妖怪を抱きしめた。急に抱きしめられた犬のような妖怪はビックとしていたが、すぐに気持ち良さそうにすり寄って来た。

『何故こうなったか知らねえが、いい加減話を進ませたいから二人とも離れな』

七夜が呆れた声で言って来た。それに驚いてか、抱きしめていた妖怪が離れた。それは、驚くに決まっている。彼女から発する神々しい気に、驚いてしまったのだろう。

『我らは神だ。狂い神と喰らい神。我らの事は知っておるな』

とても楽しそうに言う七夜と、驚きのあまり尻もちをついて怯えている目の前の妖怪に、どうすれば良いのか悩みつつも自己紹介することにした。

「僕の名は紅山 汐。この右腕に封印されているのが、紅山 七夜。宜しくね」

「え、あ、はい！！ わわわわ、私は犬走いぬばしり 桔梗きぎょうと言います。先程

は失礼いたしました」

急に土下座をしたので驚いてしまったが、すぐに桔梗のそばに向かい頭を優しく撫でる。

「別に気にしなくて良いよ。僕の方も急に抱きついてごめんね、嬉しかったから。だから、頭をあげてよ」

「うう、宜しいのですか？ 私のような白狼天狗を御許しになられるのですか」

涙眼で答えてくるので、僕は無言で頷いた。だって此方に非があるのだ、許す許さないの問題ではないと思う。神様だからって許される行為と許されない行為は、ちゃんと自覚している。その中で、僕が先ほどした行為は許されざる行為だ。桔梗が頭をあげたと同時に、今度は僕が土下座をする。

「神として、人としてやってはいけない行為だった。誠に申し訳なかった」

「はいいいいいいいいい！？ そんな、私こそ、そんな事気にしてませんから！！ 逆に、汐様なら最後まで……って何言っているんだ私はあああああ」

桔梗さんが立ち上がったと同時に土下座をしたので、かなり混乱している。そんな状態を見て七夜が楽しそうに笑っていたが、話が続かない事に気付き、桔梗さんに対して優しく、それでいて楽しそうに言う。

『取りあえずだ。話しが進まないから、俺から話をする。この山に

住む鬼神に会いたいのだが、今この山に居るか』

先ほどその言葉を聞いて、急に桔梗は固まった。そして、僕は立ち上がりズボンについた汚れを叩き落とした。

「え、鬼神ですか？ 何の用で」

「漬物石を作ってもらいに来たんだよ」

その後、事の始まりを説明した。僕らの説明を理解してもらえたのか、黙って頷いた。

「解りました。では、ちょっと天魔様に伝えて来ますので、少々お待ち下さい」

そう言つて、桔梗は飛び立ってしまった。その間が暇なので、川を泳ぐ魚を見ながら素手で捕まえた。調子が良いので何匹も捕まえる。流石に御土産なしに作ってくれなど調子の良い事を言うのは、馬鹿がすることである。この川魚とお酒を御土産にしようと思つて

「お待たせいたしました。通行許可を貰いましたので、ご案内いたしますね」

背後から声が聞こえ振り返ると、桔梗が魚籠を持ってやって来た。どうして僕が魚を捕まえていたのが分かったのか全くもって分からないが、桔梗は満面の笑みで答えてくれた。

「私の能力は『千里先まで見通す程度の能力』なんです。先ほど魚を捕まえているのを見て、私の作った魚籠を持って来たんです」

「なるほど、とても便利な能力だね。さて、魚を魚籠に入れてから行こうか」

そして、僕らは山頂まで向かった。桔梗さんがどんな子なのか、天魔様と言う妖怪がどんな方なのか、いろいろなことを聞きながら歩いて向かう。桔梗さんはとても楽しそうに話しているので、こっちも楽しくなってきた。そんな中、桔梗さんが楽しそうな声で聞いてきた。

「汐さんの住んでいた第一世代は、どんな所だったんですか」

「……。僕のいた世界は、ツマラナイ世界さ」

そんな事を言ったら、あの日の光景が頭を過ぎった。あの村にいた人たちの『我らを喰ってくれ』と言う言葉。そして、僕が壊れ、全てを喰い殺した時の風景と匂いを思い出してしまった。

『汐、ここはもうお前の生きて居た世界じゃない。過去のことは忘れる』

七夜が気だるい声で言った。桔梗さんも聞いてしまった事に後悔したのか、申し訳なさそうな顔をしてていた。

「ああ、そうだね。でもね、忘れる事は出来ないよ、七夜。忘れると言うことは罪を投げ出すことだからね」

微笑みながら僕は前を見続けた。決して、あの世界の事は語らない。語った所で面白みなど全くない話だからだ。

「別に気にしなくて良いからね、桔梗さん。君が悪いわけじゃない、僕のいた世界は本当にツマライ世界だったからね。気にしなくて良いよ」

「はい。汐さんがそう仰るのでしたら。さあ、もうすぐ山頂ですよ」

そう言つと、僕は山頂へと歩き始めた。何十分か歩いていると、ようやく山頂付近が見えた。それと同時に、凄まじい妖力を感じ取つた。多分この妖力こそ、この山に住む鬼神なのだろうと思つた。そんな事を思いながら山頂についた。山頂から見る景色はとても美しく、先ほど登つて来た山道の方を向くと、僕の住んでいる里が見える。

「凄いな、僕の住んでいた里が小さく見えるよ」

「ああ、そうだろう。で、里の神が私に何の用だい」

声の聞こえる方へと向くと、そこには額に一本角を生やした美しい女性が大きい岩に座つた状態で瓢箪を手に持つた状態で聞いて来た。

「貴方が、鬼神ですか。私は紅山 汐です、よろしく」

『俺は、紅山 七夜だ。よろしく』

「汐と七夜か。私の名は響子^{きょうこ}だ。此方こそよろしく頼む」

互いに挨拶を終え、僕は魚の入つた魚籠と影の中から御酒を取り出した。響子は何やら興味があるのだろうか、ジッと見つめている。

「これは御土産です。良かったらどうぞ」

響子の元へと向かい、御酒と魚籠を渡した。鬼は酒が大好きなのを聞いているが、本当に好きならしく目を輝かしていた。

「ほほお、これはこれは上等な御酒だの。さらに、川魚とは気がきく。我らでは捕まえることが難しくて、食べたかて見たかったのだよ」

とても嬉しそうに魚籠とお酒を見ていた。

「喜んでもらって此方も嬉しいです。で、頼みたい事があるのですが、宜しいでしょうか」

「うむ、何でも言うてくれ。汐の頼みなら何でも聞いてやろう」

本当に嬉しいのだろう、こんなに喜んでもらえる僕も嬉しくなった。喜んでいいる表情はとても美しく、本当に荒々しいと言われる鬼神にはとても見えなかった。

「実は漬物石を作って貰いたいのです」

「漬物石だと？ そこらへんに落ちている石じゃ駄目なのか」

『なんでも、大きさと重さが合わないと美味しい漬物が出来ないんだってさ』

少し悩んだ表情をしたが、すぐに頷いて作るってくれる事になった。同じ重さと大きさの石を作ってもらっている間に、僕は川魚を持参している竹串に差し川魚を焼き始める。香ばしい匂いが漂う中、

どうやら響子さんが石を作り終えたらしく石を持ってこつちにやつて来た。

「頼まれた石を作ったが、重さとか確認を頼んで良いかい」

「はい、良いですよ。此方も出来上がったので、良かったら食べてください」

そう言つて僕は漬物石の大きさと重さを確認、響子は焼き立ての川魚を食べ始めた。とても美味しそうに食べているので、僕もお腹が空き始めた。

『家に帰ったら、ご飯にしようぜ』

「うん、そうだね。響子、漬物石ありがとうございます。重さも大きさもちょうど良いです」

「そうかい、それは良かったよ」

美味しそうに御酒を飲み、いつの間にか桔梗と一緒に焼き魚を食べている。

「僕は帰りますね。今度、僕の家に来てください。美味しい川魚を使った料理を作りますので」

僕は漬物石を手に取り、空を飛びながら里の方へと向かった。二人とも食べるのに夢中らしく、全く気が付いていなかった。でも、美味しそうに食べているのだ、その邪魔をするのは僕はいけないと思っている。

「さて、天音ちゃんの元へ帰ろう」

『ああ、美味しい漬物が俺達を待っているぜ』

そして僕らは里へと返って来た。その後は、天音ちゃん達と一緒に紅白カブの漬物を作り、里の人たちと妖怪の山の鬼神や天魔さんに配ったりした。

「やっぱり、汐様が作った漬物は美味しいです」

「ご飯粒を頬に付けながら、赤カブの漬物を美味しそうに食べている。こうして僕らは、美味しい紅白カブの漬物を食べる事が出来たのだった。」

四話 妖怪の山へ（後書き）

はい、漬物石ですね。

設定上、汐の作る物は最高級の美味しさです。

そして、漬物もその一つ。

そんなこんなで、次話は一気に時間軸を飛ばそうかと思っています。次話が終わり次第、キャラクター紹介でもしようかと思っています。

では、また次回に会いましょう ノシ

五話 里襲撃？（前書き）

最近、案が浮かぶけど、それをどうまとめるかに時間がかかります。

さて、今回はオリキャラ＋東方キャラが一人（？）です。

読めばわかるさw では、あとがきで会いましょう

五話 里襲撃？

時間の流れは常に一定の速さで流れている。その流れを止める事は出来ても、流れを逆にすることは出来ない。つまり、過去から未来へと時間は流れるが、未来から過去へと戻るように流すことは出来ないのだ。何故こんな事を言っているのかと言うと、僕とした事がついっつかりと、この目の前の少女に見られたのだ。それもずつと隠していた人間としての能力を見られてしまったのだ。

「お願い致します！！ 神様である貴方様方のことを綴らせて下さい」

さて、事の経緯を説明するでしょう。それは、僕が手打ちうどんを食べて居る時のことだ。油揚げをのつけたこのうどん、皆も知っているであろう、きつねうどんだ。

「汐様、とても美味しいです！！ これはなんて言う料理なんですか」

美味しそうに油揚げを食べている天音ちゃんが、僕の方をキラキラと瞳を輝かせながら見つめている。これって、まだこの世界には存在しないんだよね。あるとすれば『かけそば』とか『かけうどん』くらいしかないと思う。

「これは『きつねうどん』と、いうんだよ」

「きつねうどん……なんで、きつねうどんと言つのですか」

『それはな、狐の好物である油揚げがのっているからだ』

七夜が楽しそうに説明した。本当なら僕が説明するはずだったのだが、七夜に奪われてしまった。

「まあ、そう言うことだよ。でも、美味しいねえ」

「はい！！　美味しいです」

そんな美味しく食べていると、僕の体の中で何かが暴発したような気がした。どうやら絶が新しい物を生み出すのに失敗したのだから、何が起こったのか良く分からなかったが、取りあえずうどんを食べ終えた。

『おやおや、新しい武器が出来た見たいな。取りに行こうぜ、汐』

「うん、そうだね。天音ちゃんも来るかい」

僕がそう言うと、美味しそうに油揚げを口に頬張りながらキョトンとした目で見て来た。

『ああ、言ってなかったな。汐の中には窯があつてな、これからその窯に行くんだ。面白い物が見れるぞ』

天音ちゃんがうどんをすすり、最後の汁を飲み始めた。この汁を飲み終わるまで返事を待つ。

「ズルルル。はい、行きます」

『ククク。さて、行くか』

「うん、そうだね。今から開くから、ちょっと待ってね」

天音ちゃんが食べ終わつたと同時に、僕の影から黒と白の狼の形をした絶を出した。二人の絶が楽しそうにじゃれ合いながら一つになり始め、灰色へと色が変わり完璧の一つになった。そして、灰色の大きな狼の形をした絶がお座りの体勢を取ると、そこに門の形をしたモノが現れた。

「この門の中にね、凄い物があるんだよ」

「すすすす、凄い物ですか」

驚きながらも、尻尾をフリフリしながら僕のそばにやって来た。

「うん、凄い物だよ。さて、行こうか」

「はい！！　すつごく楽しみです」

そして僕は立ち上がり、門の中へと入った。そこで、僕は失敗してしまったのだ。まさか、今日がこの里の有権者の者が来ることを忘れていたと言うことだ。

「すいませーん。稗田家の者ですが、汐様は御在宅ですか」

門を通るとそこには大きな壺が置いてあつた。家一軒を丸のみ出来るほどの大きさの壺が真ん中に置いてあり、それを囲うように六つの大きな窯があつた。窯には一つ一つに『神』、『妖』、『霊』、

『魔』、『失』、『能』が掘られてある。

「これって、なんですか」

「これはね、能力を表わしてのさ。神力・妖力・霊力・魔力・能力を一文字ずつ掘られてる。能力とは、第一世代が作りあげた無限に生み出すことのできる『能力窯』喰らった事で、この中に入っている」

僕にとって一番の失態である。第一世代を全て喰い殺してしまった原因の一つである。そんな事を思い出していると、天音ちゃんが失と書かれた門の方へと向かい指を指した。

「この『失』は、なんですか」

「それはね、絶を生み出す為の窯だよ」

「絶さんを生み出す為ですか」

黙って頷いた僕を見て、天音ちゃんがこっちへと走って来た。その天音ちゃんを優しく抱きとめ頭を撫でる。そんな事をしていると背後からなんだか気配を感じたので振り向くと、そこには一人の少女が目を輝かせていた。綺麗な白い花柄の絵が描かれた黄色い着物を着た、可愛らしい少女が、筆と紙を持って興奮している。

「ここここここ、コレが、汐様の窯！！ 凄い、凄いです」

「え……ええ！？ 何故に、何故に阿爾^{あに}さんが」

このとき、僕は気が着いた。今日はこの里の有権者である稗^{ひえだけ}田家

の御息女である阿爾さんが遊びにやって来る事を、今この瞬間思い出したのだ。

と、言う訳なのだ。本当に僕とした事が、阿爾さんが来る時間を忘れていたとは、僕とした事がうつかりしていたよ。只今、居間で御茶を飲みながら阿爾さんと話し合いをしている。ちなみに門は閉じた。無許可でまた入られたら、どんな異変が起こるのか全く分からないからね。今回は僕のミスだから許して貰ったが、次は流石にない。

「お願いします。あの窯について書かせてください！！ 未来の為に、私の為に」

「うう、出来れば書かないで欲しいのだけど。これ、とっても危ない物だからな」

『ああ、出来れば書かないでくれ。下手をしたら、世界をすら喰い殺すほどの危ない物だからな』

二人に攻められ落ち込んでいる阿爾さん。でも、こればかりは書かないで欲しいのだ。

「なら、先ほどの窯について書かないと約束するのなら、絶についてなら書いても良いですよ」

「本当ですか！！ 本当に、書いて良いのですか」

先ほどまで落ち込んでいた阿爾さんが、元気を取り戻した。窯の事を書かれるよりかは、まだマシであった。なんせ『窯について書

かれること『過去を話すこと』になるのだ。何よりも、過去の事は誰にも話したくない。

「では、教えてください」

眼を輝かせている阿爾さんと油揚げを探す天音ちゃんを見て、なんとなく頭が重くなってきた。

「絶について説明をしま——」

家の外から警鐘音が聞こえる。悲鳴のような声と、何者かの叫び声が聞こえた。

「話しは後でにしよう。まずは、妖怪たちを追っ払うことが先決だしね」

玄関の戸を誰かが開いたと同時に、俺の影の中から金色の絶が飛び出し、眼をギラつかせながら外へと駆け出した。

「さて、僕らも行こうかな。阿爾さんはココにいて……っていても着いてきますよね」

満面の笑みで頷いた阿爾さんに、軽く溜め息を吐いてしまった。彼女にとって歴史を綴ることこそ、一番大切なのだと思っているのだ。

「では、天音ちゃんのそばを離れないようにしてください。天音ちゃんは、第二解放まで解放許可する。阿爾さんの屋敷まで御送りすること、良いね」

「はい！！ では、阿爾さん行きましょう」

とても楽しそうに微笑みながら、眼を輝かせる阿爾さんの手を握り外へと駆けだす。僕も後を追うように外へと向かうのだが、神力と霊力の差が大きいことを思い出した。

『寮が正常に動いているが、神力の生成率が100%で霊力が75%か。差が25%もあるか、今回は霊力以外を使用することにしようぜ』

「うん、そうだね。出来る事なら50%ずつが良かったけど、そんなの別にいいよね」

外から天音ちゃんの妖力を凄く感じる。ちなみに天音ちゃんは『空狐』と言う妖怪だ。本来は尻尾は無いらしいのだが、黄色い狐に憧れを持ち、自ら妖力で尻尾を作り色を変化させたいらしい。ますます凄いと思うよ、天音ちゃんの力って本当に凄いのよ。

さて、外へと出ると里の中を何匹かの白い狼が子供たちを追いかけている。どうしてこうなったのか分からないが、取りあえずその狼たちに向けて一撃を放つ。

「さてと『神魔の爪』行つて来なさい」

その瞬間、地面や家の壁やらに白銀の鋭い爪が狼たちの腹に突き刺さった。それを避けこちらへと襲いかかろうとした狼だが、突然目の前に現れた白銀の爪によって串刺し状態になって絶命した。

「ふう。やっぱり、神力と魔力の調合はとても難しいね」

『いやいや。お前、簡単に調合してるじゃねえか』

呆れた声で言う七夜に対し、僕は微笑みながらゆっくりと何匹もの狼を狩り続けるのだ。歩きながら一匹一匹を確実にしとめて行く、目の前に狼の群れが誰かを囲んでいた。誰を囲んでいるか見て見ると、そこには緑色羽衣を着た青年が紅い刀身の刀を抜いた状態で立っていた。その青年は威嚇しながらも、背後で倒れている紅衣着物を着た白髪の女性を守っていた。

「あれ、見ない顔だね。ちょっと援護してくるかな」

『ああ。窯の調合を神魔から妖魔に変えておいたから、いつものアレが出来るぞ』

「そつか。じゃ、いつも通りの行くかな。『妖魔の手』よ、敵を潰せ」

宣言の瞬間、青年を囲んでいた狼の群れの上空に複数の紅い握り拳を作りだし、敵めがけて降り落とした。不意打ちである為、狼の群れは気付かれずに全滅させた。

「つな！？ 一体誰だ」

目の前で起きた事に驚きながらも警戒は怠らない姿を見て、まずまず目の前の青年に興味を持ってしまった。僕はゆっくりと目の前の青年に向けて歩き出した。微かだが妖力を感じたので、彼が妖怪である事が分かった。

「やあ、その妖怪さん。怪我とかしてないかい」

「あ、ああ。私は大丈夫だ。それより、この子をどこかに休ませた

いのだが」

まず、妖怪であると気付いた事を聞くかと思いきや、白髪の少女の心配をするのに関心した。こんな妖怪を式神として向かい入れたいと思つてしまった。さて、彼は警戒を解いてくれたのか紅い刀身の刀を鞘に戻した。

「なら、すぐ近くに僕の家があるよ。そこで良かったら、案内するからついて来て」

「分かりました、案内を頼みます」

そして、僕の家に向かう事になった。当然だが白髪の少女は青年が背負っている。どうやら、他にも狼は天音ちゃんや里の人たちが戦っているようだ。

「ここだよ。さあ、今すぐに布団引くから待つてて」

「私も手伝います」

布団を引き終え、少女を休ませる。その間に僕は自己紹介を始めた。彼の名は「衣乃月^{いのつきてんよ}天夜」と言い、鬼の妖怪らしい。妖力は天音ちゃんよりは弱いが、大妖怪と行っても良いほどの妖力を持っている事は確かだ。

「ほほお、妖刀を扱う一族か……不思議だね、式神にならないか」

「ぼそつと、式神にならないかって言わないでください。それに、私のような妖怪を式神になど」

そんな話を話していると、玄関の戸が開く音が聞こえ其方へと振り向くと、天音ちゃんが楽しそうに微笑みながら帰って来た。

「汐様、阿爾様を御屋敷まで御送りいたしました……………あれ、天夜兄さん」

「天音ちゃん？ まさか、汐さん彼女も」

「ああ、天音ちゃんも式神だよ」

信じられないのか、口を開いたまま固まっていた。そんなに驚くことなのだろうかと思っただが、式神として承諾してくれた。天音ちゃんがいるからという理由らしい。天音ちゃんとは、どう言う関係だったのか気になるが、僕はあえて聞かないことにした。

「僕と天音さんの関係が気にならないのですか」

式神としての契約を終えた天夜は、首をかしげながら問いかけて来た。普通は聞くのが当たり前なのだろうが、僕らには僕らの決まりが存在するのだ。

「僕らは人の過去を無理やり知ろうとしない。それがココでの決まりだよ」

「はあ、それは一体どう言う」

『人や妖怪と言った、自我を持つ者は謎を抱え込む。謎があるから人生は楽しいのさ。だから、俺達は「互いの過去に干渉はしない。何かしらの危機的状況下のみ干渉を認める」と言う約束をしたのだ。それ故に、我らの式となった以上、決まりは守ってくれ』

七夜が真面目に話している。こんな七夜見た事も聞いた事もないのだが、多分こんなこと滅多にないのだと確信した。

『汐……言いたい事があるなら、はっきり言いなさい』

「いや、珍しいなと思ってな」

『ああ、今回は真面目になりすぎたな。ククク。では戻るとして、これからもよろしく頼むぞ、天夜』

七夜が元の通り楽しそうに言うのを聞いて、天夜はゆっくりと頷いた。そんな中、布団の中で休んでいた少女が眼が覚めたらしく起き上がった。

「ここは……。そうだ、私は天夜さんと一緒に狼の群れに襲われて」

「やあ、起きたかい？ 今、御粥作るから待ってて」

台所へと向かい、窯に薪を入れ火を焚く。その間に天音ちゃんと天夜が説明した。ああ、里を襲った狼ですか？ 全部喰い殺しましたよ、黄金の狼がね。今は里の人が被害状況の確認をしている。もうすぐ夕方なのに、皆頑張ってくれている。僕が出来るのは、皆に温かいご飯を振る舞うことくらいしかない。今は、起きた女の子の為に御粥を作る事だけだ。里の皆の分も出来てるので、後で絶に運んでもらうでしょう。

「ほら、出来上がったよ」

御粥を器によそり、箸と一緒に少女へと持っていく。温かな湯気

と御粥から出る良い香りが、食欲をさらに掻き立てる。僕が少女に渡すと、一度は戸惑っていたが、お腹が鳴ると同時に無我夢中で食べ始めた。美味しかったのか、涙を流しながら黙々と食べる姿を見て、優しく頭を撫でながら言う。

「今日から、君も僕の家族だよ。どんな辛いことがあったのか知らないけど、いっぱい食べて、いっぱい泣いて良いんだよ」

「グス……………ふあい」

涙を流しながら、彼女は食べ続ける。少しでも良い、彼女の悲しみを少しずつでも取り除ければそれで良いのだ。

そして、僕は一緒に暮らすことになった。まあ、一時的だがね。でも彼女——藤原ふじわら妹紅もこうと天夜、そして天音ちゃんと言った明るい子たちと一緒に暮らせるのだ。きっと楽しい時間を過ごせると信じている。

「きっと、幸せな時間が過ごせるよね。…………結衣ゆい」

誰にも聞き取れない声で、僕は呟いたのだった。

五話 里襲撃？（後書き）

どうも、今回は稗田阿爾さんと妹紅さんが出ましたね。

オリキャラの衣乃月天夜さん、天音ちゃんの紹介などは、後日になります。

五話の次は、オリキャラ紹介コーナーとなります。

では、次回で会いましょう ノシ

キャラ紹介コーナー（前書き）

タイトルのままです。

さて、今回は私も出ますよ。

彼女とですがね（汗

キャラ紹介コーナー

瑠羽：「さて、始めました。第一回 登場キャラ紹介コーナー」

阿爾：「今回は、紅山 汐様についての紹介です」

瑠&阿：「では、どうぞー」

【プロフィール】

名前：紅山 汐こうやま しお

誕生日：5月10日

年齢：約十二億歳

性別：男

種族：人間と神の両方

能力：ありとあらゆるものを喰らう程度有能力

身長：168?

体重：55?

好きな物：なし

嫌いな物：なし

【容姿・格好】

童顔なため、いつも少年と言われる。だが、コレでも一様は青年である。ボサボサの茶色の髪と、蒼い瞳をしている。

右腕だけを露出した茶色のコートを着ている。右腕には白い包帯

が巻かれており、その包帯には均等な位置に刻印が打たれている。

いつもは里の人が作ってくれた右腕を露出した藍色の着物を着ているが、極まれに白いシャツに灰色の長ズボンを着たりする。

【性格】

温厚である。人間や妖怪を優しく受け入れる。

他人の過去を知ろうとはしない。そして、自身も過去を話そうとはしない。

恩を仇で返すことはせず、必ず恩で返します。

売られた喧嘩は、買いません。平和主義な優しい青年であります。

瑠羽：「こんな感じかな」

阿爾：「今回はココまでです」

瑠&阿：「また会いましょう ノシ」

キャラ紹介コーナー（後書き）

今回のように一人ずつ設定紹介をしていききたいと思います。

では、皆さま。また次話で会いましょう ノシ

六話 幻想の始まり（前書き）

どうも、話の始まりから誰か死んでいます。

では、どうぞ〜

六話 幻想の始まり

アレから何年経っただろうか。里の者は天夜と妹紅を受け入れてくれた。僕らにとつては何年単位だが、人間にとつては何十年、もしくは何百年も経っている。その間にも、いろんなことがあった。天音ちゃんの死が一番印象に残っている。里に女郎蜘蛛が現れ、里の子供たちを殺そうとしたのを、天音ちゃんが守っていたのだが、他の妖怪たちの攻撃を受けて死んでしまった。式神としての契約で、今は僕の包帯の中で眠っているが、流石に一对二十は酷過ぎる。あまりの怒りで、ソイツ等を潰したのは言うまでもない。徹底的に潰してあげましたよ、あの時の悲鳴を聞かせてあげたいくらいね。

さて今、僕らは一人である場所にいる。人っ子一人いないこの場所で、紫と合流する約束だ。天音ちゃんが七夜の隣できつねうどんを食べていると聞いて、なんだか軽く溜め息を吐いた。包帯の中には一つの世界があり、そこに天音ちゃん達は住んでいるのだ。

「はあ、天音ちゃん……まあ、良いか。そう言えば、最近になって神力のバランスが変になったよ」

『汐を崇める人間が急増したからな。別窯を用意しておいたから、そっちに神力を移しといた。今まで通り、調合用の『神の窯』は起動してるぞ』

今現在、僕は里の人から『食の神』として崇められています。賽銭箱がウハウハ状態です。天音ちゃんを崇める人もいたけど「私ではなく汐様を崇めてください」と言っつて、天音ちゃんを崇める人達が、僕を崇めるようになった。

「はあ、なら良いけどさ。窯の全機能を停止。……停止確認。神力窯の起動を開始。開始確定まで、5、4、3、2、1、開始確認完了。神化成功」

『ある意味で、お前はロボットと間違われそうだな』

愉快に笑いながら言う七夜に対し、僕は溜め息を吐きつつも神力の調整を行う。実は僕の中にある六つの窯の他にも窯は生み出すことができ、使用することが出来るのだ。だが、その窯を使用するには元ある六つの窯の機能を停止させなければならぬ。

『停止させないで、窯の機能を完全に操れば良いのだがな』

「出来なくはないけど、リミッター外さないと駄目だからね。下手したら、以前見たいに『終わりへの始まり』が起きてしまうから」

苦笑しつつも、黒き物体を僕の体に纏わりつかせながら力をコントロールしている。意外と上手くコントロールできるので、神の窯よりは扱いやすかった。

『さて、後は紫を待つだけだな』

「そうだね。もうすぐだ……幻とされ、忘れ去られし者たちが集う幻想の故郷。幻想郷と言う世界の誕生が」

どんな世界になるのか、僕らはとても楽しみであった。絶も楽しみなのか、クルクルと回っていた。妖怪たちにとって、人間たちにとって、それがどのような世界になるのか。そして、どのような未来が待っているのか、とても楽しみだった

「ごめんなさい。遅れて申し訳ありませんわ。汐と七夜、お久しぶりね」

目の前から空間の裂け目が現れ、そこから一人の女性が現れた。紫と白を基調とした服を着た金髪の女性。彼女こそ僕の待ち人である、八雲紫である。

「やあ、久しぶりだね。でも、遅かったね。準備に手間がかかったのかな」

「ええ、下準備も万全ですわ。後は、ここにいる龍神様に――」

――お兄ちゃんなの？――

遙か上空から聞き覚えのある声が聞こえた。とても懐かしく、柔らかな女性の声。忘れようにも忘れる事が出来ない、あの惨劇の傍観者の声だった。

「え、その声は……結衣なのか」

「お兄ちゃんだー!! お兄ちゃん、逢いたかったよ」

遙か上空から一匹の桃色の鱗を持つ龍が現れた。その後を追うかのように、黄金に輝く龍がついてくる。

『姫、お待ちくだされ』

青年のように透き通った声で言う蒼い鱗を持つ龍を見て、紫は頭を下げていた。僕はと言うと、ただ目の前に降りて来た桃色の龍を見つめながら、涙を流しながら見ていた。

「結衣なのか！？ 本当に、結衣なのか」

「そうだよ！！ お兄ちゃん、ずっと逢いたかったんだよ！！ お兄ちゃんを封じてから、何億年もずっと、ずっと、ずううつと、待ってたんだよ」

桃色の龍が光だし、人間の姿へと変わる。そこに居たのは、白いワンピースを着た桃色のショートヘアの少女が涙を流しながら此方を見ていた。

「結衣、ゴメンな」

僕は優しく結衣を抱きしめた。僕が犯した罪の重さを知る、たった一人の少女。僕を封じる為に人間を止め、龍神となった少女。僕が眠っている間、眼が覚めるのをずっと待っていてくれた、優しい少女。

「お兄ちゃん、逢いたかったよ。ずっと、逢いたかったんだよ」

「僕もだよ。僕もずっと逢いたかったよ。でも、出るのが怖かったんだ。また僕が、全てを喰い殺してしまう。その事がずっと頭の中に過ぎつて、出るのが怖かったんだ」

僕は泣きながらも、抱きしめ続ける。結衣は僕の頭を撫でながら、一緒に泣いている。

「私も。私も、ずっと後悔してた。お兄ちゃんを封印して、私一人だけの世界を永遠に生き続けて、ずっと、ずっと後悔し続けた。お兄ちゃんと一緒に生きたかった」

「ああ、ゴメンな。ゴメンな……」

それからしばらく時間が過ぎ、互いの約束を思い出し僕らは離れた。結衣は、涙を拭いて微笑みながら僕の頬に触れる。

「約束だったよね、結衣」

「うん。御願い、私を——喰らって」

周りにいる者にとって、信じられない言葉だったのだろう。全員固まるのは当然のことである。でも、これは契約なのだ。彼女を喰らう事で、僕の本来の力が解放される。妖ノ窯を守るのは、天音ちゃん。霊ノ窯と魔ノ窯は、名前忘れたが双子の子だった気がする。そして、神ノ窯を守るのは、結衣なのだ。この四人が揃う事で、紫の夢である『幻想の郷』が完全な物となるのだ。

「あの日の約束、叶えてくれますか？ 私が愛した人」

「うん、叶えるよ。皆が待つ所へ送ってあげるね」

互いに頷きゆつくりと唇を重ねる。結衣の唇から甘い苺の味がする。柔らかな感触が離れ、互いに見つめ合う。白い光の粒子が彼女を包むように現れた。

「また、会えるよね」

結衣の優しい声が、僕の心に突き刺さる。また会えるのかなんて、僕には分からなかった。でも、僕は頷いた。また会えると信じたいから。だから、僕は結衣に言う。

「うん、また会おうね」

結衣は微笑みながら消えていく。段々と姿が消えていくのを見て、涙を堪えながら微笑む。光の粒子は僕の中へと入って行くのを見ると、結衣は一言を残して完全に消えた。

——ありがとう、お兄ちゃん——

そして、時間はしばらく過ぎた。紫たちにとって何が起ったのか、なんでこうなったのか、きつと分からないであろう。だから、僕は何も言わずに神力を解放しながら紫たちの方を向いて言う。

「さあ、始めようか。紫、僕が出来る事は何でもするよ」

「いやいや、その前に結衣さんは——」

『結衣なら、俺のそばにいるぞ？　なあ、ゆ——お兄ちゃん！！
ココ凄いいね！！　皆いるよ、元気だよ、ご飯がウマウマだよ！！——
ほらな。コラ、結衣。天音と一緒ににはしゃがない』

一同絶句。ちなみに僕もです。なんでだろうか、こんな機能あったのですか。と、言うか天音ちゃん本気で楽しんでるのね。この包帯って、とても便利だね。軽く意識がなくなりかけたが、すぐに意識を取り戻して、何事もなかったかのように紫たちに言う。

「さて、さっさと始めよう。今のは何も無かった、良いね」

「いや、今——」

何か言おうとする紫と蒼い龍だったが、僕は軽く威圧をかけながら言う。多分、そんなに怖くはないと思うのだが、二人とも震えていた。だってこのままだと、また時期が流れるだけだからね。

「い・い・ね」

「はい！！ 分かりました！！ 今すぐ作業にかかります」

二人ともすぐに準備に入る。久しぶりに疲れがでた。ああ、こんな日は妹紅の頭を撫でながら、一日を過ごしたいなと思う。そんな事を思っていると、どうやら結界の準備が出来たらしい。

「さてと。じゃ、始めましょうか御二方」

そして、僕らは隔離世界を作り始める。ココを始まりとして大きな円を描くように一周する大結界。さらに、そこに龍神様の力でさらに強固になる。これこそ博麗大結界と後に言われる物である。

「幻想郷が……私の夢が叶ったのね」

「さて、では僕が最後のシメをするね」

先ほどまでずっと神力を解放していたので、結界の能力を維持する為の『最後のシメ』をやらなければならない。それは何かと言うと、この大結界の『終わり』を喰らうことである。『終わりなき幻想』こそ、紫の本来の夢である。この世に完全と言う物はない、全ては欠陥があるのだ。だからこそ、僕が結界の欠陥部分を喰らうのだ。今、完全な力を取り戻した僕にしかできない、たった一つの仕

事をね。

「さて、では……『頂きます』だね」

その瞬間、結界の終わりの詰まった集合体が僕の目の前に現れ、影の中にいる絶が飛び出し喰らった。その瞬間、僕の体に何かとてつもないエネルギーが駆け巡った。どうやら、コレがこの大結界の力みたいだ。まあ、食べちゃったし気にしないで良いよね。

「完璧のVでニヤス」

「猫妖精に持つてかれた」

何処からともなく現われた、あのネコ耳と尻尾を生やした妖精が僕の言おうとしたセリフを奪った。地面に膝をついて落ち込んでいる僕の上で、飛び跳ねながら楽しそうにどこかへと飛んで行った。

『結局、アイツ何がしたかったんだ』

「さあ？ でも、あんな妖精がいたなんて知らなかったわ」

こうして、幻想の始まりが訪れた。これから楽しい世界が続くのだろうと思うと、凄く楽しくて仕方が無かった。天音ちゃん達が、包帯の方からはしゃぐ声が聞こえながら、僕はまた深い溜め息を吐くのだった。

六話 幻想の始まり（後書き）

天音ちゃん、御苦労さまでした。

貴方はこれからもちよくちよく出番があります（七夜さん側で）

では、また会いましょう ノシ

七話 里の一日（前書き）

今回は、幻想郷と言う世界が出来てからのお話です。

大結界に反論する妖怪もいれば、汐の料理目当てに来る妖怪もチラホラ

汐の料理が食べたいな〜；；；

七話 里の一日

幻想郷が始まり、もう何年経つのだろうか。里の人は変わらず楽しそうに働いている。僕らもまた、そんな里の中で暮らしている。

最近だが、家の改装工事をした。もう築百年以上は経っているのだ、改装工事をしないと住めない。そんな訳で、今の家はとても広いです。部屋が今までは二部屋だったけど、今は五部屋あります。とても広くて快適に暮らしているよ。

さて、僕らはいつも通り家の中で休憩している。賽銭箱のお金を3分の2を貯金箱に入れ絶に預け、残りをお財布に入れている。今晚の夕食はとても楽しみで、何を作ろうか悩んでいる。

「あの、汐殿。^{かみしろさわ けいね}上白沢慧音殿が面会を希望しておりますが、どうなさいますか」

そんな事を考えている中、藍色の着物を着た黒髪の青年が僕の目の前に座っている。この青年の名は「衣乃月 天夜」である、俺の式神であり家族である。ちなみに、角が無いのに鬼であると言っているが、実際は鬼ではない他の妖怪ではないかと思う。どこからどう見ても、鬼には見えないのだ。妖怪の山に住む鬼との飲み会があり、鬼と天夜の飲み比べ勝負があった。鬼なら軽くイケる量だったが、天夜はすぐにダウンしたのだ。さらに一緒の席に居た他の妖怪たちには好かれると言うのを見て、彼はもしかしたら「ぬらりひょん」と言う妖怪ではないかと思っている。

「汐殿。どうなさいますか」

溜め息を一度吐いてからもう一度確認をする為に僕に言って来た。僕としては里の守護者と呼ばれる慧音さんが、僕らに何故会いたいのかわからないでいる。何もしていないのだが、もしかしたら何かの御誘いなのだろうか。

「汐殿！！ 如何なさいますか」

流石に痺れを切らしたのか、ムツとした表情で声を少し荒立たせながら言う天夜に、僕は考えるのを止めた。

「ゴメンゴメン。良いよ、御通しして」

「はい、分かりました。では、呼びいたします」

何事もなかったかのように立ち上がり玄関の方へと向かう天夜を見て、僕は微笑みなが湯呑みにお茶を入れ飲み始める。久しぶりの来客で、少し楽しみである。

「失礼するぞ」

天夜の隣に蒼い服を着た白銀の長髪の女性が立っていた。頭の上には不思議な帽子をかぶっており、彼女に似合っている。こんなにも似合う女性は多分、この子以外いないと思う。

「おやおや。久しぶりだね、慧音。元気そうで良かった」

「やあ、久しぶりだな。汐が元気そうで私も嬉しいよ」

この里で有名な慧音先生である。里の守護者にして、子供たちに勉強を教える教師をしている。里の人からも人気で、妹紅と良く食

事をしているほど仲が良いのだ。

「で、僕に会いに来た理由は何かな」

「ああ。その事なんだが、実は私の生徒たちが汐の授業を受けて見たいと言ってな」

『授業』と言う懐かしい単語を聞いて、一瞬だけ過去の記憶が過ぎった。遙か昔のあの日の忌わしき記憶の欠片。溜め息と共に吐き出し、過去を軽く記憶の倉庫に押し込めた。

「顔色が悪いが大丈夫か？ 体調が悪いのなら、少し休んだ方が良いぞ」

「いや、大丈夫だ。一回だけで良いのなら引き受けるよ」

「汐殿、御茶とお茶菓子をお持ちいたしました」

天夜が良いタイミングで御茶を持って来てくれた。過去の記憶にかかると、どうも調子が悪くなる。だが、第一世代の僕から言わせてもらえば、僕にとってアソコは地獄だ。だから、お——僕が全てを喰い殺した。結衣以外すべてを喰らったんだ。

「灰色の世界を思い出すとは、僕もまだまだ未熟だな」

「汐お、何言っているんだ」

後ろから白いワイシャツに紅いズボンを穿いている、慧音と同じ白髪のロングヘアーに大きな紅いリボンをつけた女の子が焼き鳥がのっている皿を手を持ってやって来た。

『第一世界の思い出さ。あそこは、本当に地獄だったなあ』

「そんなに地獄だったのですか、七夜殿」

御茶を飲み、天夜が首を少しかしげながら聞いて来た。あの日の記憶は誰にも話したくはないが、第一世界がどんな所だったかくらいは答えることにした。

「能力を持たない者を人とは認めず、物として扱う世界。能力者こそ人間であると言う、馬鹿げた世界さ。くだらない規律、くだらない政治家、人間をモルモットとして実験材料にする科学者。所詮は俺の餌にしかならなかったがな」

多分、こんな僕を見せたのは初めてではないかと思う。衝撃的な一言だったのか、一同絶句している。多分、雰囲気すら変わっていたのだろう、少し怯えていた。

「おっと、僕とした事が闇の部分を出してしまったね。ゴメンゴメン、あはははははは」

『笑いごとですまされないのが、お前の良い所だと思うぞ。まあ、昔のお前が見えて凄く楽しかったぜ』

いつもの空気に戻るまで、なんか時間かかったか忘れた。だが、いつも通りの空気に戻ったので話しを再開することにした。

「それで、僕は何を教えてば良いんだい？ 教える内容が分からないと、こちらとしても困るのだが」

「ああ、そうだったね。実は、数学を教えてあげて欲しいんだ」

教師として里の子達に数学を教える風景を想像すると、なんだか恥ずかしくなってきた。でも、教えるからにはちゃんと覚えて貰えるように頑張るとしよう。

「コレが教科書だ。読んでもらえるかな」

「良いですよ。では、ちょっと拝見」

数学と感じで書かれている教科書を手に取り、内容を確認すると簡単な計算式だった。これならなんとか教えられる。いきなり一次関数や二次関数を教えることになる、かなり最初から教えないといけないからね（理解しておいて欲しい所が多いので）。

「分かりました。では、明日の何時頃に御伺いすれば良いかな」

「明日の午後でお願いします。私も見学する形になるが良いか」

別に人が増えるだけだから、気にする必要はないと思い領いた。僕としては、教師として誰かを教えるのは久しぶりなので、緊張することが一番心配である。緊張しすぎて、変なことを教えないようにしないと。

『汐は、教えるのが上手いからな』

「七夜。君は僕を追い詰めるのが、本当に得意だね」

そんなこんなで、僕は慧音の依頼を受けることになった。まあ、僕なりの教え方で教えるから、分かりやすいだろうとは思うがね。

そして、当日の昼間になりました。天功はとても清々しい晴天で御座います。里の皆もとてもしそくに暴走しています。何故かっ
て？ それは……

「大変だぞ！！ 大量の妖怪が攻めて来たぞ」

「警備隊も何人が負傷者が出たぞ」

どうやら、里を攻めに妖怪の軍団が押し寄せてきているらしい。
でも、こっちは普通に授業が始まる。え、授業している暇はないっ
て？ 大丈夫だよ、天夜と妹紅に任せただから。あの二人には本気で
戦う許可をしたから、へまをしなれば大丈夫である。

「さて、授業を始めろぞ」

「「はあい」」

今回は里に居る子供たち全員がここで授業をすることになった。
その理由は簡単だ、ここが一番安全なのだ。

「では、教科書の三頁を開いてね」

こうして、授業が始まった。外ではどんちゃん騒ぎではないが、
気にすることなく、楽しい授業を始めるのだった。

side 天夜

今日は晴天だ。とても気持ちの良い風が吹く昼間、妹紅が焼いた

焼き鳥を食べながら御酒を飲むと言う楽しみを待っていたのだが、そんな事をさせまいと、森の奥から妖怪が押し寄せて来た。妖怪の山に住む烏天狗からその情報を手に入れ、今は里の出口付近で妖怪の群れが来るのを待ちながら、腰に背負った一本刀に触れながらジツと待つ。

「本当だろうな、嘘だったら承知しないぞ」

「あややや、これは本当のことですよ。私の信頼におけるスジからの情報ですから、間違いじゃないですよ」

漆黒の翼を生やした美しい妖怪の女性が『かめら』と言う物を持って降りて来た。この子の名は「射命丸^{しゃめいまる}文^{あや}」と言う、烏天狗である。

「おや、妹紅さんは何処に」

「ああ、妹紅か。妹紅なら里の中に入った偵察妖怪を、警備隊と一緒に探しに行ってるぞ」

刀を鞘から抜き、ゆっくりと刀身を舐める。鉄の味が口の中に広がるのを感じながら、敵が来るのを待ち続ける。

「天夜さん、本当は妖刀に魅入られてませんか」

「俺が妖刀ごときに魅入られるなど、絶対にあり得ないぞ。コイツはこうしないと、言うことを聞いてくれないんだよ」

そんな事を言っていると、目の前から何十——いや何百匹以上の妖怪が此方へと責め始めた。それを見て刀を鞘にしまい、いつもの

一言を言う。

「この数じゃ、物足りないが……まあ、良いか。行くぜ、千鬼一閃」

一瞬にして先ほどまでいた妖怪たちが、血しぶきをあげながらバラバラに切断されながら死んでいく。文の顔を見ると、絶句している。まあ、文ですら眼で追えないほどの速さで斬り殺したのだ。

「おいおい、この程度か。この程度で俺と戦うつもりなら、さっさと消え失せな」

俺の一言で目の前の妖怪たちが怯え始めた。どうやら、汐殿が言っていた通り「ぬらりひょん」なのかもしれない。将としての風格があるのだろうか。

「あら、皆どうしたのかな」

森の奥から少女の声が聞こえた。何だろうか、とてつもなく強い妖気を感じたのだが、つまらなくて溜め息を吐いた。

「雑魚か。つまらねえ。面白みもねえ」

「あらあら、酷い言われようね」

森の奥から現れた黒い球体を見て、刀に手をのせる。久しぶりに良い獲物が現れてくれたような気がしたが、結局は雑魚であることに変わらない。汐殿と共に数多の大妖怪と言われた者達を斬り伏せたのだ。勝てない敵ではない。

「常闇つてところか。俺の縄張りに手を出すとは、良い度胸じゃね

えか」

「あら、そうだったの。でも、あの結界のせいで、私達は困っているのよ」

どう困っているのか全く分らないが、取りあえず聞いてみることにした。どうせ、くだらないことだろうな。

「ほお、どう困っているんだ？　言ってみな」

「人間が私達妖怪の恐れを忘れ、私達が消える。そう思わない？　それに食糧が無くなるから嫌なのよ」

黒い球体が消え、一人の少女が現れた。白のシャツに黒いワンピースと言う物を着た金髪の少女が、微笑みながら俺を見ている。ちなみに、シャツとワンピースは、汐殿に教わった。

「ほお、ココでは人間を喰らうのは御法度だが、それでも喰らいたいか」

「ええ、私達に法なんて無意味よ」

楽しそうに言いながら黒い鳥を生み出す。どうやら、俺を殺して里の人間達を襲うつつもりらしい。まあ、里を襲うなんて事は、絶対にさせないがな。

「そうか、そうか。なら話は終了だ」

「ええ、そうね」

そして、俺らの戦いが始まった。

「おいおい。この程度で、俺を殺そうと思ってるのか」

「な、何よ！？ この強さ、貴方一体何者よ」

たった一分で勝負が着いた。目の前の少女を中心にして、黒い球体が俺を飲みこもうとして来たので、汐殿から作って頂いた刀で黒い球体を叩き斬った。それで今、この状態に至る。

「ああ、言ってなかったな。俺の名は、衣乃月 天夜。喰らい神の式神さ」

「あ、あああああああ！？ あの、神様の式神」

汐殿の事を聞いて、驚いている少女を見て溜め息が出てしまった。どこまで有名なんだ、あの神様。確か、喰の神様とか言っていた気がする。まあ、気にしない方が良いな。

「さて、土産には丁度良いから持って帰るか」

「え、ぎゃあああああああ」

少女の頭を鷲掴みした状態で、何事もなかったかのように里の中へと入る。ああ、そう言えばあのバラバラになった妖怪達は、もう消滅してるから掃除する必要はない。

「ほれ、文も来い。今夜は汐殿が『味噌煮込みうどん』とか言う物を作ってくれるらしいからな」

先ほどまで空気だった文だったが、すぐに俺のそばに現れて微笑みながらカメラを構えた。

「それは行かなくては！！　汐さんのご飯を無料で食べれるなんて、楽しみですね」

「喰らい神の料理……じゅるり」

頬から涎を垂らしながら想像する文と、驚掴みされている少女を見て溜め息を吐いた。ぬらりひょんとして、これからは生きていくことになるのだ、一様この少女に里を襲わないと言う約束を結び、目的地へと向かう。目的地は、もちろん汐殿の待つ寺子屋である。

「ああ、汐殿……ぬらりひょんって、大変なんですね」

そんな事を呟きながら、汐殿を迎えに行くのであった。

side 汐

「はい、今日はココまで」

「「ありがとっございました」」

里での争いが終わったと同時に、此方の授業も終わった。天夜の

事だから、一閃を使って全てを薙ぎ倒したに違いないが、終わったのならそれで良い。

「さてと……慧音さん達は、まだ帰ってきてないか」

玄関の戸をあけると、目の前に異様な光景が見えた。

「汐殿、御迎えに参りました」

「え、あ、うん」

天夜が、金髪の少女を右手で鷲掴みをし、烏天狗の射命丸 文が左手を握りながら微笑み、後ろには妹紅が此方を見つめ、その後ろで慧音が涎を垂らしながら何かを想像していた。

（ああ、今日は6人前を作らないといけないのか）

溜め息を吐きつつ、皆と共に家へと向かう。なんだか家族が増えたようで嬉しいのだが……まあ、気にするのを止めるか。

「さて、今日は『味噌煮込みうどん』だね」

そして、僕らは家へと着き、皆で味噌煮込みうどんを食べた。金髪の少女ことルーミアが新たな家族として加わり、平和な一日が続くのだった。

七話 里の一日（後書き）

味噌煮込みうどん……夜中に書いていると腹が減ってしょうがない。
でも、アレはとても美味しいんだよねw

さて、今回はこんな感じです。次回からは、天夜が主人公としてストーリーが進みます。何故かって？ それは、次回のお楽しみですw
では、また次話でお会いいたしましょう ノシ

八話 汐が風邪をひく 前編（前書き）

皆さまお久しぶりです。

今回はちょっと長くなってしまった為、前後編で分けました。

今回は、天夜視点と???視点でのお話です。

では、前編です。また会いましょう

八話 汐が風邪をひく 前編

早速で悪いが、汐殿が風邪を引いた。神様が何故に風邪を引くのかと考えただが、どうやら人間状態で生きているらしい。神様なのに人間として生きてる時点で不思議ではあるが、汐殿がそう生きたいと言うのだ。それを尊重するのも式神としての役目である。

「ゴホゴホゴホ」

畳の部屋で汐殿が布団の中で寝ている。汐殿の額の上に冷たい布が乗っかっている。妹紅は胃に優しい御粥を作る為に材料を買いに行き、ルーミアが『肉を捕りに行く』と言って、山へと急いで飛んで行った。どうして風邪を引いた汐殿に肉を食べさせるのか分からないが、気にするのを止めた。さて俺はと言うと、汐殿の額に冷水で濡らした布を乗せ換えている。

「大丈夫ですか!? はあ、一体どこで風邪を貰ったのだから」

「ああ、大丈夫だよ。天夜、君に頼みがあるんだけど」

優しくも苦しそうな声で、俺に何か頼みがあるらしく問いかけて来た。俺にとつて、汐殿は主である。頼みを断るほど、俺は非道ではない。

「なんで御座いますか、汐殿。何でも行つて下さい」

「迷いの竹林に医者が居るらしくてね、その医者に会いに生きたんだけど……ゴホゴホ。今の僕じゃ無理だから、連れて行つて欲しいんだ」

病人が医師に会いに行くのは当たり前ではあるが、こんな状態の汐殿を運んで迷いの竹に行くのは流石に不味いと思う。だが、主の願いである。叶えてあげない訳にはいかない。

「迷いの竹林で御座いますか？ 分かりました、いつものアレで宜しいですね」

「ああ、宜しく頼む」

そして、俺は汐殿は家に置いて家を出て行った。迷いの竹へと向けて歩き始めた。しばらく里を歩いていると、妹紅が沢山の荷物を持って居るのを見つけた。

「お、天夜じゃないか。汐の看病は大丈夫なのか」

「ああ。汐殿の頼みで、ちと迷いの竹に用事があつてな。看病を任せても良いか」

迷いの竹林と聞いてムツとした顔になったが、理解したらしく溜め息を吐いた。どうやら、何かしらの因縁でもあるのだろう。でも、俺はあえて聞こうとしない。なんせ、他人の過去を知った所で面白いとは思えない。汐殿の過去に興味はあるが、汐殿が話してくれるまでは聞こうとしない。なんせ、考えるだけで楽しいのだ。『謎があるから人生は面白い』とは、確かにその通りみたいだ。

「ああ。それなら、急いで帰るか。んじゃ、またな」

「おう、汐殿を任せた」

そう言つて、俺達は別れた。さて、里を出て迷いの竹林ある方角へと歩いている。道中で妖怪たちに出会ったが、何事もなく迷いの竹林に着いた。妖怪達が『汐殿が病氣である』と知つてか、山の木の実などを持つて、里へと向かつている。里の中では襲わないと約束をしているので、襲うことはないと思うが、慧音殿がなんとかするだろうから、今は気にするのを止めた。

「はあ、ようやく着いたか。ここが迷いの竹林か……良い所じゃないか」

目の前に広がる竹林に、少しだが興味が出て来た。こんなに立派な竹が生えているのだ、さぞ立派なタケノコが沢山取れるだろう。そのタケノコを使つた汐殿が作る、お焦げがついたタケノコご飯を想像すると、涎が出てしまった。

「おっと、こんな事してられないな。ちと、急ぐとしよう」

竹林の方へと向かつて歩き始める。竹林の中は意外と涼しく、沢山の兎の妖怪が此方を見ているのが分かる。兎どもが俺の目の前に姿を現し、ジッと俺の顔を見つめていた。

「おい、兎ども。お前の主のいる永遠亭へと案内しろ」

俺の一言を聞いて、兎どもが振り返り飛びながら走り出した。俺はその後を追うように歩く。途中で見失うと、兎どもが茂みから現れ案内をしてくれる。

「もうすぐ、永遠亭に着くか。ありがとよ、兎ども。今度、土産を持って来てやるからな」

それを聞いて、兎たちは嬉しそうに飛び跳ねながら、どこかへと飛びながら消えてしまった。汐殿に頼んで兎の好物を聞いておいた方が良さそうだな。

さて、しばらく歩いていると目的地が見えて来た。とても立派な屋敷と言ったところだろうか、俺の住んでいる家の2倍ほどの大きさである。

「ここだな。 絶、主を運んできたか」

「グルル」

俺の影から黒のオーラに覆われた狼が、汐殿を銜えた状態で現れた。大きさからすれば、うん、かなりの大きさだな。家1軒くらい大きさだ。

「おっし、汐殿を此方へ」

絶が俺の言う通りに汐殿を渡したので汐殿を背負い、目の前の家の戸を叩く。まだ来る気配がないので、絶の頭を撫でながら待っていると、ようやく誰かが此方へとやって来る気配がした。

「どちら様かしら」

家の中から女性の声が聞こえた。どうやら、此方へと歩いて来ているらしいので、少し焦らせるために今の状態を言うことにした。

「病人が居るんだ、早く来てくれないかな」

「それを早く言いなさいよ！！ 今行くわ」

それを聞いて走っている音が聞こえた。それにしても、神様がな
んで風邪を引いたのか説明するのが面倒だ。だが、説明せざるを得
ないので仕方がないと溜め息を吐いた。

「はい、誰か…… ええええええええええ」

かなり驚いていた。それはそうだ、里で有名な神様である汐殿が風邪を引いたなど、驚きの対象ではない。そして、この女性も汐殿の事を知っているのだろう。

「喰らい神が何故、病氣にかかるのよ」

「後で説明しますから、診察お願いします」

絶が小さくなり犬と同じ大きさの姿になると、一緒に永遠亭の中へ入った。永遠亭の中は以外に広く、沢山の部屋があつた。

「何故、部屋が多いんだ」

俺の質問に目の前で白衣を着た女性が、ため息交じりで答えた。

「我がまな姫様の命令つて所かしら」

そんな事を話していると、廊下の奥の方にある部屋が見えた。どうやら、あそこが診察室らしい。ご丁寧に見板まで付いてある。部屋の中に入ると、多くの医療に関する物が沢山あった。薬草やらなんやらと、多分だが何かの研究に必要なのだろう色々な書物も置いてあった。

「さて、と。診察するから、そのベットに寝かしてくれないかし

ら」

「ああ、わかった。汐殿、ここに寝てください」

目の前に足の生えた布団みたいな物がある。どうやらコレベットと言っ物らしい。取りあえず、そこに汐殿を下ろし寝かせる。何故だろうか、汐殿の顔を見ていると、ちよっただけ悪戯したくなってしまう。

「診察を始めるから、悪戯はしないでね」

「分かっている。汐殿を頼みます、えっと……」

そう言えば彼女の名前を聞いていなかった。自己紹介もせずにここまで来たのだが、自己紹介は汐殿の診察が終わってからにしよう。そんなことを思っていると、彼女は診察しながら自己紹介をしてくれた。

「私の名前は『八意 永琳』よ。永琳で良いわ」

「俺の名は、衣乃月 天夜。天夜で良い。永琳、汐殿はただの風邪か」

診察を終え、何か紙に書き始めた。あれがなんなのか少し興味があるが、きつと汐殿が教えてくれるだろうと思った。汐殿を見ると、今まで辛そうだった表情が消え眠っていた。

「ただの風邪よ。で、どうして風邪なんて引いたのかしら」

「さあ、何でも仕事が多忙らしくって、それで風邪引いたとか」

俺にもなんで風邪を引いたのか全く分からない。ただ、人間の状態で何か仕事をしていたらしく、それが原因ではないかと思っている。まあ、何をやっていたのか全く教えてくれなかったがな。

「そう。はい、コレが薬よ。一日二錠を朝昼晩の食後に飲むのよ。はい、これ持っててね」

「ありがとうございます」

俺は、永琳さんから薬の入った袋を貰い、汐殿の方へと向かい薬を傍に置いた。これから、絶を使って家に帰る予定だ。

「そうだわ、もし良かったら御茶を飲んで行ったら。貴方と話しがしてみたかったのよ」

「ああ、別に良いぞ。絶、薬と汐殿を家まで運んでくれ」

「ニヤフウウウウ」

一緒に居た犬の姿の絶が、猫の姿に変わって薬の入った袋を丸ごと飲みこむ。その光景を見て永琳は驚いていたが、さらに驚く現象が目の前で起こる。それは、汐殿の体を飲みこむほどの大きい口を開いた絶がベットごと飲みこみ、ベットを残し消えた。いや、正確に言えば俺の影の中に戻ったと言った方が良いだろう、取りあえず汐殿を家に運んでもらった。

「え、えええええええええ！？ アレって喰らい神の」

「ああ、そうだぞ。俺も一匹だけだが頂いてね、こうやってすぐに

家に帰ることが出来るんだが、一度訪れた場所でないと移動できないのが難点だな。おっと、運び終えたみたいだな」

一枚の紙切れが置かれたベットが元あった位置に戻った。影の中から金色の毛並みの猫が俺の肩の上に乗って来た。

「手紙が置いてあるな。何々……『看病はこつちでやっておくから、ゆっくりしてて良いぞ』か。この字は、妹紅の字だな」

「……貴方達って、本当に不思議だわ。喰らい神に式神つてのも不思議だけど。さて、場所を変えましょうか。客間に案内するわ」

そして、俺は永琳に案内されるまま客間まで向かった。客間とはとても落ち着く和室である。掛け軸には、竹林を跳ねる兎たちの絵が描かれている。和室の真ん中に机が置かれ、御茶菓子が置かれている。そんな中、俺は永琳さんが御茶を入れてくれ、それを飲みながら世間話などをしている。そして、いつも通りだが汐殿の話で盛り上がる。

「へえ、汐さんの作る料理ってそんなに美味しいの」

「ええ、汐殿の料理は最高だな。私の知らない料理を楽しむように作ってくれたりするからな」

あんかけ焼きそばなど様々な料理を作ってくれるので、いつも夕食がとても楽しみである。昨日は確か、あんかけ炒飯とか言う物を作ってくれた。あれはとても美味しかったので、今度一人の時にでも作って食べたいから汐殿に教わるとしよう。

「あんかけ炒飯が、こんなにも恋しいとは……早く汐殿の風邪が治

ることを祈るだけだな」

「あんかけ炒飯が恋しいって、汐さんが作るの！？ 食べて見たいわ……住所教えてくれるかしら」

眼を輝かせる永琳に、住所を教えることにした。姫様連れて食べに来るとか言いながら、ワクワクしている。

「永琳は、何処で汐殿の事を知ったんだ？ 人気なのは知っているが、里の外まで知れ渡っているのか」

「ええ、たまに里に行くと汐さんの話を聞くわね。何でも、食の神様として崇められてるとか」

永琳の知る汐殿の噂は、食の神で崇められている事だけらしい。ちなみに、汐殿の料理を食べていると妖力が少しだけ上昇することは、俺の心の中に留めておくでしょう。ルーミア達には効果がないみたいだが、俺だけなのだろうか。今だ謎である。

「へえ、ここに住んでるのね。フッフ、どんな料理が出てくるのかしら」

「あはは。風邪が治ったら、すき焼きを作るとか言ってたぞ。すき焼きとは一体どんなのか、凄く楽しみだな」

「絶対に行くわ！！ すき焼きなんて聞いたら、絶対に行かないと！！ お肉とか持って行くわ」

すき焼きと言うのに肉が必要である事を知り、ルーミアに頼んで牛などの肉を頼んで置くとしよう。今回は何人前になるのか分から

ないが、でも皆で囲みながら食べる食事はとても楽しいのだ。

「あら、気が付けばこんな時間だわ。どうする、泊まって行く」

「ええ、妹紅が『ゆつくりしてけ』とか言ってるからな。お言葉に甘えさせてもらうさ」

「フッフ、そうね。ちょっと待ってて夕食を今から作るから」

そう言って立ち上がるうとした永琳を止めた。泊まるのに俺が動かないのは流石に悪い。喰らい神の式だから、汐殿から多くの調理法くらいは学んでいる。

「泊めてもらうんだ、夕食は俺が作るう」

「良いのかしら？ 御客人である貴方に料理を作らせるなんて出来ないわよ」

「気にするな。俺が好きで作るのだから、別に良いだろう」

料理を作るのが趣味になってしまった。いろんな料理を学んでから、作るのが楽しくなったのは言うまでもない。

「なら、お願いしようかしら。台所まで案内するわ」

「ああ、頼む。俺としても、台所が何処にあるか分からないと困るからな」

永琳に案内を頼み台所に着くと、見知らぬ女性が包丁を持って何かと格闘していた。見た目からすれば、どこぞのお姫様に近い。ふ

む、もしかしたらこの方が永琳が言っていた姫様なのだろう。

「うう、魚を上手く三枚に下ろせないわね」

「姫様、何をしてるんですか！？ 怪我をなさったらどうするのですか」

やはり、姫様だったらしい。包丁をまな板に置いて溜め息を吐いて振り返る。綺麗な黒い長髪の女性が此方を見て不快な顔をしていた。どうやら俺が苦手らしい。

「ごめんなさいね。姫様は、男が苦手なのよ。ほら、竹取の翁の話を知らないかしら」

「ああ、あれか。かぐや姫とか言う美女に求婚を求め、群がる男たちの話だったな。昔だが、藤原家に世話になった事があるが、あの人はとても良い人だった」

藤原家と言えば『かぐや姫に偽物を渡したと言われ笑われ者にされた』あの人の事を思い出す。そして、彼は自殺したのだ。俺にとつて、彼の死はとても重いものだった。

「そう……あの人は優しい人だったわ。だから、私は——いえ、止めておきましょう。どちらにしても、私が悪いのだから」

「……。俺の知っているのは、かぐや姫が藤原の君『以外』にも偽物だと言った。だが、他の者たちが彼だけを笑い者にした事だけだな」

空気が重くなっていくのを肌で感じながらも、かぐや姫のそばへ

に向かい包丁を奪う。

「俺の名は、衣乃月 天夜。あんたの名は」

「蓬萊山^{ほうらいざん} 輝夜^{かくや}よ。で、その包丁で私を殺すのかしら」

何も恐れぬ顔をしている輝夜を見て、首を横に振りまな板の方を見る。確かに今この包丁で刺し殺しても良いが、俺はそこまでするほど殺したいとは思わなかった。

「汐殿との約束でな。喰の神の式神は、決して料理に関する刃物で誰かを殺してはならない。それに、料理人に取って包丁は魂。それを汚すようなことはしないさ」

まな板に置いてある川魚をゆっくりと三枚に下ろす。その光景を見て、啞然とした表情の輝夜だったが、すぐに頬笑み俺のそばで調理を再会する。

「永琳、私達で夕食を作るから、休んでなさい」

「分かりました。楽しみに待っていますね」

永琳は少し嬉しそうな声で、この場所を後にした。多分、診察室で後かたづけの作業をするのだろう。……あれ、確か俺のそばにいた絶が、今は何処にもいない。あはははは、まさかな。永琳が持っていたつかあり得ないな、うん。

その頃、永琳はと言うと――

「このモフモフぐわいが、たまらないわね」

「良く言うよ。僕を凄いスピードで捕まえて、無理やりモフモフしてるくせに」

診察室で、金猫に化けた絶をモフモフしていた。天夜が隙を見せた瞬間、私が捕獲して持つて行ったのだ。とても可愛らしくて、一家に一匹欲しい所である。あれ、確か天照様もそんなこと言ってた気がする。

「貴方って喋れるのね」

「はは、僕だって喋れないわけじゃない。汐に喋るなって言われたから、今まで喋らなかっただけ」

気持ち良さそうに頭を撫でられた金猫は、眼を細めながらのほほんとしていた。妖力を感じず、神力や霊力すら感じない。一体どう言うことなのか調べて見たい。

「俺は、混力で動いてる。神力と霊力が混ざり合って出来てる力で生きてるから、他の奴らじゃ感じ取れないだろうな」

私の心を読んだのか、力に着いて説明してくれた。これが彼の能力なのかしら。そんな力だったら、少し厄介ではある。

「僕はただそう言う能力なだけさ。能力窯によって僕らは常に能力が変わる。僕らの力は日によって変わる。空間を自在に広げたり、存在を否定したり、終わりを操ったり……僕らは常に変わるのさ」

「なんかチートね。その窯は常に変化するっていたけど、その窯は何処にあるのかしら」

「フフフ、それは神の腹の中さ。あそこに行こうとは思わない方がよい。力を持つ者は、力を奪われ、干渉をされ、最後は命が尽きる」

金猫は面白そうに話し始める。その内容は凄く恐ろしいものだった。

「まあ、僕らにも怖いのが居る。汐の逆鱗に触れたくはない。彼が怒れば、世界ごと殺されかねないからね」

「なんでかしら？ 貴方ならた——」

「彼が怖いんだ。彼が、彼でなくなった瞬間、僕らでは彼を止める事すらできない。どんな奴でも、無理だよ。全てのモノの力を吸い取る彼の本当の姿を、僕らは見たんだ」

私の言葉を遮り、急に怯えながら話し始めた金猫の頭を撫でながら、それ以上聞こうとは思わなかった。本当に恐怖なのだろう、一体彼らがどんな物を見て怯えたのだろうか、私には分からなかった。

「お願い、汐を絶対に怒らせる事はしないで。僕らでは止められない。七夜様ですら、不可能なんだ。もしその時は、その目に焼けつけた方がよい、汐の逆鱗に触れた者の末路を」

「彼の逆鱗……ええ、覚えておくわ」

そして、私は金猫を撫で続けるのだった。

八話 汐が風邪をひく 前編（後書き）

はい、前編でした。

では、後編で会いましょう ノシ

八話 汐が風邪をひく 後編（前書き）

後編、えらく短かった。

別に前後編にしくても良かった気がするが

まあ、そこは気にしないと言う事でw
ではw

八話 汐が風邪をひく 後編

永林と絶がそんな会話をしている間、天夜は何をしているかと言
うと――

「何故、こうなった」

豪勢な夕食が完成してしまった。タケノコを使った料理を作りたいと輝夜が言ったので作ったのだが、まさかこうなるとは思わなかった。

「あはははは、作りすぎたわね」

「ああ、こうなるとは思わなかった。コレ食べきれのだろうか」

アユの塩焼きに、岩魚の刺身。タケノコご飯に、タケノコを肉で巻いて炒めた物に野菜炒め等、最後は樹莓のソースをかけたアイスクリームである。

「このアイスクリームって言うのは何？ 食べて見たいわ」

「俺も、汐殿から教わっただけで実際に食べるのは初めてだ。コレを冷やす物がココにあって良かった。さあ、これらを持って行こう」

そして、俺らは夕食を持って居間へと向かう。今では、永琳と金猫の絶が楽しそうに話をしていた。絶が人と話すのを見るのは、結構久しぶりに感じた。なんせ、汐殿が喋るなど言ってからもう六百

年以上は経っていると思う。この優しくも威厳のある声を聞くのは、本当に久しぶりである。

「おお、御馳走が出来たようだな。天夜も腕を上げたみたいだから、汐に報告しに戻るとするかな。では、永琳殿。名残惜しいが、また会いましょう」

「ええ、楽しかったわ。また、会いましょう」

名残惜しそうに絶に手を振る永琳を見ながら、絶は俺の影の中へと入った。何の話をしていたのか知らないが、報告して何を報告するつもりなのだろうか。

「さて、夕食を並べて早く食べましょう。冷めちゃうと美味しくなくなるからね」

輝夜が微笑みながら夕食を机に並べ始めた。それを見て、俺も夕食を並べる。こんなに多く作ったのは初めてである。汐殿の時は、話しながら夕食を作っていたのだが、それでもこんなにタイ料理作った事はなかった。

「では、食べるとしようか」

夕食を並べ終え席に着いた。永琳はこんなに大量の料理に驚いていた。こんな表情を見た事がないと、輝夜が笑っていた。

「いただきます」

三人で話しながら出来立ての料理を食べる。うん、とても美味しく出来てとても嬉しかった。二人とも美味しそうに食べてくれてと

ても嬉しかった。

「とても美味しいわね。コレが天夜の作る料理なのね……美味しすぎて、嬉しくなったわ」

「うん、美味しいわ。ねえ、天夜これから私の所で働かない」

真面目な顔で言う輝夜なのだが、俺はいつも通り首を横に振る。それは、汐殿との式神であるからでもあるが、彼との約束もある。

「妹紅の父上との約束があつてな。彼女が一人立ちするまで見守る約束をしているからな」

「そう、良いなあ。妹紅ばかりズルイわ」

輝夜と調理中に妹紅との因縁と言うのを聞いた。でも、それでも彼女は楽しそうにしているのだ、俺は止める事はしない。彼女にとって幸せがあればそれでいいのだ。

「フッフ、貴方って妹紅が好きなのかしら」

永琳が急にそんなことを言ってきた。俺自身全くもって分からない感情である。好きと言うモノがどう言うモノなのか、分からないのだ。多分、俺にかけてる感情は、それだけだと思う。

「さあ、俺には分からない。そう言う感情は、もう無くしてしまっただけだな。好きと言う感情はどんなモノなのだろうか」

「……………これは、重傷ね。貴方の病気を治すのに、かなり時間がかかりそうだな」

楽しそうに笑う永琳と、俺を見て苦笑しながらタケノコご飯食べる輝夜。まあ、こんなのも楽しいと思う俺もどうなのだろうかと思うが、気にするのは止めるとしよう。夕食を食べている間、いろいろなことを教えてもらった。幻想郷が出来る前の話とか面白い話をしてくれるので面白かった。

そして、先ほどまで永琳たちの話だったのだが、今度は汐殿についての話に変わる。

「——でさ、天夜の主である汐もスペルカード使えるのかしら。私、一度見てみたいわ」

「汐殿のスペルカードは、危ないぞ？ あれは、どこから現れるか分かったもんじゃない」

『神魔の爪』の効果は、全身麻痺と一定時間能力使用不可である。さらに『妖魔の爪』には、混乱と精神破壊が付いている。あれ、一発でも喰らったら終わりである。良ければどうということはないと思ったが、あれってどこから現れるのか、全くもって分からないのだ。避けようがなく防御して防ぎつつ戦ったが、結局は負けた。

「あの攻撃、普通に喰らったら即終了だからな」

「「うわあ、ほぼ無理ゲーだわ」」

そんな話をしながら、俺達は食事を終えた。まあ、その後は一晩泊まって、家に帰ったと言う話だ。

言うておくが、何も無かったぞ？ まあ、輝夜が俺と添い寝したくらいで、やましい事は何も無かったがな。まあ、そんな訳でだ、俺は何事もなく楽しい会話をして帰ったのだった。

その日の夜

「天夜、絶。君たち何を話したのかな」

「「スイマセンでした」」

汐殿についての話をした事を話した後、汐殿が内緒にしていた事も話してしまったらしく、土下座をしてその晩は謝り続けたのだった。

八話 汐が風邪をひく 後編（後書き）

さてさて、今回は天夜が汐を連れて病院へ。

そして、輝夜たちに出会い汐について話して、怒られると言った流れのお話でした。

さてさて、次回はなんとまた東方キャラクターが出ます。
今日知った新たなキャラクターです。

次回をお楽しみに！ ノシ

九話 忘れ去られた妖怪（前書き）

タイトルを見て分かった方は、凄い方かと思います。私は紅魔館未プレイで、そのキャラクターが主人公候補だったとか、結局ボツになってしまったとか、初めて知りました。

では、今回のテーマは「家族が増えます」です。

上手くかけたか分かりませんが、読んでもらえたら幸いです。

九話 忘れ去られた妖怪

風邪をひいてから二日が経ち、いつも通りの朝がやって来た。早朝に目が覚めた僕は、布団から起き上がり軽く伸びをした。

「うん。風邪が治ったみたいだ。やっぱり永琳さんの薬は、本当に効くみたいだね」

今まで寝ていた為、体が楽になって嬉しかった。さてさて、布団をたたみつつ、天夜たちが起きるの待つことにした。今寝ているのは、天夜と妹紅とルーミアである。

「さてさて、外に出るとするかな」

僕は玄關の戸をあける。うん、清々しい朝日が照らし始めた。こんなにも温かな日差しだ、今日は良い事が起こるに決まっている。少し歩こうと思い一歩踏み出したその時、僕は信じられない光景を見た。どこかの妖精の服と似た、とても可愛らしい白を基調とした紅白服を着た妖力を持った人が倒れていた。

「あら、気を失ってるね。おや、これは日記と二胡か。ほほお、これは立派な楽器だ。よく手入れされてるね」

二胡とは、中国の伝統的な擦弦楽器の一種である。一度はその音色を聴きながらお酒を飲んでみたいと思っていた。そんなことを考えていたが、そんなことよりもこの子を助ける方が大切だと思った。

「よいしょっと。おや、軽いな……それに良く見たら、さらに可愛いじゃないか。こんな所に置いておくのは危ないし、家に入れるか」

彼女を抱えて俺は家の中へと入れた。部屋の中では、先ほどたたんだはずの布団が敷かれており、その中でルーミアが寝ている。まあ取りあえずだ、ルーミアを元寝ていた場所に戻しこの子を俺の布団へ寝かすか。

「さてと、ご飯でも作るかな。五人前か……まあ、材料と器は足りるし、大丈夫だな」

微笑みながら七夜が起きるのを待ち、僕はいつも通り朝食を作り、台所へと向かった。台所には、懐かしい男が立っていた。黒のシルクハットとスーツを着た一人の白髪の男である。その男が包丁を片手に長ネギを切っていた。その男が、此方に振り返りもせず嬉しそうに声で僕に話しかけてきた。

「おや、汐じゃないか。久しぶりだね」

「ええ。久しぶりですね、ネイクさん。一体いつ目覚めたのですか」

彼の名は「ネイク・シュバルツ」と言い、俺の友人である。彼は僕と同様、第一世代の人間である。七夜の居る所で住んでいるのだが、今までずっと眠っていた。どうしてかは、言いたくないので伏せておくでしょう。

さて、ネイクが楽しそうに振り返った。見た目は二十歳くらいの優しい紅い眼をした男性。楽しそうに笑いながら、包丁をまな板の上に置く。まな板の上には長ネギが切られており、今日は長ネギの味噌汁にしよう。まな板を見ていた僕に、ネイクは嬉しそうに手を叩き開くとトラップが現れた。

「今さっき起きたんだよ。そうだ、久しぶりにマジックを披露して

あげようか？ 君の大好きなトランプマジックを」

「いや、今は良いや。次に目覚めた時に頼むよ」

「そうかい？ それは残念だ。では、後は君に任せるわね。私も少々疲れてしまつてね。では、また会おう」

残念そうに言いつつも、微笑みながら僕の影の中へと消えた。彼は、第一世代では有名なマジシャンだ。どう言う出会いをしたかと思ひ出したのだが、忘れる為に首を横に振る。あの出会いはあまり良い出会いではないので、全力で忘れることにした。

「はあ、作りかけのを作るとするかな」

しばらく時間が過ぎ、料理を作り終えた。朝はやっぱり白米に豆腐の味噌汁とヤマメの塩焼きが一番である。さて、もう皆が起きている時間である。

『おはよお。汐お、眠い』

「……。七夜、君は本当に朝が弱いね」

さて、そんなやり取りをしている中、あの女の子のであろう最初の第一声が部屋の中に響いた。

「ええええええええええ！？ ココは何処！？ 私はだ……いや、そこは覚えてるわね」

うん、実に元気の良い第一声である。若い子はこうで無くてはい

けないと、僕はそう思う。さらに、次はルーミアの声であろう声が聞こえた。

「汐が居ない！？ 私の汐をどこへやったの」

「私を知る訳ないじゃないですか！？ って、貴方誰ですか」

うん、やっぱり元気が一番だね。天夜は何も言わずに、眠そうな眼をして此方へとやってきた。天夜が顔を洗い終え、一緒に朝食を居間に運び、お茶を飲みながら皆の第一声を楽しんでいた。

「天夜、絶の使い方は上達したかい」

「いえ、まだまだです。汐殿が作って頂いた『星喰の太刀』で素振りはやっていますが、気を抜くと自我を乗っ取られそうにはなりません」

お茶を飲みながら溜め息を吐く天夜を見て、僕は微笑みながらお茶を飲む。そんなのほんとした空気の中を、台所へと走る妹紅たちを眼で追う。さてさて、ご飯を人数分用意したお椀によそる。あの行き倒れの女の子も顔を洗い、申し訳なさそうに席に着いた。

「さて、いろいろと聴きたい事があるけど。まずはご飯を食べようか」

「あ、はい」

そして、いつも通り皆で手を合わせて挨拶をする。

「いただきます」

「お、おいしいです！！ ヤマメの塩焼きがおいしいです」

行き倒れの女の子が、とても美味しそうにご飯を食べていた。ご飯を四杯もお代わりしているのに負けじと、ルーミアもお代わりをしていた。

「あははは。こんなに喜んでもらえて嬉しいよ」

「ほら、御茶入れたから二人とも飲みな。汐、この子で拾ったんだよ」

半分呆れた声で白菜の漬物を食べながら言う妹紅に、僕はお茶を一口飲みホツと息を吐いて答えた。

「玄関前で倒れているのを拾ったんだよ。流石に外にだしっぱだと可哀相だから、家の中に入れたのさ。神様として、人間として当然なことをしたと思ったんだけど、駄目だったかな」

「汐って不思議だね。私みたいな妖怪も、平気で家族として迎えてくれるからね。私的には、妻として——」

「はいはい。つまらないこと言っただけで、ご飯を食べる」

ルーミアの言葉を遮って、ご飯を食べるように言う。ルーミアの狙いは僕は夫として迎えることらしい。僕みたいなのを夫に迎えるのは、あまりお勧めしないのだけだね。ルーミアは残念そうに頬を膨らませながら、黙々とご飯を美味しそうに食べる。

「あの……申し訳ないですが、もう一杯お代わりしても良いですか」
今回で五杯目のお代わりだ。僕は微笑みながら頷き、御椀を受け取りご飯をよそる。僕の作る料理を美味しそうに食べてるのを見て、段々と嬉しくなってきた。

「こんなに美味しそうに食べてくれるなんて、凄く嬉しいよ。そう言えば、自己紹介がまだだったね。僕の名は紅山 汐だよ」

自己紹介で僕の名前を言うと、彼女は驚いた表情をした。どうやら僕の名だけを知っていたらしく、本人にあったのは初めてだったみたいだ。まあ、その後は、皆で自己紹介をした。なんだか慌てていたが、お茶を飲み心を落ち着かせた。

「私の名前は『^{さえずき}冴月 ^{りん}麟』と言います。麟と呼んでください。えっと、能力は『存在を忘れられる程度の能力』です」

「ふむふむ。つまり、麟は自分と言う存在を忘れさせることが出来ると言うことだね」

ある意味、彼女は可哀相な存在である。この幻想郷の仕組みは「現代から忘れ去られたモノが集まる場所」である。その世界にまで忘れ去られ幻想となった者がどうなるのか。僕には分からないが、きっとこの子は辛かったはずだ。その辛さを考えると、家族として迎え入れてあげたいと思った。それに、こんなに美味しそうに食べてくれる子を追い出すのは、僕は嫌である。

「ねえ、良かったら僕の家で暮らさないかい」

「……………。良いのですか、私みたいな妖怪を」

麟は申し訳なさそうに聞いてきた。いろんな事があつたのだろう、涙眼になりながらも、ジツと僕たちを見ていた。天夜は頷きながらも麟を見て微笑み、ルーミアはジツと僕を見ている。妹紅は、言わずもなが、ヤマメの塩焼きに夢中で話を聞いているのかも分からない。そんな中、七夜が優しい声で麟に言った。

『麟……どんな辛いことがあつたか、私達は聞かない。でも、今の瞬間、貴女は家族の一員なのです。妖怪であろうとなかろうと、貴女は此処にいて良いのです。だから、一緒に暮らしましょう』

七夜の温かな優しい声を聞き、麟は泣き始めた。その姿を見て、ルーミアが優しく麟を抱きしめている。そんな光景を見ながら天夜と妹紅は微笑み、僕は黙ってお茶を飲む。七夜は、いつも通りの性格に戻りクククと笑いながら、何かを思い出し溜め息を吐いた。

『はあ。家族が増えて嬉しいが、部屋の数をさらに増やさないといけない。汐、家を増築するにはスペースが足らん、移転して増築でもするか』

「そうだね。なら、紫に相談しとくとして、麟の部屋を作らないといけないね。家を移転するまで誰か、同じ部屋になるんだけど」

僕のその一言を聞いてか、ルーミアと妹紅の眼が光る。僕と一緒に部屋を狙っているルーミア。天夜と同じ部屋を狙う妹紅。そして天夜はと言うと――

「汐殿と同じ部屋で良いのでは」

「だな、それが安定だ。取りあえず、それで決定だな」

二人とも固まっていた。うん、ご愁傷さまと言う事で良いよね。まあ、そんな訳で、冴月 麟が家族として加わった。とうとう、五人家族になった。今後、家族が増えることが起こるか分からないけど。まあ、これからも楽しい一日が続くのならそれで良いと思う。

「これからもよろしくね、麟」

「はい！！ これからもよろしくお願いします」

そして、今日も楽しい一日が始まるのだった。

〈番外編〉

その日の夜、僕と天夜は同じ部屋で寝ることになった。だが、この時初めて後悔をした。

「天夜……。なんだい、この刀の量は」

「はい？ コレが普通かと」

天夜の布団の中に入れられた、俺が作った刀を抱きしめながら此方を見ている。いや、別に誰かが襲いかかるわけでもないのに、何故刀を抱きしめながら寝ているのか。凄く疑問でしょうがない。

「汐殿を斬るわけではないので、気にしないでください」

九話 忘れ去られた妖怪（後書き）

はい、冴月 麟さんが仲間に加わりました。

彼女には名前と姿と『花符』・『風符』のスペルカードの名符しか分かっておりません。ので、二次創作として使用されたりします。（wiki等で調べました

次回は、妖怪の襲撃と汐の逆鱗を書こうと思っています。

喰らい神の逆鱗。それに触れし者の末路は、絶望。それを見し者は、恐怖に怯える。彼の逆鱗は、ただただ……………

てな訳で、次話で会いましょうw ノシ

十話 汐の逆鱗（前書き）

はい、どうもです。

今回は、タイトルの通り汐が怒ります。

そして、汐のちょっとした隠された弱点も克服しちゃいます。
では、あとがきで会いましょう

十話 汐の逆鱗

遙か昔、紅山^{べにやま} 玖月^{くつき}と呼ばれていた頃の記憶。紅山^{こうやま} 汐^{しお}としての記憶。僕が俺に戻れば玖月と言う名になり、俺が僕に戻れば、汐になる。そうやって、僕は生き続けてきた。

「俺は、人間に作られた人間。いや、人間じゃない人形だったな。父さんが愛した世界を汚され、能力者が全ての世界が生まれた。能力を持たぬ者達をモルモットにしてまで、能力を研究した世界。俺の大切な人達を奪おうとした世界。だから、全てを喰らったんだ。でも、その代償として暗乃^{あんの}は眠ってしまった。どうすれば、暗乃を起こせるのかな」

誰も答えなど知らない。ただ、僕がの心の中でその問いについて考え続けた。でも、俺は――不老不死として生き続けた。人形ではなく人間として、神として、俺は精一杯生き続けたのだ。だから、七夜と出会えた。あの里の人たちと出会えた。

『汐……私では、貴方の愛した姫は起こすことは出来ない。でも、きつと彼女は起きるわ。貴方が諦めなければ、きつと必ず』

「そうだね。諦めちゃ、暗乃に悪いしね。さあ、眠るとしよう。僕らの姫が目覚める為に」

そして、僕らは結衣ちゃんに封印してもらった。あの暗い闇の中で眠り続けた。誰にも語るつもりはない、俺と暗乃の物語り。そして、僕と七夜が共に誓い眠りについた理由も、誰にも語ることはない。

「うう。あれ、僕寝てたのかな？　ありや、僕とした事が寝ちゃうなんて」

昨日の夜、紫と家の移転作業について話していたのだが、気が付いたら僕は寝ていたようだ。それも、まだ『僕』が『俺』だった頃の記憶を夢で思い出すとは、正直言ってシンドイものである。

「汐殿、どうかなされましたか？　顔色が優れないようですが」

僕の寝室から天夜が眠そうな眼でやって来た。蒼い着物を着た黒髪の良い男性として、この里での人気者である。

さて、天夜がジッと僕の顔を見ているのだが、そんなに顔色が悪いのだろうか。今、鏡で自分の顔を見たのだが、確かに青ざめていた。

「ああ、ちよつと昔の思い出を思い出ただけだ。すまないが、水を一杯持つて来てくれないか」

「分かりました。急いで水をお持ちします」

そんなに急がなくても良かったんだが、それほど僕の顔が青ざめていると言うことだろう。本当に思い出したくない過去を思い出すと、人間は青ざめるのだと僕は改めて実感したような気がした。

（父さん。僕は、弱い生き物だね。皆の事を思い出した途端、こうなるんだもん。辛い過去から乗り越えないとね）

軽い深呼吸をし、もう一度過去の事を思い出す。最強の漢女おとめバルバートルさん。あの人の事を思い出すと……

「うう！？ ヤバイ、吐き気が……駄目だ、ちょっと思い出すのを止めよう」

主に第一世代で、伝説と呼ばれ『最強の漢女』の称号を持つ最高の博士と呼ばれた漢女。アンノーン研究では一、二を争うほどの博士である。アンノーンとは、僕らが生きていた第一世代に突如現れた生命体の名である。まあ、話す気はないけどね。

「アイツの事を思い出すと、何故に吐き気が出るのだろう」

「汐殿、お水をお持ちしました」

天夜が水を持って来てくれた。取りあえず、天夜が持って来た水をゆっくりと飲んだ。多少だが楽にはなったが、やはりまだ過去を思い出そうとすると、吐き気が出る。

「汐殿、過去は過去です。過去にあった出来事を思い出して体調を壊すのでしたら、今を楽しめば良いのではないですか。過去は過去と割り切り、未来を楽しめば良いかと」

「今を楽しむか。それもそうだね、天夜の言う通りだ。さて、朝食を作るとしようかな」

僕が立ち上がろうとすると、天夜が笑いながら衝撃的な一言を言う。

「いえ、今は昼で御座います。なので昼食ですね」

「え、寝すぎたのか。ゴメンね朝食を作れなくて、僕とした事が寝坊をするなんて」

「いえいえ。先週から汐殿は徹夜をしていましたし、別に気にしないでください。後、昼食は『けんちんうどん』を作りましたので、顔を洗って来てください」

天夜の手際の良さには感心してしまった。優秀な式神を持った僕は幸せ者であるのだが、まだ僕には足りない者がある。もう一人、眠り続ける一人の姫。僕が俺だった時の相棒である。

「そうだね。ちょっと顔を洗ってくる」

僕は立ち上がり、洗面台へと向かう。ゆっくりと洗面台へと向かいながら、暗乃の事を思い出す。七夜は暗乃の半身体であり、暗乃がいずれ眠りにつくことを恐れ、天照様に頼み自分の半身体を鎖ノ神として天へと送ったのだ。

「僕は、まだ弱い生き物だ。暗乃……」

洗面台につき顔を洗う。鏡の前でジッと自分の顔を見ると、未だに青ざめている僕の顔が映る。幸せや悲しみ、怒りや苦しみ。そう言った、僕の過去を思い出そうとすれば、こうやって吐き気が出る。

「乗り越えるためには、どうすれば良いんだ」

顔を洗い終え、居間へと戻る。そこには天夜や麟、ルーミアに妹紅が楽しそうに会話をしていた。今、目の前にいる大切な者達が消えたとき、僕はどうなるのだろう。ふと、そんなことが頭の中に過

ぎった。

（そうだ。僕は――）

頭の中で思い出した言葉。暗乃が眠る前に言っていた、あの言葉が頭を過ぎった。

（過去は過去よ。過ぎ去った過去の事で悩むのなら、その過去を忘れずに生きなさい。そして、思い出した時は笑いなさい。思い出は思い出なの、過去に何が起こったかなんて関係ないわ。過去は思い出として生き続ける。私達はそうやって生きてきたのよ）

「アハハハ、アイツらしい言葉だ。なんでこんな大切な事を、忘れていたんだろうな」

「どうかなさいましたか、汐殿」

天夜達が心配そうな顔で此方を見ているので、首を横に振り何事もなく自分の席に座る。

「いや、昔の事を思い出したただけだ。さて、ご飯にするか」

「そうだな。んじゃ、皆がそろったことだし、天夜に感謝しつつ、いただきます」

妹紅が満面の笑みでそう言うと、僕らも手を合わせ微笑みながら言うのだった。

「いただきます」

そして、皆が食べ終わった頃、事件が起こった。それは午後三時の頃のことだった。いつもお菓子を貰いに来るはずの少年が、傷だらけになりながら玄関の戸を開き倒れていた。

「おい！？ 坊主、どうしたんだ！！ 汐殿」

何かあったのか、天夜が僕の名を叫んでいたので、急いで天夜の方へと向かうと、目の前に傷だらけの少年が苦しそうな声で言う。僕には聞こえなかったが、天夜はちゃんと聞こえたらしく少年を麟に渡し、急いでどこかへと向かって行った。それに続いて、妹紅とルーミアが外へと飛び出して行った。麟は急いで救急箱などを持って来て、少年の看病をしている。

（家から出れば、答えが出るな）

天夜が戸を開けっぱなしで出て行ったのを見て、ルーミア達に続いて後を追うように歩いて外へと出た。外では妖怪たちが暴れていた。里の警備隊達も応戦しているのを見て、ゆっくりと歩く。今の僕は妖力を感知することも、力を使うことも出来ない。今夜は満月なのだ。満月の夜は、どうしても力を使うことが出来ないのだ。何故そうなるのか、未だに分かっていない。

「ああ、どうして。どうして、こうなった」

目の前で泣き続ける一匹の紅い着物を着た妖怪。額に生えた一本角の女性が膝について泣いていた。この者が誰なのか、僕には分かる。

「響子、どうして此処に居るんだい。君は確か、妖怪の山に住んでいたのでは」

「汐……。彼を、我が友を止めてくれ」

彼女は僕の服を掴んで叫ぶ。事情を聞いたが、彼女はただ「わからない」の一言だった。幻想郷が生まれ、それに反対し襲ってきたそれが理由であるはずだが、その元凶はそれほど反対はしていなかったらしい。

「でも、今の俺は力が使えな——」

「頼む、助けてやってくれ」

僕の言葉を遮り、必死に涙眼で叫ぶ響子。その姿を見ると、断る事すら出来ない。僕はただ彼女を僕の家に戻させ、元凶の元へと向かう。何人も倒れる里の人達や妖怪の群れ。それを見ると、無力な今な自分に段々と怒りが込み上げてきた。

『汐、今のお前じゃ——』

「分かっている。でも、許せないんだ。今の僕が、許せないんだ」

下唇を噛みしめながら、ジッと妖怪たちを見つめる。天夜や妹紅、ルミアに慧音。僕の家の中で看病をする麟さん、そして今だ泣き続けているであろう響子。怒りだけが込み上げて行く中、頭の中で懐かしい少女の声が聞こえた。

（なら、どうしたいの）

聞き覚えのある懐かしい声、僕はその問いにただ素直に答える。
今どうすれば良いのか、感じたまま答える。

「僕が俺に戻るしか――」

「なら、戻れば良いじゃない。全てを受け入れ、昔の貴方に戻れば良い」

目の前に現れた紅いワンピースを着た黒い長髪の女性。ゆつくりと僕の元へ黒い瞳の少女は優しくも温かな手で頬を触る。僕は涙を堪えながら黙って彼女を抱きしめる。

「玖月、今まで寝ていてごめんなさい。貴方との繋がりが壊れていたのを修復出来たわ。これで、いつものアレが出来るわよ」

「暗乃」

「うん？ 何かしら」

優しい声で答える少女に僕は涙を拭き、今まで言っただけだった一言を言った。

「お帰り、暗乃」

「ええ。ただいま、玖月」

暗乃は俺の中へと戻っていた。多分、七夜と一つに戻る為だろう。そして、彼女が俺の中に戻ったことで俺の右腕が露出していた茶色のコートが黒いに染まった。さらに、露出した右腕までも右手首まで完璧に隠す、完全な黒のコートに戻っていた。

「ははは、懐かしいな。さあて、始めるとするかね。暗乃」

「ええ、始めましょう。完全な私達を、怒らせた代償は高い事を教えてあげましょう」

そして、俺は元凶の元へと走る。体が軽く、完全に昔の俺に戻っていた。頭の中に過ぎる過去の記憶も何もかも受け入れた。そして笑う。ただ、この嬉しさと怒りに心が踊る。何せ、いつもの自分に戻ったのだ。妖力も感じられるし、昔と同じくらいの力が出せる。そんなことを肌で実感しながら走っていると、遠くの広場から天夜の声と何かが弾き飛ばされた音が聞こえた。

「ん？ 誰だお前」

目の前に一匹の角の生えた鬼が立っていた。さらに、周りを見れば天夜たちが倒れていた。結構苦戦しているようだ、確かにこの妖力は異常であることは分かる。

「俺の式神たちが世話になったようだな、雑魚」

俺の変貌に天夜たちが固まっていた。どうやら、完全に昔の俺になったようだ。影の中から白銀の刀を取り出し、自分の顔を見る。黒い髪に黒い瞳の自分自身が映るのを見て、笑ってしまった。そして、俺の一言でキレた一匹の鬼が此方へと歩いてやって来た

「誰が、雑魚だと」

「あははははははは。さあ、俺を怒らせたんだ。覚悟しとけ雑魚」

完璧にキレたらしく、俺めがけ殴りかかろうとした。だが、その拳は届くことが無かった。なんせ、俺が先に鬼の顔面を殴り飛ばしたのだ。周りにいた者たちは絶句しているが、ただジッと飛んで行った鬼の方向を見つめながら、刀を影に戻した。

「なあ、暗乃。感染率は何%までいける」

『そうね。400%位は出せるわ。でも、この程度なら100%で充分ね』

暗乃の言葉を聞いて、俺は溜め息を吐いた。「現在の僕」と「過去の俺」が今一つに戻ったのだ、多分だが大妖怪ですら俺を倒すことは出来ないだろう。

「さあて、久々にやるとしますかね！！ アンノーン感染率100%だ」

その一言で、体中を黒い物体が侵食する。皮膚は黒く、コートは紅く、髪は白く染まった。その変化に多くの者が怯えていたが、何も気にせず右手から黒い球体が出現させる。

「さてと、俺こと紅山 玖月を怒らせたんだ。覚悟くらいは出来るよな」

「キサマだけは、絶対に殺す」

殺気を出しながら此方へと突っ込んできた鬼に対し、何も考えずさらに一言足した。

「王妃側での100%に変更。奴を徹底的に潰すぞ、暗乃」

「ええ、そうね。今、王妃側に変えたわ。好きなだけ暴れなさい」

その瞬間、全てがガラリと変わった。右手の黒い球体を握りつづき拳から黒い炎が覆う。完全なる絶望を敵に植え付ける魔の炎。

「クケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」

「
!?
グガッ
」

一瞬にして敵の目の前に現れた瞬間、右手で敵の溝を殴る。鬼は一瞬だが意識を手放しかけたようだが、何とか意識を取り戻した。だが、それが最後だった。

「ぐがああああああ」

敵は悲鳴を上げた。たった一発の拳を喰らっただけで顔を空へと向け叫び続ける。眼は白眼になりながらも俺を掴もうとするが、もう遅かった。

「キサマ如きが、俺に勝てるわけないさ。何せ、俺は喰らい神だからな」

後方へとバックステップを取り、笑いながら敵に向かって言った。だが、どうせ聞こえるわけがない。何せ、もそこにいた鬼は何もすることが出来ず倒れた。まだ、生きている分、幸運だと思うがね。

「さて、原因はこの玉つてわけだな」

『ええ、これはどうやら増幅球みたいね。どうする、食べちゃう？
それとも今晚、私に食べられちゃう』

「後者は遠慮しとく。前者の増幅球を食べちまうを選択するわ。と、
言う訳でいただきます」

俺は何事もなくその球を影の中に落とした。完璧に飲みこんだと同時に、感染率が0%へと一瞬にして戻り、その反動で俺の意識はそこでシャットダウンしたのだった。

十話 汐の逆鱗（後書き）

はい、汐さん完全体に戻りました。

さて、アンノーンについて一言。

このアンノーンですが、実は設定では多くの世界を喰い殺してきた生物で、その世界の情報を読み取り、学習して対応策および実際にやっってしまう化け物です。

つまり、こんな流れですね。

ザ・ワールドを知る↓それについて学習↓復習しながらも実際にやる↓コレについての対応策を考える↓完全に自分のものにする

みたいな流れです。つまり、一度見た技を瞬時に記憶し、学び、復習し、実際にやっけてしまえます。

そんな化け物なアンノーンさんを自在に操る汐さんが化け物である
と、最近よく分かった自分が居ます

さて、次回ですが天夜さん視点でのお話を書こうとしています。

なにせ、一体この後どうなったのか分からないままってのも変な気がします。

では、次話で会いましょう。 ノシ

十一話 絶って何？（前書き）

はい。今回は、天夜視点です。

書いていて思いました。眠い時に無理して書くのは行けないことですね

さて、今回の話で幻想郷と言う章は終了です。次回は、キャラ紹介コーナーとして、天夜の説明をしようかと思えますよw

十一話 絶って何？

ここは汐殿の家である。家の中には俺と汐殿だけしかない。最近の話で移転の場所をどこにするかの話で、夜遅くまで紫殿と話をしていることが多い。その汐殿が、俺の目の前で寝ている。茶色かった髪の毛は黒く染まり、茶色かったコートも黒く染まっている。その黒いコートを壁にかけて置いたが、右腕の露出がなくなってしまう。あの時の汐殿は、確かに怖かった。今までの汐殿とは違う、内に秘めた何かとしか言えなかった。

『さて、汐は完全体に戻ったか。後は、天夜の質問攻めを終えれば終わりだな』

七夜殿が楽しそうにそう言う中、皆が汐殿を見つめながら何を聞こうか考えていた。それもそうだが、目の前で体の色が全て変わった等、沢山聞きたい事がある。だが、その中で俺は七夜殿に問いかけた。

「七夜殿、貴方は一体何者なのですか」

『ほほお、まずはそこからだな。よし、完全体に戻ったし目の前で話してやるとしよう』

七夜殿がその一言を発すると、目の前に紅いワンピースを着た女性が見えた。美しい長い黒髪と紅いワンピースが似合っており、とても似合っていた。この方が七夜殿なのかと、軽く疑いたくなってしまう。妹紅やルーミア、麟とか慧音とか響子とか全員絶句している。と言うか、いつの間に戻ったのだろうか、今までいなかった

はずなのだが……。

「さて、私についてだったわね。私は『鎖ノ神』または『狂い神』と呼ばれていたけど、実際は汐と同じ『喰らい神』よ。ただ、私は肉体と精神を二つに分けていたの。正確に言えば『暗乃として眠っていた肉体』と『神様となって玖月——いえ、汐を守っていた七夜と言う精神』に分かれて居たの。今は一つに戻ったけど、七夜として戻ったわけだから『狂い神』として、これからも守ることになるわね」

「はあ、つまり幽体離脱という訳ですね」

いつの間にか文が俺の背後で、七夜殿の話を一生懸命に書いていた。どうやら、新聞の一面に乗せるみたいだ。

「ええ、その通りよ。さて、次に汐の体の色が変わったことについて説明するわね」

七夜殿は楽しそうに話を始めた。俺らが一番気になっていた事を話してくれるのは、とても助かるし興味があつた。

「私と汐は、絶を体内に取りこむ事で感染率を上昇させることが出来る。私達の限界は無いわ。でも、天夜は上限が決められているの。増減させることが出来るのは、100%が限界よ」

「?? と言うことですか」

良く分からないのだが、汐殿と七夜殿は同じ神であることが分かった。だが、分からないのは自信の体に絶を感染させると言うことだ。何故感染させる意味があるのか、良く変わらない。

「簡単に説明するわ。絶とは、常に成長する存在。自信の体の中に感染させる事で、絶の能力を好きなだけ使うことが出来るの。しかし、そのせいで体全体の色や服の色まで感染するから、色まで変わってしまったり破れた所とかを修復してしまうのよね。後もう一つ、感染率を限界まで上げた後、元の状態に戻す時の反動が大きいから気絶してしまうのよ」

「なるほど。では、汐殿はその反動で気絶をしているのですね」

「ええ、そうよ。全く、完全体に戻ったのに気絶とか、面白すぎるわね。昔は気絶なんかしないで、王側だけとか王妃側だけとかで多くの者を倒してきたのにね。だらしが無いと言うか、久しぶりにやったから仕方が無いけど」

溜め息を吐きながらも、汐殿を優しく撫でる姿は天女のように温かさを感じた。でも、さらに気になったことがあったので、聞いてみることにした。

「王側と王妃側って何ですか」

「そうね。簡単に言えば、理性と野生の違いかしら。王側は、言わば貴方がたのように理性のあるモノ。王妃側は戦闘狂とか野生の肉食獣みたいなモノね」

とても分かりやすい説明だった。つまり、戦闘狂か常識人かの違いだろう。そして、汐殿はそれを自在に操っていた事による反動で気絶した。どれ程の反動だったのだろうか、確認してみたくなった。

「天夜に一つ忠告するわ。私達は絶を自在に操ることが出来るし反

動で死ぬ事はないわ。常に絶が成長してくれているから、気絶する時間も少なくて済む。けど、貴方は違うわ。貴方は王側だけしか使えない。もしそれを使用すれば、反動で命を落とす『一撃の衝撃』が貴方を襲うわ。死にたくなければ、今は試すべきではない。汐が目覚めたら頼んでみなさい」

初めて知った衝撃の事実。感染率を増減する反動は命を落とす物である。どんな強者でも、死んでしまいうらしい。話を良く聞いてみると、神様やチート能力を持った者達ですら、命を落とすらしい。

「さてと、ではもう一つの疑問について話すわね。あの時、鬼が悲鳴をあげた理由は、彼の魂にヒビを入れたからよ。絶の解放と同時に対象の力を急激に吸収する。その状態で触れたりしたら、魂どころか、肉体まで消滅しかねないわね」

「そんなに危険なのですか……絶とは」

そんな危険な存在を式として使用しているのかと思うと、寒気どころか恐怖すら感じてしまった。だが、そんなことを思っていたのを読んでいたのか、七夜殿は面白そうに微笑みながら話を続ける。

「安心しなさい。皆の持つ能力や妖力とかの力、魂を喰らう事が出来るのは汐と私くらいよ。天夜にあげたのは、身体能力を向上するだけの絶よ」

「なるほど。でも、反動で死ぬと」

満面の笑みで頷く七夜殿に、溜め息を吐いてしまった。確かに危険な物体だとは思ったが、体内に取り込み増減しなければ良いので怖さが半減した。

「さてと、響子よ。あの鬼は魂にヒビを入れただけで、すぐに修復されて起きるから安心しなさい」

「ありがとうございます」

響子が土下座をしている。それほど大事な存在だったのだろう、涙を拭きながら見つめている。さらに質問しようと思ったが、七夜殿は少し疲れているのか口元を手で隠しながら大きな欠伸をした。

「これ以上はちょっと無理のようね。やっぱり、汐が起きてないと私は駄目ね。さてと、私は眠らせてもらうわ。続きは汐に聞いてもらって良いかしら」

「分かりました。他の疑問は、汐殿に聞きたいと思います。御無理をかけて、申し訳ございません」

「良いのよ。私が好きで言ったことだから」

七夜殿は微笑みながら俺の頭に手を乗せ、優しく撫でながら汐殿の中へと戻って行った。七夜殿が戻ったと同時に汐殿の眼が開いた。瞳の色は蒼い瞳だったはずが、黒い瞳に変わっていた。

「ううむ、少し眠り過ぎたようだね。七夜は寝ているようだし、皆はなんだか暗くなっているし、七夜は何を話したんだか」

「汐殿、いろいろと聞かせて頂きました。七夜様がどう言う方なのか。絶の使い方を聞きました」

その他にも聞きたかったのだが、汐殿は今起きたばかりである。

無理をかけたくないので、教えてもらった事を話した。それを聞いて、汐殿は黙って頷き微笑んだ。それを見て、俺は感染率の増減を練習したいと汐殿に頼んでみた。それを聞いて、妹紅が心配そうな表情で此方を見ながら言う。

「さつきも七夜が言ってたけど、絶の感染率の増減の反動で死んじやうとか」

「確かにそうかもしれない。でも、もし今回も同様に強敵が現れたとき、どうしようもない。汐殿を呼べばすむが、いない時は全滅してしまうだろ」

今回は汐殿が助けてくれたから何とかだったが、汐殿がいなかったきは自分たちが守らないといけない。もし、今回と同じような強敵が現れてしまえば、全滅は確定してしまうのだ。

「ふむ、確かに天夜の言う通りだ。その為に絶の感染率の増減を練習をしたいと言うわけか……分かった、僕が教えてあげるよ。ただし、死にはしないが覚悟だけはしといてね」

「はい、分かりました！！ 宜しくお願いします」

汐殿に頭を下げた。皆は心配そうな顔をしていたのだが、汐殿が『死なせない』と宣言したので、妹紅達も納得してくれた。これから、俺はさらに強くなる。妹紅の父上との約束で『妹紅を守る』と言う約束を守るために、これからの修行が楽しみであった。

十一話 絶って何？（後書き）

はい、天夜さんがさらに強くなるフラグが立ちました。

天夜さんの感染率をあげたらどうなるのか、どんな姿になるのか。

それは、キャラ紹介コーナーで語ろうかと思います。

では、次話ことキャラ紹介コーナーで会いましょう ノシ

キャラ紹介コーナー 其の二（前書き）

どうも、皆さま。熱い中、如何お過ごしでしょうか？
私ですか？ 私は、普通に暮らしています。

主に、ネタ探しですがw
さて、ではキャラ紹介と行きましょうw

キャラ紹介コーナー 其の二

溜羽 「さあ、やって参りました！！ キャラ紹介コーナー」

猫精霊「舌を噛んだニヤスね」

溜羽 「あはは、噛みました。さて、気を取り直して今回はこの方を紹介します」

【プロフィール】

名前：衣乃月 天夜

誕生日：10月20日

年齢：不明

性別：男

種族：妖怪めらりひよん

能力：妖刀を作りだし扱う程度の能力

絶を操る程度の能力

身長：178cm

体重：70？

好きな物：妹紅の焼いた焼き鳥 里の人々

嫌いな物：苦い物 里を襲撃する妖怪

【容姿・格好】

主に青い着物（妹紅の父上から頂いた物）を着ている。外に出る

時は、その上に緑色の羽衣を着ている。この羽衣を誰に貰ったのか、覚えていないが大切な物である事だけは覚えている。様々な妖刀を作りだし、妖力でくらを作り出しそこに保管している。

絶に感染すると紅い着物に、羽衣の色は紫に変わる。髪の色は黒から白に変わるが、皮膚の色は変わらず肌色のままになる。そのせいか、その姿を見た女性陣に何回も捕まると言う出来事がさらに増加したとか。

【性格】

基本は冷静。だが、汐の作る料理に関しては興奮をしている（何度食べても美味しいから）。常に丹念を忘れず、妖刀で素振りをよくやっている。

溜羽 「こんな方なのです」

猫妖精「変わった人ニヤスね。でも、最近よく見かけるのニヤス」

溜羽 「へえ、どこでだい」

猫妖精「魔法の森の奥深くにある、墓地の所でニヤス」

溜羽 「……。え？ そんな所あつたけ」

猫妖精「あるニヤスよ！！ 妖怪に喰われた人間の死が――」

瑠羽

「はい、ではまた会いましょう
ノシ」

キャラ紹介コーナー 其の二（後書き）

猫妖精「最後まで言え無かったニヤス」

瑠羽「言わんでよろしい！！ えつと次回は、新たな章に入ります」

猫妖精「どんな章ニヤスカ！！ 私も活躍したいニヤスよ」

瑠羽「考えておきます。さて、次回は東方紅魔郷の紅い霧の異変です」

猫妖精「それでは、楽しみに待ってるニヤスよ」

瑠&猫「またニヤスよお」

十二話 始まり（前書き）

さて、なんとか書き終えました（汗

では、今回は天夜との戦闘がメインです。
その後、異変となります。

では、あとがきで会いましょう

十二話 始まり

さて、アレから何年経っただろうか。天夜の絶の感染方法を教えたり、実際に訓練したりなど、いろいろと大変だった。何が大変だったかと言うと、天夜が感染率の増減の反動で心臓が止まって心臓マッサージをして蘇生させるなど、本当に大変だったよ。だけど、なんとか絶を自在に操れるようになった。そうそう、博麗神社でルーミアの力を封じたらしい。実は紅いリボンを手に入れたのだが、それを紫がルーミアごと盗んで行ったのだ。帰って来た時は泣いていたが、一緒に部屋で添い寝した事で泣きやんでくれたよ。僕のコードも右腕を露出した状態に戻して、今もちゃんと着ています。

さて、僕らが今どこにいるのかと言うと、妖怪の山の山頂である。天夜はいつものスタイルである、蒼い着物に緑色の羽衣を着ている。僕も右腕を露出した茶色のコートを着ていますよ。さて、僕は軽く戦闘をし終え、休憩をしている。互いに竹筒で作られた水筒の水を飲みながら、今までの特訓を振り返っている。

「暇だねえ」

額に生えた一本角の女性が、岩の上で瓢箪に入っているお酒を飲みながら此方を見ている。紅い着物を着ており、胸元が少しはだけている。彼女の名は「牡丹」である。旧姓は響子なのだが『名を捨てるから、新たな名をつけて欲しい』と僕に言っただけで、牡丹と名をつけてあげた。何故、名を改名したいと言ったのか、なんとなく分かった気がする。多分、あの里の襲撃がきっかけだろう。だが、それが本当のきっかけなのか分からない。

「まさか、ここまで大変だったとは……」

幻想郷のルールでスペルカードを使用する『弹幕ごっこ』と言ったのが生まれた。そこで、スペルカードを互いに作り練習をす事になった。天夜には感染させるスペルカードを長時間使用し続けてもらい、体になじませる事を主としてやっている。今現在は、感染率を0%に戻して休んでいるが、最大で二時間までは100%を維持することが出来るようになった。

「まあ、生きてて良かったじゃないか。では、これより模擬試合と行こうか。牡丹、頼んで良いかい」

「ああ、私は構わないよ。私もスペルカードを作ったばかりで、練習相手が欲しかったんだよ」

瓢箪を腰に付け、此方へと歩いて来た。そして、胸元から三枚の札を取り出し振袖の中に閉まった。何の意味があるのか全く分からんが、色っぽさに魅入られるが、天夜達の模擬試合の方が興味がある。なんでかって？ それは、牡丹の能力を初めて見るからだ。

さて、両者を見ると互いに準備が出来たようだ。天夜は箆手を装着し、スペルカードを三枚取り出し振袖の中に入れる。それに対し、牡丹は酔いが覚めたのか軽く拳を握り天夜を見て笑っていた。

「両者の準備完了を確認した。では、試合開始」

「うおおおおおおおお」

互いに走り出し最初の一発をぶつける。拳と拳がぶつかり、その衝撃でで地面に亀裂が入った。牡丹は生身の状態でこれほどの力を出せる天夜に驚きつつも、楽しそうに笑っていた。天夜は天夜で、

真剣な表情でその一撃に耐えている。

「へえ、私の一撃に耐えるなんて流石は汐の式神だね」

「鬼四天王を束ねる鬼神と互角に争ったと聞いていたが、鬼の大將にならず、山を降りたときいたのだが……これほどとは」

互いに話せるほど余裕があるのだろうか、天夜の方は苦しそうであつた。最初の一撃は、牡丹の方が重かつたらしい。だが、それでも耐え続けている天夜は凄いと思う。

「ああ、この山を出て行つたアイツのことかい。別に鬼の大將とかになりたくもなかったからねえ、私が一時的に山を降りて桔梗のところで世話になつてたが、腕は鈍らせてないよ」

笑いながらも拳に力を込めて押し返そうとする牡丹に対し、先ほどまで苦しそうだった天夜は、余裕の表情で押し返し始めた。どうやら、スペルカードをまだ使用せずに戦うらしい。全く、とても熱い試合が楽しめそうだ。

「ツク!? 流石にこのままではヤバイな」

天夜が拳を回し牡丹の拳を弾き、後方へとバックステップをする。そうはさせまいと、牡丹は異様な速さで天夜に走り出した。

「逃がしはしないさ!! この一撃に耐えられるかい」

「速い!? だが、俺だつて此处で負けるわけにはいかん」

牡丹の拳を何とか避け、振袖から札を取り出した。これがスペル

カードだ。とうとう弾幕勝負が始まるようだ。天夜は様々な妖刀から繰り出す技をスペルカードとして作製したと聞いているが、どんな物なのだろうか楽しみである。

「距離をとるには、コレで充分だ！！」妖灯「暗闇の園」

天夜が宣言したスペルカードは、言わば自分の周囲を闇で囲うものだ。そして、相手の周りに狐火が現れ爆発すると言うものだ。ただ、これには弱点がある。それは、爆風による回避のため天夜自身にもダメージが入ると言うことだ。

「こんなん、目暗ましのつもりかい」

「距離をとる為には十分さ」

黒い球体が天夜たちは包みこんだ。そして、すぐに中で爆発したのだろう、爆発音と共に天夜たちがそこから飛び出してきた。二人とも傷はなく何事もなかったかのように構えなおした。

「なるほどね。確かに距離をとるには最適な技だ。だが、私には意味が無いよ」

牡丹は微笑みながら天夜の元へと走り出した。まだスペルカードを一枚も使用していない牡丹に対し、天夜は二枚目のスペルカードを握りながら牡丹を見つめている。

「接近させなければ良い話だ。『獄炎「罪深き蒼炎」』」

このスペルカードは、相手への接近を防ぐものだ。確か、コレに触れると炎が相手に纏わりつき、相手を一時的に行動不能にさせる

モノだったはずだ。

「なるほどね。だけど、私には効かないねえ。なんせ、私の能力はコレだから」

牡丹の体を何かが駆け巡り始めた。とても眩しい存在が足元へと集まると、今まで以上の速さで天夜へと向かう。牡丹へと襲いかかる蒼炎を避け続けながら、スペルカードを一枚取り出した。どうやら、牡丹もスペルカードを宣言するらしい。

「さあ、私もいくぞ！！ 『雷符「雷神の怒り」』」

牡丹の右腕から白い光が集まり始めると同時に、太陽を隠すように雲が空を覆い始めた。どうやら、牡丹の能力がようやく分かった気がした。彼女の能力、それは「雷を操る程度の能力」だろう。

「コレを耐えられるかい？ 天夜」

「ツチ。速度が戻った途端、この攻撃か」

天夜は舌打ちをし、右腕に蒼炎を纏わりつかせた。この『獄炎「罪深き蒼炎」』は、自身にも纏わりつかせることが出来る。ただ、この状態を維持することが出来るのは、4分間だけである。

「「まだまだあああああ」」

蒼炎と白雷を纏った互いの拳がまたぶつかり合う。ただ拳がぶつかっただけで、息苦しくなってきた。大気の空気が一瞬で薄くなったらのだろう。だが、この一撃で此処までの事を起こせるとは、流石だと僕は思う。空から落ちる雷を蒼炎が相殺する光景は、とても

美しいものだった。

「あれ、汐さん。これは一体どう言うことですか」

俺の隣から白い尻尾を生やした、剣と楯を持った妖怪が現れた。巫女服に近い白い服に赤と黒を基調とした袴を穿いている。彼女の名は桔梗である。僕の妻候補の一人らしい。一体いつの間にそんなことを決めたのか、僕には全くもって分からない。

「桔梗か。いや、模擬戦をしているんだよ。コレ、中々凄くないかい」

「はい、確かに凄いですね。でも、これを異変として博麗の巫女が来たらどうするおつもりで」

そう、最近になって博麗の巫女が活発に動くようになったのだ。博麗神社の巫女こと「博麗^{はくれい} 霊夢^{れいむ}」ともう一人、魔法の森に暮らしている「霧雨^{きりさめ} 魔理沙^{まりさ}」が、この世界では異変の解決組は彼女らである。まあ、いつも博麗神社へと夕食を作りに行ったり、魔理沙が遊びに着たりなどが多いがな。

「まあ、そこらへんの事は事前に報告したからね。そう言えば、姫天狗の葵^{あおい}は、どうしたんだい？ 見に行くとか言っておいて、全く来る気配が無いのだが」

「ああ、姫さんなら天魔様から逃げてますよ。汐さんのお気に入りのお酒を盗んだことが天魔様にばれて、逃げ続けてます」

そうかそうか。あの悪戯娘は、そんなに俺を怒らせたのか。天魔の所に行つて、一族根絶やしにしてやろうかな。

「汐さん、お願いします。一族根絶やしとか考えないでください！
！ 姫天狗様を持ってても構いませんから」

そんな怯えている桔梗を見ながら、心を落ち着かせようとした。だが、目の前に現れた女性を見た瞬間、怒りがピークに達した。青い頭巾を頭に付け、黒い羽を背に生やし、花の絵が描かれてる紅い着物に白の袴を着ている。見た目は二十歳そこそこであるのだが、コイツはいつも俺の楽しみを邪魔をする。今回でもう十回目である。そろそろ、調教が必要であると思っている。

「ふう、なんとか逃げられたわ。汐、遊びに……え」

「よし、葵。君には、七夜地獄を味わってもらうことにしよう」

今現在、失の窯の解放中で御座います。戦闘には支障はないだろうが、一同が怯えているのは確かだ。天夜と牡丹が急に距離を取り戦闘の続きをし、桔梗は急いで岩の影へと逃げだしている。

「え、ええ！？ なななな、なんでよ」

「桔梗から聞いたんだ。僕の秘蔵の酒を盗んだらしいね」

なんでその事を知っているのな感じで驚きながらも、段々と怯え始め距離をとる葵に対し、逃がさないように『時間停止』を発動した。体が動かず固まっている葵の肩に手を置き、ゆっくりと影の中に沈めると同時に解除した。

「え、ええええええ！？ ちょ、助け」

「最近、人間に厳しいのは別に良いけどさ。怪我までさせるとか、石ぶついたりとか、いろいろと聞くんだよ。あと、僕の楽しみを奪った罪とかもろもろと、ここで清算してこい」

段々と沈んでいく葵を見ながら、満面の笑みで言う。そう言えば、一言つだえるのを忘れて居た事に気が着いた。まあ、言っておいて損はないから言っておけよう。

「そうそう。最近、七夜が『昔の癖が戻った』と言って、凄く喜んでたんだよ」

「ななな、何！？ 昔の癖って」

「触手攻め」

その一言で青ざめる葵を見ながら、七夜は楽しそうに笑い始めた。ある意味、この光景は本当に怖い物であるのは確かである。昔の話ではあるが「DSの子をDMにさせるとかが楽しい」と言って、何人もの鬼畜姫をDM姫に変えてやったとか、言ってたような気がするけど気にしないで良いよね。完全に葵が影の中に入ったのを確認し、天夜と牡丹を見る。互いに互角の試合をしている。

「ほほお、良い戦いをしているようだね」

「ふむ、こっちに確か天姫あまひめが来たはずなのだが。おや、汐ではないか、天姫——いや、葵を見なかったか」

僕の隣に髭を生やした男がやって来た。背中には漆黒の四枚の羽を生やしたお爺ちゃんが立っている。葵を探しているらしく、周りを見渡している。そう言えば、葵とはどういう系で知り合ったかと

言つと、ここでの修業をする際に、天狗の里の主である天魔に会いに行つたときに出会つた。うん、今でも僕の家に来ては一緒にお酒を飲む仲である。

「ああ、葵なら七夜に預けましたよ」

「……。なら、安心だな。では、ワシは仕事があるのでな。葵は汐にやるから後は任せたぞ」

背を向けて空へと飛ぶ姿を見て、僕は微笑みながら男の妖怪に向かって言う。

「ああ、分かつたよ天魔。あ、そうそう。今度一緒にお酒でも飲みましょう」

「うむ。楽しみにしているぞ」

そう、彼が天魔である。妖怪の山の中で一番偉い妖怪である。さて、飛び立つた天魔を見送り、天夜たちの戦いに集中することにした。では、今の所どちらが優勢か説明しよう。

「さて、天夜は蒼炎を纏つた状態での接近戦。牡丹は、白雷を纏つて回避に専念か。それにしても、四分以上経っているのに、良く維持しているな」

「練習のたまものですね」

桔梗が僕の隣で、ジッと天夜たちの戦闘を見ていた。途中邪魔が入ったりもしたが、長時間戦の戦いを見ている。ちなみに調教の件は嘘で、怪我をしない為に僕の中に入れたのだ。七夜の傍にいれば

怪我をせずに見ることが出来るのだ。

「さて、そろそろ本気の状態に入るか。危ないから下がっていなさい。葵は七夜のそばで見ているから怪我をせずに済むが、桔梗を入れるのは流石に無理だ」

「そそ、そうなんですか！！ あれ、でも七夜さんの所にいるってことは、出れないのでは」

「……………、あ」

すっかり忘れていた。七夜の所にいると言うことは、脱出不可能である。まあ、ご愁傷さまと言う事で良いか。別に七夜と入れ替われば、葵達とまた会えるから良いかな。

「まあ、大丈夫さ。諦めてもらうと言う事で、ね」

桔梗に向けて満面の笑みでそう言いつつ、天夜達の方を見た。天夜は最後の三枚目のスペルカードを取り出した。それを見てか、牡丹も一気に残り二枚のスペルカードを取り出した。

「さて、体も温まったことだし……本番と行こうか」

「フフフ、そうだね。では、私も本気で行くでしょう」

宣言！！ 「浸食『光を喰らう者』」

宣言！！ 「雷帝『闇を掃う者』」

互いの宣言により、姿が一瞬にして変わった。天夜は、蒼い着物が紅色に、羽衣は紫色に変わった。黒い髪は白髪に変わるが、皮膚

の色は変わらず肌色のままである。そして、牡丹はと言うと髪も服も変わっていないが、全身に紅いオーラを纏っていた。

「さて、もう一つ宣言させてもらおうよ」

宣言！！「蒼雷『祖たる雷』」

牡丹の宣言で、空から蒼い雷が落ちる。どうやら、この雷は触れた者を一瞬にして滅ぼしてしまう強い力があるらしい。現に、周りにあった岩が一瞬にして爆散して、跡形もなく無くなっている。その衝撃波で、桔梗が吹き飛ばされそうになったので、腕を掴み僕の左側へと寄せ、コートの中に入れ肩を抱きしめる形で、桔梗を守っている。桔梗は顔を真っ赤にしているが、すぐにジッと戦闘に集中した。

「さあ、本気の試合と行こうか！！ 天夜」

「ああ、良いだろう。汐殿との特訓の成果、その目に焼きつけな」

肉眼で確認出来ないほどの速さで、二人がぶつかり合った。互いの拳がぶつかると同時に、そこには凄まじい爆音と衝撃波が響き渡る。互いに本気に戦っているのだが、模擬戦であることを忘れているみたいだ。あまり本気で戦うと、山の崩落と言う妖怪の山が無くなりかねない。危険と判断したら、すぐに止める為に軽く右肩を回した。

「桔梗、大丈夫かい？ もう少し強く抱きしめて良いぞ」

「へ！？ あ、はい」

頬を紅く染めながらも、少し強めに抱きしめる桔梗を守りながらジッと戦闘を見守る。

「っち！！　まだまだ」

天夜の声が聞こえたのだが、姿が見えない。感染率を使えば肉眼で見る事は出来ると思うが、めんどくさいのでやるつもりはない。ただ、止める時は本気で止めるつもりだ。

「ハハハ。こんなに楽しいのは、久方ぶりだね！！　心が躍るわ」

「俺も同じだ。汐殿以外にこれほどの相手が居たとは、楽しすぎて狂ってしまいそうだ」

凄く楽しそうなのだが、二人の拳による一撃によって地面が砕けたりしている。空中での戦闘ではなく、地面での戦闘なので地面が常に衝撃波で砕かれている。僕らには被害が無いので安心だが、衝撃波が凄いので吹き飛ばされそうにはなる。

「さあ、最後としようじゃないか」

牡丹の声が聞こえたと同時に、二人が立ち止まっている。互いに傷だらけではあるが、それほど深い傷はなかった。どちらかと言えば、かすり傷が多かった。

「それには賛成だ。この一撃で終わりにしようか」

「ああ、そうだねえ。この一発で全て終わらせようじゃないか」

互いに右拳を握り締めながら、蒼炎と白雷を纏いながら構えをと

る。どうやら、本当にこの一撃で全てを終わらす気らしい。多分だが、僕ら完全に吹き飛ばされそうだね。

「空中に避難するよ」

そう言っ、桔梗を姫様だっこして空中に急いで飛んだ。衝撃波で全てが吹き飛ばされる可能性が高いので、さらに距離をとった。肉眼でなんとか確認することが出来る距離まで逃げ、二人の最後の一撃を放つ瞬間を見つめる。

「あ、あの！？ どうしてここまで逃げる必要が」

「全力の牡丹の一撃は、山を一つ消し飛ばすことが出来る。天夜は、感染率を増加した姿での全力の一撃は、牡丹の全力の一撃に等しいつまり、その衝撃波で僕らが吹き飛ばされる可能性が高いのさ」

僕の感染率50%での一撃に耐えきつた牡丹だ。天夜の全力の一撃に耐えられるが、牡丹も全力の一撃だ。互いの衝突で何が起るかわからない。あ、そうそう。僕の50%は天夜の100%と等しいですよ。

「あやや？ 汐さんじゃないですか、さっきから騒がしいのはなんですか」

目の前から見覚えのある姿が見えた。白いスーツに黒いスカート、背中には得た漆黒の翼に紅い頭巾を被った女性。彼女の名は射命丸文である。天魔にはちゃんと言っていたが、文はその時いなかった。なので知らないようだ。天魔が教えていると思った

「ああ、天夜たちの模擬試合だ。危険だから此处で見て居た方が良

い」

「そうだったんですか。これは良い記事になりそうですね。そう言え、誰と戦っているのですか」

「牡丹だよ。スペルカードでの戦闘訓練も兼ねてるから、楽しんでいるみたいだよ」

それを言うと、凄く楽しそうにメモを取っていたのだが、牡丹の名を聞いて固まっていた。文の顔は、絶望と言っている表情をしている。そんなに危険ではないと思うのだけだな。

「コレで、終わりだ」

二人の声が聞こえたと同時に、文が僕の背に隠れ見ている。それほど危険な物ではないのだが、近づけば確かに危険だね。

「さて、衝撃波が来るから危ないね」

その一言同時に、凄まじい衝撃波が現れた。全力の一撃での衝突なので、その衝撃波は凄まじいものである。僕ならともかく、それ以外の子だったら即死してるねコレ。

「ああ、ようやく衝撃波がやんだか。でも、二人とも動かないね」

「ええええええ！？ 山の樹が！？ なぎ倒されている」

涙眼でその風景を見ている文に対し、僕は取りあえず天夜たちの方へと向かった。そこには、クロスカウンター状態で固まっている二人の姿があった。取りあえず、此处で言うべき事を言うことにし

た。

「この勝負、引き分け！！で、良いよね」

こうして、この勝負は終わったのだった。一樣二人を人里にある新たに移転と増築した家まで一瞬にして運ぶ。ああ、文たちも一緒だよ。

「さて、二人とも寝かせるとして。文たちは二人の看病を頼むね」

「ああ、はい！！任せてください」

文と桔梗は息を合わせて言ったので、僕は玄関前まで向かう。二人とも疲れきっているだろうから、今日は栄養のある夕食でも作ろうと思う。

「さてと……あれ、そう言えば妹紅と麟の姿が無いのだが、どこへ行ったのだろうか？ 考えて見ればルーミアもいないね」

『ああ、アイツらなら妖怪の山で採取に行ったぞ。なんでも、今日は山菜の炒め物作るとか何とか』

「そっか。皆、優しんだな」

そんなことを言っただけで外へと出ると、何やら紅い霧が里を覆っていた。この霧になんだが、人間に害があるような感じがする。

「ありやうや、これは異変みたいだね。こんな時に異変とか、本当に困るな」

僕は髪を掻きながら空を見ると、空を飛ぶ一人の少女を見つけた。どんな姿が良く見えなかったが、誰が飛んで行ったのかなんとなく分かった。

「博麗の巫女か。さて、僕も行くとしようかな。流石にこのままではご飯も作れないしね。この異変、僕も参加させてもらっよ」

そう言いつつ、空を飛んで行った少女の後を追うのだった。

十二話 始まり（後書き）

今回、頑張って書いたのですが……..
うん、大丈夫よね

さて、次回はあの「氷の妖精」対「猫の妖精」の戦いです
猫の妖精の活躍に期待しようかな

では、また次話で会いましょう ノシ

十三話 氷vs猫（前書き）

こんばんわ

今回は、チルノ対猫妖精の戦い（短いけどね）ですw

さてさて、どうなるのやら………

では、あとがきで会いましょうw

十三話 氷 vs 猫

紅い霧が里を覆う中、里の人間たちは家の中で避難しているのか誰も外に出ていなかった。さて、僕は今どこにいるかと言うと、魔法の森上空である。紅い霧の中を飛んで行った巫女さんを追っているのだが、妖精が邪魔をするので何体か倒しながらなんとか追っている。まあ、彼女の後を追えば、この霧を発生させた発生源まで会えると思っている。よく見れば、その巫女の隣を簾に載った少女が話しをしながら飛んでいた。

「ふむ。ココは二人にまかせて、さっきから僕を見ている人に挨拶でもするか」

僕は一時止まり、絶に僕を喰わせた。今の僕は誰にも見ることが出来ない。見るどころか気配すら感知することが出来ない。絶の技の一つ『存在喰い』である。コレを使うと、絶と同じ透明な存在になることが出来るのだ。

「あれ、確か此処を誰かが飛んでたはずだけど。どこに行ってしまったのかしら」

どうやら僕を見ていたのは、この金髪の女性らしい。上半身は白の襟と袖が出ている青いドレス服、そしてレース付きのピンクのリボンを腰に巻きつけている。確か、神魔の娘だった気がするな。昔、魔界へと無理やり霊夢に連れて来られた時に知り合ったんだが、彼女とお酒を飲んでいると毎回「アリスが可愛いわ」なんて言って、写真を見せてもらった憶えがある。

「おやおや、これは美しいお嬢さん。誰をお探しかな」

僕は絶から出て、彼女の目の前に現れた。彼女とは初対面だから、どんな子なのか楽しみであった。見た目からすれば冷静沈着の女性であるように見える。

「え！？　どうやって此処に」

「いや、絶対に僕を食わせて気配ごと消したんだよ。さて、僕は紅山汐。里の皆からは『喰らい神』と呼ばれている者だよ。気軽に汐と呼んでね」

僕は微笑み体に絶を纏わりつかせながら、周りから襲いかかる妖精達を全滅させた。さて、会話に集中しようと思ったのだが、懐かしい匂いを感じ其方の方へと向いた。よく見えないのだが、巫女さん達が戦っているみたいだ。

「私は、アリス・マーガロイド。アリスで良いわ。それより、なんで貴方みたいな神が、此処にいるのかしら？　あの二人に任せれば良いのに」

「ん？　まあ、何て言うか……この霧のせいで、里の人たちに迷惑かけてるし、最近暴れてないから憂さ晴らしかな」

「……、貴方が暴れたらこの世界終わりそうだわ。仕方が無いわね、私も一緒に行ってあげるわ」

溜め息を吐いたと同時に、僕の隣へとやって来た。なんだか保護者みたいな感じで嫌だけど、仕方が無いと諦めた。確かに、本気で僕が暴れたらこの幻想郷どころか、星ごと全て無に帰してしまう可

能性がある。

（ねえねえ、汐）

頭の中で葵の声が聞こえた。どうやら、彼女は七夜と席を変わったのだろう。ちなみに『席』とは何かだが、正確に言えばこの『焼き印で打たれた刻印入りの包帯』の刻印こそが席である。七夜の席は包帯の刻印ではなく、僕の腕に打たれた刻印の事である。その刻印は、七夜が僕の腕に付けた物である。さて、このまま無視するのも可哀相なので、取りあえず返事だけでも返すことにした。

（どうしたんだ、葵。何かあったのかい）

（お酒を盗んで、ごめんなさい）

最初の一声が謝罪に、少し戸惑ってしまった。僕も彼女には申し訳ない事をしてしまったのだ。二度と出ることが出来ない、七夜の世界に送ってしまったのだ。天音ちゃんや結衣たちが居る世界に、僕は送ってしまったのだ。僕の方が謝るべきだ。

（いや、僕の方こそゴメン。もう――）

（良いよ。私が悪いし。それに、こっちの世界の方が楽しいし）

僕の事を遮り、明るい表情で言う。とても楽しそうにはしゃいでいる葵に対し、僕はなんと良いのか考えている。葵はいつも前向きでとても明るい少女である。いつもではないが、僕の物を盗んだりはあるが、そんな葵が好きなのかもしれない。まあ、そんなことを考えていたら、少し恥ずかしそうに笑う葵の声が聞こえたが、すぐに何かを思い出したのか言って来た。

（あ、そうそう。七夜さんが、私に汐の『サポート』をするようにって頼まれたから、席についてるんだけど。私の能力を使えるようになったと思うんだけど、使えるかな）

ふむふむ、どうやら彼女の能力が使えるようになったらしい。折角だから使ってみようと思う。確か、葵の能力は『風を操る程度の能力』だった気がする。えっと、彼女の得意なスペルカード名は確か――

「スペルカード宣言！！ 疾風『薙ぎ払う竜巻』だぜ」

すると、目の前に巨大な竜巻が現れた。その竜巻が多くの妖精を巻き込んでどこかへと行ってしまった。

「汐、何をやってるのかしら」

「ああ、新たな力を試しただけだよ。さて、気を取り直して行こうか」

何事もなかったように先へと進む。アリスは溜め息を吐きながらも、僕の後を追う。そんなことをしているうちに、目の前に霧のかかった池が現れた。そこで僕らはとんでもない物を目撃した。

「メルと戦おうとは、良い度胸ニヤスね」

「ふん、私が最強であるって事を教えてあげる」

あの猫妖精の名前ってメルだったんだね。って、そんな事よりもだ。背中に生えた六枚の氷を生やした青い服を着た妖精と、猫の尻

尾と虹色に輝く羽を生やした、上半身を全て覆う薄茶色のコートに紅い短パンを穿いた妖精が、互いに湖の前で睨みあっている。ハツキリ言おう、猫妖精の顔はフードを被っているからなのか、顔の輪郭すら暗くて全く見えない。その暗い中から現れる顔文字みたいなのが、もしかしたら本当の顔なのかもしれない。

「あら、アレは確かこの湖に住んでる氷の妖精じゃない。確か名前は……チルノだったわね」

「そして、あそこにいるのが大喰いの猫妖精。速さとパワーを兼ね備えた妖精だ」

どうやらアリスと僕は互いの妖精の事を知っているらしい。チルノとか言う氷の妖精が、メルと言う猫の妖精と戦うみたいだ。これは見ものかもしれない。

「コレでも喰らえ！！ 氷符『アイシクルフォール』easy」

「この程度の弾幕で、メルを倒そうとは舐めているニヤスカ」

チルノから放たれる氷の弾幕を全て避けきり、メルはチルノに接近する。眼にもとまらぬ速さで接近し、白銀の爪で襲いかかる。文と互角に渡り合えるほどの速さで、チルノの目の前に接近したのだ。流石のチルノも防御は不可能かと思ったが、チルノは一瞬にして目の前に氷の盾を作り出しメルの一撃を防いだ。

「ニヤスニヤス！！ 流石は氷の人、メルの攻撃を簡単に防ぐとは凄いニヤスね」

「あ、あた、当たり前よ！！ 私は天才なんだから！！……あと、

数？薄かったら、ピチュってたわ」

『天才だから』の後が良く聞こえなかったが、あのメル of 岩石すら切り裂いた爪の攻撃を、氷の盾で防ぎつつ距離をとるチルノ。さらにチルノは弾幕を出しながら『攻め』と『守り』を交互に取りながらメルと戦っている。メルはメルで、チルノの弾幕を余裕で避けつつ攻撃を放つ。その光景に僕とアリスは、ただただ見惚れてしまった。

「メルとか言ったかしら。あの猫妖精って凄いわね」

「確かに、凄いね。いつも僕の作るご飯を食べに来てるけど、あれほどの力があるとは思っても見なかったよ」

流石にあの大喰いのメルが、これほどの攻防をするとは驚きである。氷の弾幕を避けつつ最後の一撃を与えた。それも、なんと凄まじい一撃なのだろうか。チルノが張った分厚い氷の盾を一瞬にして切り裂き、そのままチルノを落とした。

「アイツ、スペルカード無しでチルノを倒しやがった」

「え、ええ。何て言うか、凄まじいわね……彼女」

何事もなく倒したメルが、最後の一言を発する。うん、なんだか予想は出来ていたよ。彼女らしい一言で、僕に多大なる迷惑を被る一言だ。

「この程度ニヤスカ？ あ、お腹が空いたニヤス。食の人に、ご飯をたらふく食べさせてもらうのニヤス」

「……。絶対来させない為に、今の発言のみを忘れさせよう。神秘『忘却の彼方』！！コレでよし」

僕はスペルカードを宣言したのち、メルから逃げる為にアリスの腕を掴み目的地へと飛び去った。アイツに見つかりと、また思い出して襲いかかって来るに決まっている。きっとだが「食の人おおおおお！！ お腹が空いたニヤス！！ なんか食べさせて欲しいニヤス」とか言つて、抱きつきながら言うのだろうな。

「あの子から逃げるとは、それほど嫌なのね。まあ、良いわ。それよりも、このまま真っ直ぐ行った所に霧の発生源である館があるらしいわ。魔理沙曰く『きっとあそこが発生源だぜ』だ、そうよ」

「そっか。なら、早速そこへといこうか」

そして、僕は館の方へと急いで行くのだった。

十三話 氷vs猫（後書き）

はい、汐の能力が何個か出ました。

喰らった物が席につけば、その者の能力を使う事が出来る
さらに、自信を食わせることが出来る。

ですが、私的には・・・・・・・・メルさんが好きになってしまった。
今度、書いて見るかな

では、次話で会いましょう ノシ

銃四話 絶望の月（前書き）

こんにちは、こんばんは。もしくは、おはようございます。

今回は、異変解決します。ええ、霊夢たちが戦闘終了してからですよ？

ただ、汐もあそこまでなくて………え、汐さん？

何を——ぎゃあああああああ！？

銃四話 絶望の月

紅い霧の中を飛びながら、空を見上げた。そこにあるのは、夜空を紅く染める紅い月。あの日の記憶が頭の中を駆け巡る。過去を思い出すこと自体が不愉快でもあるのだが、それは僕自身が勝手に思いついた事だ。だが、あの懐かしい皆の事を思い出すと――。

「皆に会いたいよ……」

「弱音を吐くなんて、貴方らしくないわね」

どうやら、僕の呟きがアリスに聞こえたらしい。確かに僕が弱音を吐くなど初めてだ。何故だか紅い月を見ると、第一世代の皆の事やアンノーンの王妃との戦闘を思い出す。王妃の強さは桁違いで、俺ですら死を覚悟したほどだ。だが、結果的には王妃に勝った。王妃との戦いの日こそ、この紅い月が登る夜だった。

「らしくないな。まだ、俺に未練があるなんて」

「『俺に未練』って何なのか気になるけど……さあ、着いたわ。あそこがこの異変を起こした発生源がいる館よ」

アリスが指を差した方を見ると、紅い大きな屋敷が見えた。巫女と魔女が突破したのだろう、門の所でボロボロになって泣いている緑色の服を着た女性が立っていた。僕は何があったのか大体分かったので、無視する方向で館の方へと亜音速ロケットパンチ（絶を手纏わりつかせ、絶を亜音速で飛ばす技）で屋敷を一発で半壊させた。

「「え！？ 今何が」」

先ほどの音で驚いたアリスと、破壊の音に気が着き此方の方へやって来た緑服の女性。紅いツインテールにとても美しい女性が緑色のチャイナ服と白い長ズボンを着ている。

「ななななななな！？ 何をやっているんですか」

涙眼で訴える彼女に対し、さらに俺は帰って来た絶を圧縮する。コレが最初で最後の究極技である。ちなみにこの屋敷を壊す理由はただ一つ。紅い月のせいである。今日は王妃側が活性化しているのだ。紅い月は王妃側を活動させるのだ。ちなみにだが、王側は紫色の月だ。

「絶命せよ！！ 生の喜びを知れ！！ そして、絶望に落ちよ」

そう言ったと同時に右手に圧縮した絶が暴れ始め、後ろへと手を引き、勢いよく屋敷へと投げる。手のひらから離れた瞬間、強大な絶の波動が爆発。黒き巨大なレーザーが放たれ、屋敷の屋根どころか、一階から上が全て無くなった。

「ぎゃあああああああああ！？ 屋敷がああああああ」

「な……何て威力なの！？ 屋敷が一階以外全部消滅って……恐ろしすぎるわ」

「王妃側が活発しすぎだな。いつもなら屋根だけが吹っ飛ぶはずなのだが、困ったなこりゃ」

二人とも固まっているのを見ながら巫女と魔女、銀髪のメイドに

コウモリの羽を生やした少女、そして色鮮やかな水晶みたいなのが付いた羽を生やした、可愛らしい少女が此方を見て絶句していた。どうやら戦闘は終わり、異変は解決の方向で終わったようだ。だが、僕としては本気でム力ついているのもう一発準備を始めた。皆なんだか此方へと凄く速さで向かって来た。ああ、そうそう。なんでム力ついてるかと言うと、これも月のせいである。

「ああ、貴方、何のつもりなの」

「おお、お兄ちゃん何をしよう」と

「しし、汐、落ち着きなさい。ここは、博麗の巫女である博麗 霊夢に任せて、帰りなさい」

「そそそ、そうだぜ。この霧雨 魔理沙に任せて、帰ってご飯と一緒に食べる為に作ってくれ」

「ああああ、貴方、何のつもりか知らないけど、コレどうするつもりよ」

皆が煩い。さてさて、マジで怒りが爆発しそうになった。これだから紅い月の日は嫌なのだ。僕が俺に戻るスイッチが入りました。威力を増す為に愛刀である「試作品No.0 妖刀幻龍」を取り出して腰に差した。この妖刀幻龍は、アンノーンこと絶を入れる揺り籠みたいな物である。ちなみに七夜の揺り籠でもあるので、七夜が入ると――

『準備OKよ。揺り籠に入っただから、威力は通常の100倍よ』

「うっし。王妃側の暴走力を使って、この霧を発生させた原因ごと

此処を消滅させて終わりだな」

一同絶句どころか顔が青ざめている。さらに強大になる絶の力が体の中を廻るのを感じながら、ニコやかに頬笑みさらなる絶を右手のひらに集め始める。

『さてと、私達も忙しいの。天夜たちの夕食を作ろうにも、この霧のせいで里の人達が家に籠って、欲しい食材が買えないのよ。それに、この紅い霧のせいで、私達の闘争心に火が着いちゃったのよね』

「だからって、人の屋敷を壊すとかないでしょ！？ それに今ので霧が一瞬にして消えたわよ！！ もう良いでしょ」

コウモリの羽を生やした少女が叫ぶのを聞いて、周りを見渡していると霧が晴れていた。だが、この闘争心は消せはしなかった。

「確かにその通りみたいだけど、今は淒く戦いたいって衝動にかられてるんだよね。だ・か・ら、諦めて一度だけ落ちて来なさい」

「「え！？ 落ちるって」」

皆が声を八もらせるのを聞いて、微笑みながらスペルカードを言した。これは昔、王妃との戦闘で覚えた技なのであるのだが、この攻撃を喰らった当初は身体中の肩コリ腰痛が治ったのは言うまでもない。

「スペルカード宣言！！ 狂乱『深紅の月の雫』」

手のひらに集まった絶の球体が、俺の手の平から離れ屋敷の真上に紅い大きな球体へと変貌した。実はこれ、球状の絶が流星のごと

く紅い隕石をだすスぺルカードなのだ。コレ喰らうと、本当に肩コリ腰痛が無くなるから嬉しいね。死にはしないから大丈夫だけどさ。あと、飛行以外の能力封じも兼ねているので、コレ出た時点でもう試合終了しています。コイツ、狙った獲物は逃がさないの、当たるまで永久に降ってきます。

「「「ぎゃあああああ」」」

降り注ぐ紅い隕石を避け、能力を封じられて混乱しながらも泣きながら逃げ続ける少女を見ながら、ドン引きするアリスとチャイナ服を着た女性。そして、何事もなかったかのように溜め息を吐きながら、その光景を見つめる俺は、無言で家へと帰ろうとしたその時、俺の背後から体を誰かが驚掴みしている。背後を振り返ると、あの蝙蝠の羽を生やした少女が涙眼で言う。

「貴方は何者よ！！ 私達が何をしたって言うのよ」

「俺の名は紅山 汐。喰らい神だ。で、何をしたかと言うと、最近暴れてないから憂さ晴らし兼異変解決しに来ただけ。さて、後は君だけ見たいだね」

抱きついている少女と共に背後の光景を見ると、そこにはアリスとチャイナ服を着た女性、そして今背後にくっついている子以外が全滅していた。

「で、君の名前は何て言うんだい？ 答え次第では止めてあげても良いけど」

「わわわ、私は、レミリア・スカーレットよ」

ちゃんと返事をしてくれたので、約束通り止めてあげることにした。でも、コレって当たるまで永久的に続くから取りあえず止める方法はただ一つである。

「コレ、当たると肩こり腰痛が治るから、治して貰いなさい」

「え、貴方、何を――！？　なんで、掴むの」

レミリアの首根っこを掴み、ゆっくりと投げる体勢に入り投げ飛ばす。悲鳴と共にレミリアは紅い球体の中へと入った。その後、聞こえたのはレミリアの悲鳴と喘ぎ声だけだった。

「貴方って鬼ね」

「鬼と言いますか、悪魔ですね」

二人とも酷いこと言うので、気配を消して背後に立つ。眼には見えない速さで背後に立たれた為、驚きと冷や汗を掻く二人をニコやかに微笑みながら首根っこを掴む。

「君たちも、逝ってくと良いよ」

「「え？　な――ぎゃああああああ」」

そのまま二人を投げ飛ばし、球体の中へと入って行った。まあ、その後どうなったかと言うと、スペルカードの効果が切れて皆が土下座して俺に謝った。魔理沙は窃盗、霊夢は何もしていないが謝り、後は異変を起こした事について謝った。

「まあ、次はきつともっと素晴らしいスペルカードを使うでしょう」

かな」

「「「本^{マシ}気で止めてください」」」

こうして、異変は解決されたのだった。

銃四話 絶望の月（後書き）

ああ、肩コリ取れて気持ちよか——あら、皆さんどうもですw
いやあ、汐さんって凄いですね。コレ本当に肩コリ取れましたよ。

さて、次話では宴会を書こうかと思います。

汐さんは、いつでも異変解決後に、可愛いしいお仕置きをするので
すね

さて、次の獲物はどうなる事やら……

では、また次話で会いましょう ノシ

十五話 宴会に呼ばれて（前書き）

はい。なんだかんだで、もう十五話です。
最近思う事があります。

汐って、気がつかない間にハーレム作ってそっだよね

もう、タグにハーレムでもつけようかな？

十五話 宴会に呼ばれて

蒼い空が広がり、温かな日差しが照らす平和な昼下がり。僕はいつもの右腕が露出しているコートを着て、玄関の前に立っている。異変が解決して何日か過ぎ、里の皆が僕の家に来て来たのだ。理由は簡単で、僕が大量に作った『豚汁』を貰う為に並んでいる。我ながら大量に作ってしまったので、皆に配っている。

「ありゃ、これは慧音さんじゃないですか。豚汁を貰いに来たのかい」

「ああ、そうだ。なんせ、汐の作る料理は人気だからな」

そう言つて、蒼い服を着た白髪の女性こと、里の守護神である慧音が土鍋を持ってやって来た。彼女の持つ土鍋を見て、僕は微笑みながらソレを受け取り豚汁を入れる。その姿を見てか、とてもワクワクしているのだろうか、慧音の幸せの気を感じた。

『慧音つたら、そんなに汐の料理が楽しみなのね。私は毎日一緒に食べてるから美味しいのは分かるけど、そんなにワクワクするものかしら』

「ああ、ワクワクするぞ！！なんせ、汐の作る料理を食べると心がポカポカするのだ。『今日一日頑張るぞ』と言うが、一気に沸くのだ」

興奮しながら言う慧音の言葉を聞いてか、里の皆も頷いた。それほどまでに、僕の料理が好きなのだろくな。なんとなく嬉しくなり、これからも頑張ろうと思ひ始めた。

「慧音殿の言う通りだな。確かに汐殿が作る料理を食べると、心の底から温かな気持ちが沸く。汐殿の料理には、愛がこもっているのでしょう」

「ううん。そこまで言われると恥ずかしいのだけど……はい、慧音。少し冷えちゃったけど、弱火で三分くらい温めてから食べてね」

この弱火がポイントなのである。必ず僕が作った料理を食べる時は、弱火で三分温めるのがポイントなのである。さて、慧音に土鍋を渡し帰ったのを確認をし、水を飲み椅子に座ろうとした瞬間、目の前に見覚えのある一人の女性が現れた。白銀の髪の毛に、もみ上げの所がツインテールのメイド服を着た女性が、此方を見て申し訳なさそうな表情で現れた。

「あの、汐様で御座いますか」

「うん。そうだけど、君は——ああ、レミリアさんのメイドだったよね」

その言葉を聞いて、深く御辞儀をする彼女。取りあえず、家の中に招きあまった豚汁を空いた器によそり、メイドさんに箸と共に渡す。それを見て、ジッと見つめながらゆっくりと器と箸をとり、手を合わせ『頂きます』と言った後に飲み始めた。

「美味しい……お嬢様にも食べさせてあげたい」

「別に良いけど、僕に何か用があるから来たんだよね」

器を置いて此方向き、黙って頷いた。どうやら、僕に用がある

のは確からしい。どんなようなのだろうか、大体予想は着く。多分だが、謝罪文だろう。だが、メイドがポケットから一枚の手紙を取り出した。

「ええ、コレをお届けに来たんです。そう言えば、名を名乗っていませんでした。私は『十六夜^{いざよひや} 咲夜^{さや}』と申します。紅魔館のメイド長をやっております」

「咲夜さんか。で、これは何かな……」

咲夜から手紙を受け取り、内容を黙読して読む。とても綺麗な字で書かれていて、とても読みやすかった。内容は簡単にこうである。

「異変を起こしたお詫びを兼ねて、宴会を開くので来てくださいと。料理などは各自で持ち込み可です。ふむふむ、宴会ねえ。皆を連れて来ても良いのかい」

「はい、構わないですよ。皆さまが来る事を、レミリア様は楽しみにしています」

咲夜さんは本心で言っているらしく、僕は黙って頷き立ち上がる。手紙を絶に飲ませ、皆に届けさせた。妹紅は迷いの竹林で、里の人達の永遠亭への道案内をする仕事。ルーミアは今日の食材を集める仕事。天夜は妖刀作りをしている。

「分かりました、参加させて頂きます」

「ありがとうございます。開催日は今日の夜、場所は紅魔館で行います。では、私はコレで……あと、御馳走様でした」

咲夜さんは嬉しそうに微笑みながら、一瞬にしてその場から消えた。彼女の能力は、すぐに分かった。それは、時を操る力だ。まあ、この力は持っていたから、絶がすぐに彼女の能力を教えてくれた。

「なるほどな。さて、豚汁を作るとしようかな。レミリア達にも食べさせてあげたいしね」

そう言つて、残りの在庫を確認しながら、今日の宴会に参加する準備を始めたのだった。

さて、時間は過ぎ夜になった。紅魔館まで皆で参加する為、鍋を持つて向かつていた。天夜は大太刀を背負いながら無表情で飛んでいる。多分、鬼との宴会を思い出しているのだろう。

「天夜、安心して良いよ。普通の宴会だから、鬼みたいにお酒を飲む必要ないからね」

「ええ、そうなのですが……なんだか、嫌な予感がするのです」

天夜が言つと、本当になりそうで怖い。現に一度だけだが、その感が当たった事がある。それは、鬼の宴会である。アイツが一番嫌っているのが、鬼の宴会である。あの時はとても酷いものだったな。

「大丈夫だよ、レミリア達の開く宴会だしね。きっと大丈夫だと思うよ」

「だと、良いのですが」

とても心配そうな表情をするのを見て、僕は優しく微笑みながら先へと急ぐ。手に持った鍋を落とさないように速度を調節しながら向かう。『絶に入れば良いのでは』と思う人もいるだろうが、絶がつまみ食いをするので入れられないのだ。特に七夜が一番つまみ食いをするので、それを避けるために手で持って運んでいるのだ。

「さて、もうそろそろ着くぞ。見えて着たね、あれが紅魔館だよ」

僕は微笑みながら見て居る方向を皆が見ると、そこには紅い屋敷が立っていた。あれこそが紅魔館である。ただ、元通りに治っているのを見て、驚きを隠せないでいるがね。

「あれほど壊したのに、治っているとはね。修復を絶に任せて良かったわ」

実は、彼女たちが気絶している最中に絶によって修復作業をしてもらったのだ。綺麗に治っているのを見て、良い仕事をした絶達を褒めてあげるとしよう。

「汐殿、これは凄いですね。確かに、これは素晴らしい赤一色の屋敷ですね。目が痛くなるけど、この様な大きい家に住んでみたいものです」

「うーん。僕はこう言う屋敷は苦手かな？ 迷子になることが多いしね」

紅魔館の門の前に着き、ゆっくりと降下する。そこには、見覚えのある門番が立っていた。

「えっと、汐さんで合ってますか」

「ええ、合ってますよ。貴方は」

天夜が手紙を彼女に渡したのを確認してから、僕は彼女の問いに答えたのと同時に問うと、手紙を確認し終え微笑みながら答えてくれた。

「私は『紅^{ほん}美鈴^{めいりん}』と言います。紅魔館の門番をしているんですが、いつも寝てしまうのですよね」

「ありやりや、それは駄目だね。コレでも飲んで眼を覚ますと良いよ」

天夜に鍋を持たせ、僕はコートの中から一本の水筒を取り出した。これには眠気防止の水が入っている。コレも第一世代の遺産みたいなものだ。苦くはなく、とても甘い飲み物である。美鈴は嬉しそうに受け取り、ポケットにしまう。それを見て、僕は天夜から鍋を返してもらった。

「ありがとうございます。でも、今は勤務中なので、休憩時間に飲ませてもらいますね」

「うん、分かったよ。では、入るね」

そう言っ、僕らは紅魔館へと入った。こうやって見ると、紅魔館はとても綺麗な屋敷である。綺麗な庭と沢山の妖精達が、せつせと宴会の準備をしている。さらに、魔理沙や霊夢、アリスに文など、知り合いが沢山いた。

「いらっしゃいませ、汐様」

目の前に現れた咲夜に皆が驚いていたが、僕は動じずに裂く夜に鍋を渡した。咲夜の願いを叶えるのも、神様の勤めであるのですね。中身はとても美味しい豚汁ネギなしである。咲夜は中身を見て、嬉しそうな表情をしていた。

「うん、来たよ。コレ、皆で食べてね」

「ありがとうございます。お嬢様達がお喜びになるでしょう」

本当に嬉しそうである。まあ、里では有名だからね。さてさて、人が集まり始めたようだ。永遠亭の住人に八雲家、後は……アレは確か紫の親友とか行っていた西園寺家だったはずだな。実際に会った事はないが、こうして見て見ると美しいものだね。

「では、私はこれで。どうぞ、楽しんで行って下さい」

「ええ、楽しませてもらいます」

微笑みながら咲夜に言い、皆を解散させた。これは、天夜たちの他との交流の輪を広げる為だけではなく、西行寺家と話している紫に紹介してもらったためだ。

「やあ、紫。宴会に来てたんだね」

「あら、汐じゃない！！　話は聞いてるわよ、貴方がキレて館が一階から上が消滅したとか」

扇子で口元を隠しながら言う紫に、苦笑しながらも頷いた。まさか、紫たちにも知られていたとは、これは文の仕業だろうな。まあ、

別に良いけどさ。そんなことを考えていると、目の前にいる水色の着物を着た、桃色の髪的女性が楽しそうな声で言う。死者が付ける三角斤みたいな物を付けた、紫と同じ形の色違いの水色帽子をかぶっている。

「あらあら、紫。此方の殿方を紹介してよお」

「そうだったわね。彼は紅山 汐。別名『喰らい神』と呼ばれている方よ」

紫が僕を紹介したので、それと同時に御辞儀をした。全くもって神様らしくない行為なのだろうか、二人とも驚いていた。だが、すぐに微笑み返してくれた。

「どうも、紅山 汐です。気軽に汐と呼んでください」

「あらあら、ご丁寧にどうも。私は『西行寺 幽々子^{さいぎょうじ ゆうけい}』よ。白玉楼の主をやってるわ。私も気軽に幽々子って呼んでね」

そう言っ、すぐに僕に抱きついてきた。以外に紫と同じように胸が大きいので、抱きつかれて胸が当たっている。柔らかな感触はあるが、別に興奮することもなかった。まあ、それは気にせず、幽々子の背後でオレンジジュースを飲んでいる刀を二本持った少女が見えた。

「あははは。あれ、その刀を持った子は」

「あら、そうね。妖夢ちゃん、汐に自己紹介して」

幽々子が離れたと同時に、僕を見てか緊張しながらも頑張っ

つちを見ていた。うん、可愛いね。天夜の事も紹介しようと思
い、絶対に天夜ちゃんを呼ぶように伝えた。

「わわわ、私の名前は『魂魄こんぱく 妖夢ようむ』と申します！！ 白玉楼の庭
師をしております」

「妖夢ちゃんね。うん、覚えたよ。では、此方も式をご紹介しない
とね。そろそろ来ると思うよ」

微笑みながら言うと、後ろの方から天夜がやって来た。いつもの
蒼い着物に緑色の羽衣を着ているので、少し目立つがカッコイイ男
である。うん、あの太刀を背負っている姿がさらにカッコ良さを引
き立ててるね。

「汐殿、お呼びでしょうか」

「うん、呼んだよ。此方は西行寺家の方々で、此方の女性が西行寺
幽々子さん。で、此方の子が魂魄 妖夢さんだよ」

僕はいつも通りの感じで紹介をする。まあ、紫の家族は以前に紹
介したから良いけどね。さてさて、天夜の反応が楽しみである。

「そうですか。私の名は衣乃月 天夜です。妖刀などを作っており
ます」

「妖刀ですか！？ わわ、私にも刀を作って貰ったりとか……」

妖夢が喰いついた。流石は庭師だね、刃物に関しての喰いつきよ
うが面白い。それに天夜も微笑みながら、刀について妖夢と話して
いるし。そして、そのまま連れて行ってしまったし。

「あらあらまあ。妖夢ちゃんがあんなに楽しそうに話してる姿を見るのは久しぶりだわ」

嬉しそうに笑う幽々子を見て、僕も微笑みながら頷いた。あんなに嬉しそうに話す姿は、僕も久しぶりに見たよ。さて、そろそろ宴会が始まるみたいだ。僕は二人から去り、他の人達と会話を楽しむ事にした。

「あら、汐じゃない」

「おや、アリスじゃないか」

アリスが一人で美味しそうにお酒を飲んでいたが、僕に気がつき此方へと向かってきた。なんか嬉しそうなのだが、どうしたのだろうかね。

「貴方のあのスペルカード。えっと、確か『狂乱』深紅の月の雫』」
だったわね」

「ああ、アレね。肩こり腰痛、頭痛にぎっくり腰。あらゆるモノを重力を用いて治し、逃げまどう敵を紅いホーミング隕石で撃ち落とす究極のスペルカードだけど、それがどうしたの」

そう、異変解決の時に全力で使った物である。それがどうしたのか聞いてみると、アリスはポケットの中から何やら見覚えのある人形があつた。それは、僕が第一世代で教師をしていた時に、生徒から貰った大切な物だ。大切な、本当に大切なお守りだ。俺が眠りにつく時に無くしたが、アリスがそれを見つけたらしい。

「あの中に入った時に、コレを拾ったのよ。これって貴方の物でしょ」

「ああ、僕のお守りだ。まさか、あの中にあつたなんて」

「ええ、あの中で人と出会ったわ。シャマルさんにリーフィアさんとか、大きな町をみたわね」

アリスのその言葉を聞いて、僕は固まってしまった。アリスは、僕が喰らった国の中に入っていたのだ。そう、俺が守りたかった、誰にも触れられたくない世界の中に入ってしまったのだ。

「アリス、あそこの事は誰にも言わないでくれ。あそこだけは、汚されたくないんだ」

「ええ、分かっているわ。あそこは、とても素晴らしい場所だった。あんなに温かくて、優しい人達が楽しそうに貴方の事を話していた。あれが、貴方が住んでいた——第一世代の世界なのね」

僕は黙って頷き、アリスを連れて人気のない所に連れて行った。誰もいない事を確認してから、念のために絶に僕らを食わせてからアリスに話し始めた。

「アリス、君が見たのは、僕が俺だった頃の世界だ。そして、あそこだけが、僕の居場所だった。それ以外にも国があつたのだが、それこそ、能力を持たない人間を物扱いをしていた世界なんだ」

「なるほどね。あそこはそれほど大切な所だった。だから、あそこだけは留めていると」

「ああ、その通りだ。あそこに行くためには、七夜と会わなければならない。決して脱出することできない、永遠の世界ってな所さ」

一様だが、教えられる事だけを話した。あの国の事を話すのは、アリスが初めてである。記憶を消すこともできるのだが『彼女は口は堅い』と神魔が言っていたから、記憶を消さないことにした。さて、僕がその事を話すとアリスは黙って頷き微笑みながら言う。

「へえ、なるほどね。分かったわ、その事は内緒にしてあげる。その代わり、一つ良いかしら」

「何だい？ 僕に出来る事なら」

「ええ、出来る事よ。実は……」

アリスが耳元で話し始めた。内容は分かったが、まさかそれを頼んでくるとは思っても見なかった。その内容とは『第一世代で有名な武道会の決勝戦を今日の宴会で見たい』と、言う事だ。

「分かった。その時のなら見せる事が出来るよ」

「ええ、楽しみにしてるわ」

そして、僕らは絶から出た。気配も存在も消していたのだ、絶から出れば元通りに戻る。さて、僕らは会場に戻り互いに別行動をとった。さてさて、僕もあの映像はあまり見せたくないけど、アリスの願いだから仕方がない。

「ようこそ、我が紅魔館へ！！ 今日皆、存分に楽しんで行ってくれ」

レミリアの声が聞こえたので振り返ると、皆が何故か御椀を持っていた。何故に、皆が御椀を持っているのだろうか。

「今日は、食の神である汐が豚汁を持って来てくれた。皆でまずは食してから宴会を始めよう」

「……………。あ…………。あはははは。はあ」

とても深いため息を吐いたと同時に、皆の美味いと言っ言葉が飛び交う。なんだかんだで、悲しくなってきたのは言うまでもなかった。こうして、紅魔館の宴会が始まった。

十五話 宴会に呼ばれて（後書き）

豚汁食べたい……

そんなことを思いつつ、次話の話は何かと言つと――

おとめ
汐VS漢女の話になります。

そして、次話で章の最後となります。

汐の戦闘はある意味、危ない物なのでこうしていますが、いずれはちゃんとした戦闘を書こうかなと思っています。

では、皆さま。次話で会いましょう ノシ

十六話 汐の過去 〱前編〱（前書き）

今回は、長いです（ - - ；、

なんせ、汐の過去で、さらに決勝戦の時の話なので。

では、どうぞw

十六話 汐の過去 前編

さて、宴会も中盤に近づいた頃である。皆が集まり宴会を楽しんでいる中、アリスとの約束の最終決戦のデータを絶と一緒に探している。その為、今は紅魔館の壁に背を預けながら眼を瞑る。傍から見れば、寝ているように見えるだろうな。そう言う訳で、僕——いや、俺は絶の世界に意識を送って探し物をしている。白い月が昇り、広大な草原が広がる。そして、周りには、沢山の巨大な本棚があった。この中に今までの記憶があるのだが、見せたくないし見たくもないのだが、取りあえず探す。

「……い。お……い。お、あああああ」

耳元で魔理沙が叫ぶのを聞こえたが、気にせず探し続けている。まあ、最深部にあるから探すのが大変だ。第66階層の最深部には記憶期間があるのだ。簡単に見つかるだろうと思ったのだが、全然見つからないのはどうしてだろうね。

「無視とか酷いぜ」

「魔理沙。今、汐は探し物をしているのよ。今は声をかけちゃ駄目よ」

アリスが魔理沙に注意してるのが聞こえるが、取りあえず無視をしながら続ける。まさか最深部を探しても見つからないとは、これは困った事だね。

（絶は見つけたかな？ おーい、見つけたかい）

この絶の世界は探すのが大変だが、一様は絶も探しているのだ。
絶ならすぐに見つかるはずなのだが、連絡が全く来ない。

（お父様。見つけたのですが、本当にコレで良いのでしょうか）

どうやら見つけたらしいのだが、なんでだろう嫌な予感しかしない。眼を開けると、俺の影の中から一人の少女が現れた。美しい茶色の長髪に紫の瞳、大人びた顔立ちの紅いドレスを着た少女が現れた。この子が七夜と俺の間で作ridされた子である。

「リルム！？　なんでここに」

現実世界で叫んでしまった。皆がこっちを見ているような感じがするが、もうそんな事はどうでも良い。そんな事よりもだ、リルムが何故に現実世界に居るのだ。

「お父様。私は、お父様に頼まれて探して来たのですよ？　はい、コレが頼まれた物です」

リルムが満面の笑みで一冊の本を渡した。褒めて欲しいのかジツと僕を見ている。頭の中が混乱しながらも、リルムの頭を撫で本を貰った。とても嬉しそうに眼を細め、抱きつかれた。

「あ、ああ。ありがとう、リルムちゃん……」

「お父様、お父様！！　肩車して」

えっと、皆の視線が凄く痛いんですけど。まあ、そうだね。いきなり現れて『お父様』を連呼してるんだもの。ああ、どうすれば

いいのかなコレ。まだ頭の中が混乱しているのだが、天夜が聞いて来た。

「汐殿、此方の御方は」

何て言おうか悩んだのだが、取りあえず何と言つべきか悩んでいた。そんな僕を見てか、七夜が嬉しそうな声で一言。

『私と汐の子よ』

「「な、なんですと」」

全員が驚いているのを見て、七夜が笑っている。この状況を如何すれば良いのだろうか、本当に固まってしまふ。取りあえず、アリスの眼が凄く痛い。嫉妬と言うか、裏切られてような視線を向けている。

「いや、あのな。この子は、なんと言うか、その。何て言えば良いのか」

「お父様、混乱してるの？ なら、私が説明するね。お母様とお父様が一から想像して作られた、絶の集合体が私です」

微笑みながらリルムが言い、眠くなったのか欠伸をした。どうやら眠いらしく、また僕の影の中へと戻っていた。この重い空気を如何すれば良いのか、凄く困ったものだ。

「まあ、簡単に言えば『式』みたいな者だ。姿形を自在に変える事の出来る、僕と七夜の案で作られた絶が彼女だ」

「そうなのですか。私はてつきり汐殿の本当の娘かと思いました」

天夜が言ったと同時に皆が頷く。うん、まあ、そうなるよね。確かにリルムが僕の娘と言われたら、否定は出来ないと言うよりも否定しちゃいけないよね。だって、確かに僕と七夜が案を出し合いながら一緒になって考えて生み出した子なのだ。

「リルムの性格は七夜が決めたからね。僕は見た目を決めただよ。ちゃんと赤ちゃんから作ったから、成長したときの姿が……まあ、ねえ」

第一世代で有名な歌姫と似ているなんて、当時の僕はどれほど馬鹿なことをしたのやら。当時の僕の妻である歌姫「リーフィア・セルフィウス」に凄く似ているのだ。美しい茶色の長髪の女性なのだが、歌姫兼学園の先生をする人である。影では僕のおっかけをしていたらしいよ。

「さて、アリス。頼まれた奴を見つけたぞ。いつでも見せる事が出来るよ」

リルムの話題を此处で区切り、僕は一冊の本を開き頁を捲る。そこには、僕の思い出のタイトルが綴られている。『愛しき人との思い出』など、いろいろと書かれている。その中に『武道会』決勝戦』と言うタイトルを見つけた。

「分かったわ。皆を一ヶ所に集めるから、少しの待っていてくれるかしら」

「了解。さてさて、この記憶は……本当に懐かしいな。過去は変えられない、ただの思い出だったな」

久しぶりに七夜の言葉を思い出した。あの日の戦いは、本当に楽しかった。あれほどまでに心躍る戦いは、きっとあの時だけだと思う。今はどうかと言うと、無いと言って良いかもしれない。

「汐殿は、何を見せてくれるのでしょうか。美鈴さんは何か知っていますか」

「さあ、私にも分かりません。アリスさんは知っているみたいです
が」

皆が集まり始めたのを見て、僕は本を閉じた。これから見せる過去の戦闘は、天夜の勉強にもなる……訳がないな。当たり前のように言うが、阿の戦闘で何を学べと言うのだ。ハッキリ言おう、俺は吐き気が出た憶えがある。

「さて、皆を集めたわ。さあ、始めてくれるかしら」

アリスはワクワクしながら、此方を見ていた。そんなアリスを見て、魔理沙は固まっていた。どうやら、こんなアリスは見た事が無いらしいな。

「さてと……では、始めるとしよう。『我が喰らいし世界の記憶。全ての記憶を繋げ、我が望む過去の映像を』つと、いくぞ」

僕は本を開き叫ぶ。あまり見せたくはないが、アリスとの約束なのだ。さて、始めるとしようかな。

スペルカード宣言！！ 映符「禁じられし記憶の闇」

そして、この紅魔館を黒い闇が一気に飲み込んだ。これから見える『僕』がまだ『俺』だった頃の、誰にも見せる事の無かった『禁じられた記憶』の一部を今、皆に見せるのであった。

十六話 汐の過去 〱前編〱（後書き）

次話で最後とか言っていました、まだ続きます。

次話は「汐の過去 〱中編〱」となります。

では、次話で会いましょう ノシ

十六話 汐の過去 〱中編〱（前書き）

さて、今回は汐の過去だけです。

どのような人物との対戦なのか。

あとがきで会いましょう。

十六話 汐の過去 中編

黒い球体の中、僕以外の皆が立っている。黒い球体の中は、どこかの部屋の中で俺が食事をしている映像が映し出されている。さて、では僕は何処にいるかと言うと、昔の俺と向かい合う形で座りながら皆を見ていた。言っておくが、これは映像である。『過去の俺』に『今の僕』は見えて居ないし、触る事すら出来ない。

（これは！？ 汐殿が二人いる！？ 汐殿、これは一体）

天夜が驚いているのを見て笑ってしまったが、皆も驚いているのを見て笑うのを止めた。このような立体の映像を見るのは、きっと初めてなのだろう。僕は皆の所へと顔を向け微笑みながら立ち上がる。

（まあ、気にせずに。僕は一時的だけど消えるから、皆楽しんで行つてね）

そう言つて、僕は闇の中に消える準備をした。別の場所でゆつくり見たいからね。誰にも邪魔されずに、過去の思い出を見続ける事にした。きっと、皆と同じ場所でコレを見たら……いや、言つのは止そう。あまり言わない方が、僕自身の為になるしね。

（では、始めましょう。第一世代で一番有名な、武道会の決勝戦の映像をね）

そう言い残し、僕は皆の前から姿を消した。これから見せる、最高に楽しかった『あの日』の記憶を再生するのだった。

選手用の控室は、今日は静かである。いつもなら他の控室から楽しそうに話声が聞こえるのだが、今日だけはやけに静かである。そう言えば、明日が帝様みかどの誕生日である。一昨日と昨日の試合は、言わば余興みたいなものだ。

「はあ、平和だな。明日が最終日だと言うのに、こんなにも静かだと返って寂しさを感じる」

今日は月明かりが綺麗な夜である。外は賑やかなのに、一人でピザを食べていた。何のピザを食べているかと言うと、一番大好きなマルゲリータである。所で、何故一人で食べているのかと言うと、暗乃は揺り籠の中で寝ており、鷺のアンノーンである鷺崎と、狼のアンノーンである九条は新たに刀を作った事で、そこで寝ている。ちなみに二つとも、俺の影の中にある黒月夜と言う大剣の中で修復作業などをしている。何故、修復作業が必要かと言うと、暗乃が壊したからである。

「まさか、幻龍とそっくりに武器を錬成することが出来たのには驚いたが、その後で暗乃が壊すとは思わなかったわ」

マルゲリータを食べながら、カクテルを飲んでいた。梅酒とかは好きなのだが、ワインやウィスキーは苦手なのだ。だから、カクテルを飲んでいる。ちなみに、カシス系のカクテルである。

「でも、一人は凄く暇だな。食べ終えたら、屋上に行くとするか」

ココの武道会場の屋上から見る風景はとても美しく、多くのカツ

ブルがデートスポットとして来るほど有名な場所である。ただ、一つだけ除けばとても良い場所である。

「今日はいないよな…… シャマル」

そう、シャマルがいつもあそこで、アップルパイを食べながら酒を飲んで月見酒をしているのだ。彼女はいるはずなのだが、何故かいつも一人で飲んでいるのだ。アイツに見つかるのかなり大変である。そうそう、シャマルとはアンノーン研究の第一人者でバルバトール・J・フィドフェル教授の下で働いている助教授である。

「さてと、行ってみるか」

俺は部屋の隅にかけてある黒いコートを羽織り、屋上へと向かう事にした。屋上へと向かっていている間に誰かと会うだろうと思ったのだが、誰一人会うことなくエレベーターに乗ることが出来た。これはこれで寂しいものである。

「はあ、なんだか寂しいものだ」

何事もなく屋上に着く。誰かいるかと思ったのだが、やはり誰も居なかった。軽くため息を吐き、夜空を見上げる。満点の星空なのだ、こんなに美しい満月が昇っているのに誰もいないのは少しおかしい。

「ん？ 会場の方がなんだか騒がしいな。…… ああ、そう言うことか」

会場の外は城壁で守られており、会場内は落ちないようにフェンスが置いてある。フェンスの方へと歩くと、会場の方が凄く盛り上

がつている。どうやらライブをやっているらしい。それも聖ナタリア学園の先生こと、アイドルのリーフィア先生が歌っている。

「フフ、貴方は行かないのかしら」

背後から聞き覚えのある男の声が聞こえた。振り向くと、あのピチピチの白衣を着た、紅い短髪のマツチヨの漢女おとめが立っていた。

「バルバトルか。なんだよ、お前こそ行かないのか」

彼——いや、彼女こそこの街で伝説とされた漢女『バルバトル・J・フィドフェル』である。ちなみにだが『彼』『男』『キモイ』は、禁句である。この漢女を怒らせて生き残った能力者は居ない。それ故に、帝様ですら『漢女』と呼んでいる。

「私は、ああ言うのは苦手なのよ。私にとって、アンノーンこそ全てなの。奴らから、この街を守れば私はそれで良い。それ以上は求めてはいけなないと考えているわ」

なんだか少し硬い人間だと思ってしまった。だが、そこにシヤマルは憧れたのだと思うと、なんとなく分かるような気がした。俺もこの街が好きだ。多くの人が不老不死であり、アンノーンを喰らった俺を優しく迎え入れてくれた。だから、俺は今もこの街の人の為に戦っているのだ。

「そう……か。明日は宜しく頼む」

「ええ、全力で戦いましょう。久しぶりに貴方と戦えるなんて、私にとって幸福なことよ」

微笑みながら赤ワインを飲むバルバトル。俺はそれを横目で見たが、すぐにライブの方へと戻した。本当はこんな所で二人一緒に居るのは嫌なのだが、諦める事にした。

「まあ、別に良いわ。それより、彼女がさっきからこっちを見ているわよ」

「彼女？ 誰のことだ」

「彼女よ。ほら、手を振ってあげなさいよ」

ライブの方で歌っているリーフィア先生が、此方を指差して笑っている。確かにさっきからこっちの方をチラチラと見ているような気がしたが、笑うほどの事でもないような気がする。だが、そんな事はどうでも良いようだ。リーフィア先生が指差すのを見て、会場で盛り上がっている観客たちも此方を見て手を振っていた。

「ハハハハ」

俺は手を振り笑った。なんだか、久しぶりに笑った気がする。純粹に笑ったのはいつ以来かと考えていると、彼女はワインを一口飲み、俺の方へと目だけを向けて言う。

「皆、貴方の事で持ちきりなのよ。貴方がアンノーンを喰らった事で、さらに有名になったけど、元々貴方って有名だったのよ」

「え？ なんだ」

何故、俺が有名なのか分からなかった。不老不死だからという理由が頭の中を過ぎったので、それなのではないかと思ひ答えたが、違うら

しく首を横に振った。では何だろうと聞いてみた。

「貴方の戦い方が凄く美しいから、凄く人気なのよ。貴方の弟子になりたいとか言う人多かったでしょ、それが理由よ」

「なるほどね。確かに、紅山流べにやまりゅうの戦闘スタイルは舞うように見えると言われているが、それほど人気だとは知らなかった」

純粹に驚いたが、まあ別に良い事だ。俺にとっては、今この瞬間でやりたい事があった。

「さてと……軽い一戦、宜しいかな？ バルバトル」

「フッフ、久しぶりに心が躍るわね。良いわ、一戦で良いのね」

俺は頷き、近くにあるテーブルを持ってきた。鉄で出来ているのだろうか、しっかりとした硬さの白いテーブルである。そのテーブルの上に左腕を置いた。彼女も此方から見て右腕——つまり、左腕を置いた。互いに手を握り締め、机の角を右手で押さえる。

「「勝負」」

そう、これは腕相撲である。最終戦の前夜に腕相撲は、言わば儀式みたいなものだ。彼女とは、以前にもこうして腕相撲をしていたのだが、決着がつかずに長引いていたのだ。だが、今宵は決勝戦前夜だ。互いに思っていた事は同じだったのだろう、前夜祭は腕相撲の決着を付け、当日は本気でぶつかり合いたいのだ。

そして、日は昇り朝がやって来た。恵まれた晴天、空に上がる花火。そんな中、場内は異様な熱気に包まれていた。会場内に設置された帝様の席に帝様が座った途端、さらなる熱気に包まれる。

「さて、とうとうこの日がやってきました！！ 最初で最後の決勝戦だ！！ お前ら『バルバトル・J・フィドフェル』対『紅山玖月』の勝負が見たいか」

『オオオオオオオオオ！！ はやく見せろ』

（何故、そんなに盛り上がるのだろうか？）

深紅に染まる籠手を装着して、俺が最初に会場内に入った。観客たちの盛り上がりようは、とても凄いものになっていた。ココまで熱く応援を受けたのは初めてな気がした。まあ、相手が相手なのだ、盛り上がるのも分かる。さて、会場の空気に飲みこまれそうになりつつも、ようやく前からアイツがやって来た。

「フッフ、久しぶりに私も燃えて来たわ。貴方と戦えるなんて素晴らしいわ、神様に感謝しないといけないわね」

「お前が神様に感謝したら、神様全員逃げるわ。と言うか、なんでお前は海パンだけで後は裸なんだよ」

そうなのだ。今、目の前に居るのは漆黒のガントレット——もとい籠手を付けた海パンツ一枚を着たこの場所では不釣り合い（海水浴なら良いと思う）の格好をしたバルバトルがやって来たのだ。

「貴方との戦いにハンデなんていらないでしょ？ 本気で戦い合う

のに、服なんて言うハンデはいらないわ。最初から全力でぶつかり合いましょう」

「なるほど。気持ち悪いが、そこまで『本気で戦いたい』と思っ
ているとは、俺もハンデになるな。なら、俺もその礼儀にちゃんと答
えないとな」

俺は黒いコートを外し、司会者に投げ渡した。白のＴシャツも脱
ぎ、アンソーンの中へと入れた。その姿を見て不敵に笑うバルバト
ールだが、気にすることなく構えを取る。

「久しぶりに燃えて来たわ。さあ、司会者さん、開始のゴングを鳴
らして」

彼女も構えを取ると、俺のコートを羽織っている司会の人が満面
の笑みで開始のゴングを鳴らした。

「「うおおおおおおおおおおおお」」

互いの拳がぶつかり合う。金属音どころか、衝撃波で石畳が爆散
した。拳と拳のぶつかり合いによって、どんどんと会場内の石畳が
壊れていく。

「「っち、何て威力だ」

「あら、貴方こそ中々の怪力よ。私の最初の一撃を受けとめ、さら
には全ての攻撃を受けとめたのは、貴方が初めてよ」

軽いウィンクされて、軽く吐き気が出た。そんな隙を見逃すはず
がなく、彼女の拳が溝に打ちこまれ吹き飛ばされた。凄まじい威力

に軽く意識が飛んだが、壁にぶつかり意識が戻る。体中に走る激痛に懐かしさを憶えてしまった。ここまで強い敵と戦ったのは、何年ぶり――いや、何百年ぶりだろうか、とにかく久しぶりだった。

「流石は『最強の漢女』の称号を持った漢女だな。軽く意識が飛んだわ」

「フフフ。褒めたって、手加減はしないわよ？　こんなに心が弾む戦い久しぶりなのよ。分かるわよね、玖月ちゃん」

肩を軽く回して構えていた拳を下ろして、此方へと微笑みながら歩いてくる。まだ意識はしっかりしているので戦えるのだが、体が言うことを聞いてくれない。これほどの一撃を喰らっても立っていられる方も化け物だが、その一撃を与えられるほうも化け物である。

「はあ、はあ、はあ」

少しずつ近づいてくる彼女に、何故だか気持ちが高ぶり始めた。この状態は、正しくアンノーン化現象が始まっている。だが、俺はそれを使ってまで勝ちたくはない。

（今回は、一人の人間として戦いたいんだ。すまない、感染率を0にしてくれ）

（本当に良いの？　下手をすれば、貴方が死ぬわよ）

脳内に響く暗乃の声に、俺は黙って頷きゆつくりとバルバトルの元へと歩き出す。アンノーン化現象を使えば確実に勝てるのだが、それは俺のプライドが許さなかった。

「まだだ、まだだ、まだだ」

体が熱かった。いや、この熱さは……違う。何かが違う。今までに感じた事のない、本来の何かが目覚め始めたような気がした。そして、何かが思い出し始める。

「フフフフ。行くわよ」

大地を勢いよく蹴り、此方へと走り出すのを見て、迷わず俺も走り出す。とにかく体中が熱いのだ。この感覚は、父さんが言っていた人間の限界を超えることなのだろうか。俺はただ、目の前の相手へと走り出す。

（何だろう、懐かしい。そうか、コレが――）

（何！？ このエネルギーは！？ ）

暗之が驚いているのが聞こえたが、気にすることなく右腕を引いた状態で突っ込んだ。彼女が目の前に見えた瞬間、時間が遅く感じた。ああ、なんとなく理解出来たような気がした。俺は彼女の攻撃を避ける。

「獄……門」

元の速さに戻り、溝に一撃を決めた。凄まじい衝撃が、右腕に伝わったがそのまま殴り飛ばした。今までに感じた事のない、本来の力なのかもしれない。

『なんだよ、今の一撃』

会場の誰かがそう言った途端、吹き飛ばされたバルバトルが壁にぶつかった。その衝撃は有無を言わず、壁にぶつかった事で崩壊した。軽い目眩を憶えたが、なんとか立っている状態だった。

「フフフフ……」

壁が崩壊した事で煙が舞っており安否が分からなかったが、バルバトルの笑う声が聞こえた事で生きている事が分かった。

だが、彼女は立っていた。唇から血が流れているが、意識はちゃんとあるらしく満面の笑みで笑っていた。

「やっぱり、貴方は強いわ。こんなに強いなんて、私はとても嬉しいわ。さあ、続きを始めましょう」

「ああ、まだ決着が着いてないからな。あの時の決着がを着けるとしよう」

もう一度、構えの体勢を取った。バルバトルも構えを取っていた。お互いにこの戦いが楽しくてしょうがないのだ。全力でぶつかり合うこれほどまでに感じた事のない楽しみを、今この瞬間を、本気で楽しんでいる。

「ええ、昨夜の腕相撲の決着をね」

あの日の対決は、結局テーブルが壊れて決着がつかずに終わった。そして、暗黙の了解で互いの全力の一撃をぶつける。それで良いのだ、この勝負を終わらせない為に。

「「勝負」」

互いにぶつかり合う拳。石畳どころか地面ですら、衝撃波で爆散している。互いに本気でぶつかり合いが始まった。誰に求める事の出来ない、拳の一撃一撃に観客は固唾を飲んで見守っている。声援なんて出来るはずもない、誰にも俺らの攻撃をみる事など出来ないのだ。

「月崩し」

「α・ブレイク」

互いにぶつかり合う拳の衝突で、空気が破裂するような音が響き渡る。人間が出せる限界をゆうに超えている対決に、帝様ですら驚いている。そう言えば審判は何処に行ったのか知らないが、此処にいたら死ぬのは確実だと思うけどね。

「まだまだ、行くぞ」

「ウフフ、行くわよ」

衝撃波で何個か石畳が上空へと吹っ飛ばされたが、そんなことを気にすることなくぶつかり合う。互いの限界を超えている事も気にせず、本能だけで戦う。

「星砕き」

「グランドβ」

互いに距離をとり、地面に拳を叩きつける。地面が抉れ、その衝撃により石畳が全部吹き飛んだ。石畳は大体ビルの十階くらいの距離まで吹き飛んでいる。その吹き飛んだ石畳へと飛び、蹴りながら

空中戦が始まった。

「闇落とし」

一気に彼女へと石畳を蹴り、鞭のように素早い蹴りを溝へと蹴りを入れた。だが、彼女もそれが分かっていたらしく、避けることなく俺に攻撃を入れる。

「カーニバル・γエンド」

溝に蹴りが入ったと同時に、彼女が俺の顔面に重い一撃を与えた。地面へと叩き落とされたが、すぐに受け身を取り衝撃を和らげた。彼女も地面に落ちたが、俺と同様に受け身を取り衝撃を和らげている。

「これじゃ、決着つかねえな」

「ええ、このままじゃ『ワンサウザンドウォーズ』は確定かしらね」

互いに笑いつつ拳を握りしめ、軽く深呼吸をしたと同時に構えなおした。この一撃で最後にしないと、きっとこのまま決着がつく事はないだろう。だからこそ、今ここで決着をつけなくてはならない。

「最後の一発で終わりにしようか」しらね

今までに感じた事のない覇気を出す彼女に対し、俺はもう一度あの技を使う事にした。相手よりも早く、しかし正確に倒す事の出来るあの技。

「行くぞ、バルバトル」

「行くわよ、玖月ちゃん」

互いに大地を蹴り、人間の速さでは出せないほどスピードで近づく。どんな相手だろうと、俺達を止める事は出来ない。この一撃で、全てが決まる。

「バットエンド・αストーリー」

空気を破壊する音と共に出された拳を避ける事は、どんな相手だろうと出来ない。彼女の最終奥義である『バットエンド』には『α・β・γ』と言うのがあり、αストーリーは近距離の攻撃である。

「狂波・獄門」

脳内のリミッターを全部外し、彼女と同じように空気が爆発する音と共に出された、真正正銘の本気の一撃。そして、互いの拳がぶつかったと同時に現れた凄まじい衝撃波に、一同絶句していた。そして、衝撃波が消えたと同時に互いに動くこと無く、その姿勢を維持したまま止まっている。どちらかが先に動けば勝ちとなるのだが、動く事すら出来ないでいた。

「……。これは、一体どう言う事だ！！ 両者全く動く気配がありません」

衝撃波で両腕の骨が砕けた。だが、急激な痛みと共に骨が修復し始めた。あまりの激痛に呼吸が出来ない。不老不死にとって、この激痛は一番辛い物である。

皆が静まり返るなか、彼女は最後に頬笑んだ。勝者としての余裕

十六話 汐の過去 〱中編〱（後書き）

そんな訳で、中編も終わりました。

後編は、どんな事になるのか想像できそうですが、まあ、気にせず頑張ります

では、次話で会いましょう ノシ

十六話 汐の過去、後編、（前書き）

今回で章の最後となります。

次話では、天夜が異変解決する話になります。

では、あとがきで会いましょう ノシ

十六話 汐の過去〜後編〜

映像を映し終えた事で、スペルカードの能力が切れた。壁によっかかりながら、ジツと何も言わずに皆の方を見る。さて、皆を飲みこんだ球体は、映像を映し終えたと同時にゆっくりと消えた。皆が驚いているのを見ながらも、僕は何も言わずに白ワインを飲んでいく。あの映像を見て、一つ思い出した事があった。

（あの時からだよな。脳内のリミッターを全開まで、自在に外せるようになったんだよな）

今考えて見ると、とても懐かしい記憶だ。そう言えば、この映像を牡丹にも見せた時の反応も面白かったな。確か『人間の状態の俺でも勝てる気がしない』とか言ってたな。いまさら言うのもアレだが、俺はまだ弱いと思うのだけど。

「汐殿、今の映像の御方は」

なんだか興奮しているようで、凄く生き生きしている。彼女の事を話すとすると、俺は禁句を言わなければならない。多分、彼女の事だから妖怪として生きてるだろうな。

「ああ、あの男のこ——ゴボハ」

凄い速さの一撃を顔面に喰らい、屋敷を貫通して僕は吹き飛ばされた。この破壊力には憶えがある。いや、いろんな意味であり得ないと思っっているのだが、存在しているようだ。

「誰が、男なのかしら？ 玖月ちゃん」

そこにはピチピチの白衣服に黒い長ズボンを穿いた、白髪の漢女が立っている。髪の毛以外は全く変わっていないのを見て、驚きも隠せなかった。あの漆黒の短髪の漢女が、白髪の長髪に変わっていた。

「スイマセン。ゴメンナサイ。生きてるとは思っていませんでした」

その場で土下座して謝る神様って何だろうね。威厳が一瞬にして無くなったような気がする。何故だろうか、彼女だけには能力が使えないのだ。武道会の時は無理をしてまで使おうとしたらしいが、俺が断り戦闘した事で何となくだが理解出来たらしい。

（彼女から発せられる覇気が、アンノーンには苦手らしい。さらに、脳のリミッターまでも外すことが出来るって、やっぱり俺と同じで化け物じみてるわ）

「確かに私は脳のリミッターを外すことが出来るけど、玖月ちゃんのように好きな時に外す事は出来ないわ。戦いと言う闘争心によって私は外しているのだから」

平然とした態度で仁王立ちする彼女をしたから眺めながら、彼女から発せられる覇気にビクビクと震えている。なんせ、吐き気が襲ってきてるのだ。それほど、僕にとって彼女は凶器なのである。

「さてと……あら、永琳ちゃんじゃない。お久しぶりね」

クスッと笑う彼女を見て限界に達したらしく、本気で吐きそうになった。だがそれに耐え、フラフラとしながらもなんとか立ち上が

った。ハッキリ言うが酔ってはいない、彼女の覇気でリバースしそうになっているだけだ。

「バルバトルさん！？ 本当にお久しぶりね。あの時はお世話になったわね」

永林が彼女の前で頭を下げている。永林と彼女に一体何の接点があるのか知らないが、取りあえず言おう。

「天夜。この宴会終わったら、他世界の神様の家に遊びに行くんだ」

「汐殿！！ それ、死亡フラグです」

天夜が倒れそうになる僕を支えながら言っている。いつ覚えたのか凄く気になるが、気にするのを止めた。彼女が生きている時点で僕の命は尽きたと言える。それほどまでに、彼女は脅威なのだ。なんせ、ありとあらゆる魔法攻撃を直撃しても無傷なのだ。僕の最強技である『世界に刻む我と言う存在』を使用しても、彼女は無傷で僕を倒したのだ。

「暴走形態の玖月ちゃんは簡単に倒せるけど、自我持ちの玖月ちゃんとは互角なのよねえ」

「よく言うよ。僕のラストスペルですら、無傷なんだから。バルバトルは、本当に化け物だよ」

「玖月ちゃんこそ、化け物だと思うけど？ 私の本気の一撃を片手で受けとめたりするし」

僕らのやり取りを聞いてか、周りにいた人達が絶句している。ま

あ、確かに衝撃的な一言が飛び交うもんね。ラストスペルが無傷とか、片手で止めるとかね。

「どう言うことかしら？ 汐が化け物って」

紫が彼女に対し質問をした。彼女は軽く溜め息を吐いたのと同時に、僕の方を見ている。僕は首を横に振った。あまり話して欲しくない内容である為、話すことを拒否した。

「あら、駄目のようね。玖月ちゃ——いえ、今は汐ちゃんだったわね。汐ちゃんに許可を貰いなさい」

「……。汐おゝ教えて」

アリスさんの性格が変わった。いきなり甘えた声で言ってきたよ、どんだけ興味があるんだか。まあ、それでも教えたくはないのだけどね。溜め息を軽く吐き、手に持っている白ワインを飲む。

「流石に教えられないな。アリス、あとその『むきゅう』と言ってる子、そんなに近寄って来ても教えないから」

紫色の服を着た少女が近付いて来ているのだが、俺は何も言わずワインを飲みながら夜空に登る月を見る。とても美しい紫色の月が照らしているのを見て、クスッと笑いながら絶の中へと消えた。

「あ、逃げた」

紫色の服を着た少女が言ったのとはほぼ同時に、紫たちが捕まえよとしたのを見て笑う。質問攻めだけは、避けたいからね。誰だって話したくない過去の話とかあるものでしょ？ だから、僕は全力で

逃げることにした。

「私と結婚して下さい」

「だが、断る！！ と、言うか誰が今言った」

誰の声か思い出せないが、いきなり告白して来たのに条件反射で答えてしまった事に後悔をしつつ、絶の中に完全に入った。

side 天夜

汐殿が完全に絶の中に逃げ込んだのを見て、バルバトル殿へと向かった。彼女は先ほどから面白そうに笑いながら、赤ワインを飲んでいる。俺にとって気になる事があった。

「バルバトル殿、貴方は何歳なのですか？ 第一世代が滅んだのは十四億年前と聞いていますが、貴方は」

「フフフ。私は汐ちゃんより千年くらい歳が下よ。そして、私は永琳ちゃんに蓬莱の薬を貰って生き返させてもらったのよ」

楽しそうに笑うバルバトル殿を見て、永琳は苦笑している。どんなことがあったのか気にはなるが、汐殿との約束を思い出しそれ以上は聞かない事にした。

「フフフ、貴方は汐ちゃんを信頼しているのね。良いわ、私から一つ忠告しておくね。貴方の中にあるアンノーンに、飲みこまれち

や駄目よ」

「それは、どう言う」

飲まれると言う意味が気になり、バルバトル殿に問いかけた。すると、先ほどまで笑っていたバルバトル殿が真剣な表情をして話を続けた。

「アンノーンは、高度な成長能力があるわ。一度でも技を見たらその技の対処法を一瞬にして覚え、主の為に尽くす。ただし、彼らも馬鹿ではないわ。主が弱ければ肉体を奪い取る。でも、どうやら貴方は強い見たいね。きつと汐ちゃんと同様に、彼らを完全に服従させることが出来るわ。もし、喰われたら、貴方にとって大切な人の事を思い出しなさい。じゃ、また会いましょうね」

それを言い残し、バルバトル殿はテーブルにグラスを置き、宴会場から去って行った。まだ聞きたい事が沢山あったのだが、またどこかで会えるような気がした。

「喰われたら、大切な人を思い出せ……か」

その言葉を胸に刻み、俺は一人で酒を飲み始める。さて、隅っこでチビチビとお酒を飲んでいる妖精と同じような服を着た女性がいる。彼女の名は『冴月 麟』と呼び、俺たちの家族である。

「汐さんに……フラれちゃった」

涙眼になった麟を見て、あの叫びは彼女だったのかと再認識した。多分、汐殿は反射的に答えてしまったのだと思う。汐殿はいつも条件反射で答えてしまうことがある。

「麟よ、汐殿はいつものアレで答えてしまったただけだ」

「え……いつものアレですか」

何となく理解したのか、此方へと近づき涙を拭う。ジッと見つめる彼女の頭を撫でつつ、鋭い視線を背後から感じた。まあ、大体分かっているから無視しても良いだろう。

「天夜さん。なんで、汐さんは誰とも付き合おうとしないのですか」

「うう、俺に聞かれても分からないな。多分、何かしらの理由があるのかもな」

そう言えば汐殿が異性と付き合わないのか、俺も詳しい話を聞いた事がない。トラウマでもあるのだろうか、それとも何か別にあるのだろうか。気にはなるが、詮索するのは止めよう。汐殿がいずれ教えてくれるはずだしな。

「なんで、汐って過去の事を話をしてくれないのかしら？ 別に話してくれたって良いじゃない」

俺達の前に脇を露出した紅白の巫女服を着た、紅いリボンを付けた少女が空っぽのウィングラスを持ってやって来た。彼女の名は『博麗 霊夢』であり、この幻想郷を支えている博麗大結界を維持している博麗神社の巫女である。

「汐殿は過去の話をしたがらないからな。俺にも話してくれない以上、きつと何か辛い過去でもあるのかもしれないな。俺ですら知らない、とても深い悲しみが」

なんとなくだが、絶を使用すると悲しみが強くなる。絶が一体どんな存在なのか、今度バルバートル殿にお会い出来たら聞いてみようと思う。汐殿に聞けばいいのだが、汐殿はただ『アンノーン』絶』としか教えてくれないのだ。

「でも、納得いかないのよね。絶って危険な存在だって言うけど、それほど危険性を感じないのよ。今度こそ聞いてみようと思ったのに逃げ出したし」

「多分、バルバートル殿なら知っているでしょう。あの方なら詳しく話してくれるかもしれないな」

麟を撫でるのを止め、テーブルの上に空になったグラスを置いた。久しぶりに酒を飲んだので、気持ちが少し高ぶっているような気がする。やっぱり酒を控え目にするべきだったな。そんなことを思っている、霊夢がワイングラスに赤ワインを注ぎながら言う。

「まあ、それもそうね。それにしても、妖怪の山での戦闘を聞いたわよ。激しい戦いのせいで、山頂が凄い事になったとか」

「ああ、牡丹との試合か。あれは凄まじい対決だったな。あの現場を見てしまうと、絶対に引くだろうな」

あれほど白熱した試合を、引くとか言うのも変だがな。でも、あれほどまでに楽しかった戦いはないな。山頂にあった岩が綺麗に無くなり真っ平らになってしまったのだが、また牡丹と戦いたいものである。

「あまりやりすぎないようにね。こんなツマラナイ事で、いざこざが起こったら私に迷惑がかかるのだから」

「ああ、分かった。以後、気を付けよう」

霊夢は分ければ良いのよと、言いながらワインを飲んでいる。空っぽになったグラスを見て、俺は苦笑しつつワインを注ぐ。なんだか嬉しそうな表情に戻り、ワインを飲んでいる。まあ、そんなこんなで汐殿が帰ってから宴会が続く。

「汐殿、帰ってこないだろうな。諦めるとするか」

そんなことを言いつつ、妹紅と輝夜の弾幕勝負を見る。とても楽しそうに戦う二人を見て、俺は笑いながらバルバトール殿の言葉を思い出す。「喰われたら、大切な人の事を思い出せ」という、俺にとって大切な人とは誰なのか考えながら、この宴会を楽しむのであった。

side ???

深き闇の園とも呼ぶべきか、そこはとても暗くだが落ち着く場所。闇の世界とも言うべきなのだろうか、明かりになる物が全て無く、足元すら見えない。その闇の中の奥深くで、照明に照らされながら踊る一組の男女の姿があった。一人は黒いコートを羽織る茶髪の童顔の男と白いドレス服を着た薄茶色の長髪の美しい女性だ。

「姫さんは、いつもこんな闇の中で過ごしてたのか」

姫と呼ばれる美しい女性は、つまらなさそうな表情で踊り続ける男は苦笑しつつも姫と共に踊っている。音楽も流れていないのに、とても息が合っている。ステップを踏みながら踊る姿は、ワルツのようなものだった。二人が楽しそうに踊っている中、姫は男にもう一度質問した。

汐と呼ばれる男性は、姫の耳元で何やら呟いた。それを聞いて嬉しそうな表情に変わったと同時に、すぐにつまらなそうな表情に変わった。だが、しばらく踊っているとクスクスと笑い始めた。

汐は何やら注意事項を言つと、姫の手を放し深く御辞儀をし、闇の中へと消えて行つた。汐の去つていくその姿を見て、クスクス笑いながら姫はとても楽しそうに言い放つ。

姫は狂ったように笑いながら、その場をクルリと回りだす。笑い

が止まらないのだろう、ずっと回りながら笑い続ける。その姿は美しくも切なさを感じた。

「待ち遠しいわ。我が愛しき主よ」

その一言を最後に照明は消え、姫の笑い声だけが闇の世界に響くのだった。

十六話 汐の過去〜後編〜（後書き）

次章では、天夜が主人公として異変を解決します。
汐は如何したかと言うと、それは……

まあ、秘密です。

今回でこの賞は終わり、次章に突入します。
キャラ紹介コーナーは、次章で行います。

では、また次章で会いましょう ノシ

十七話 汐殿の試練（前書き）

今回から妖々夢編となります。

さてさて、前話で説明した通り、この章の主人公は『衣乃月 天夜』となります。

天夜の過去と今回の章は繋がりのあるのだろうか。
さてさて、これから始まるは天夜の物語

では、皆さまあとがきで会いましょう ノシ

十七話 汐殿の試練

「僕、他世界の神様に呼ばれているから後を頼むよ」

冬のある朝、汐殿はその言葉を最後に他世界へと行ってしまわれた。一通の茶色い封筒を俺に渡して、絶の中へと行ってしまわれたのだ。何でも鎖の修理を頼むらしく、すぐに帰る事は出来ないらしい。

「汐が行っちゃったか。天夜はこれからどうするんだ」

なんだか、今日も妹紅は元気である。汐殿がどこかに行ってから、急にソワソワし始めた。どうしてなのだろうか、未だに疑問である。

「さあな。さて、何が書かれているのだろうか」

汐殿が俺に渡した茶色い封筒の封を切る。その中を見ると手紙が入っており、皆に宛てられた人数分の手紙が入っている。取りあえず、全員に手紙を渡してから自分に宛てられた手紙を読む。

「何々……『天夜へ——』」

そこには、こう書かれていた。とても達筆だったのには驚いたが、声を出さずに読み始める。

『天夜へ。コレを呼んでいると言う事は、僕が他世界へと仕事をしに行っているころだと思う。そこでだ、天夜に試練を与えようと思う。以前、君から預かっていた「星喰の太刀」は再度打ち直した。』

その太刀の中には、君専用の相棒を住ませた。此処で注意だ。どんな事があっても、相棒には負けてはならない。この試練に打ち勝つ事が出来れば、新たな力が手に入るぞ。そこでだ、これより天夜には「星喰の太刀のみでの戦闘をする」と言う、簡単な試練を受けてもらう。ただし、危険と感じたときのみ、他の武器を使用することを許可する。君の健闘を祈る」

「汐殿……必ずや、私はこの試練を突破してみせます」

読み終えた手紙を封筒に戻した。確か、あの太刀は汐殿の部屋に置いてあったはずだ。家を増築したことで、阿求家とほぼ同じ大きさの家になってしまった。まあ、汐殿が「神社は嫌だ」と言った事で、神社ではなく屋敷になってしまったのだからな。

さて、そんな事はさておきだ。居間を出て真っ直ぐ汐殿の部屋へと向かう。長い廊下を歩いて行くと、浮遊しながらルーミアがやって来た。彼女と言えば、あの『紅霧異変』でルーミアが霊夢たちと戦ってぼろ負けした話を聞いたな。その後は、悔しかったのか汐殿と一緒に料理を作っていたとか。何故、悔しさを料理にぶつけたのか未だに分からない。

「ルーミア、何しているのだ」

先ほど手紙を渡した後、すぐに部屋に戻ったルーミアだったが、此方に気がつき楽しそうな表情でこっちにやって来た。

「汐がね、帰ってきたら私の料理が食べたいだって！！ 私、頑張って料理を作るわ」

凄く興奮しているルーミアを見て、なんだか軽く目眩が起こった。何と言うか、汐殿の為なのは分かるが、そんな大声で叫べば他の汐

を狙っている者たちも料理を作ってやって来るであろう。ルーミアの料理もだいぶ上達しているので、俺的には大賛成でもあるのだが

「妹紅の焼き鳥も恋しいな。また食べたいものだ」

どこからかドタドタと足音が聞こえた。その足音の犯人は分かっている。だが、その人物を言うこと無く、苦笑しながらルーミアと別れ汐殿の部屋へと向かう。

「此処だな、汐殿の部屋は……失礼します」

汐殿がいないと分かっているにしても、ついつい言ってしまう。まあ、汐殿を訊ねる人が多いので、癖になってしまったようだ。軽くため息を吐いたと同時に、音を立てないようゆっくりと襖を開けた。汐殿の部屋はとても広く、俺の見た事のない物が沢山飾ってあった。

「これは、懐かしい。汐殿と俺の当時の写真だな」

文が撮ってくれた俺と汐殿の映った写真だった。なんだか、とても懐かしい。この頃の俺は、ただ汐殿のような強さを求め、ひたすらに稽古をしていた。誰かを守るために必要な力を手にし、妹紅たちを守るようになりたいと思ったからである。さて、そんな事を思い出している場合でもなく、汐殿に預けた太刀を探す。

「ふむ、一体どこにあるのかな？ この部屋のどこにあるとか言っていたんだが」

しばらく探していると、何やら視線を感じた。この部屋を出入りすることが出来るのは俺だけだ。そして、確実に戸を閉めたはずな

のだが、背後から視線を感じる。警戒をしつつ振り返るとそこには、一人の女性が立っていた。白い着物を着た薄茶色の長髪の美しい女性が、此方を見て微笑みながら立っていた。

「ごきげんよう。貴方が汐が言っていた天夜つて子ね」

「あ、ああ、そうだが。お前は一体」

この反応をする事が分かっていたらしく、とても面白い物を見たような微笑んでいた。何となくム力ついたのだが、腹の底まで言うものではなかった。まるで、汐殿のような優しい頬笑みを感じた。

「私が『星喰の太刀』よ。正確に言えば、貴方の相棒とでも言うべきかしらね」

「お前があの太刀か？ いやいや、どう見ても――」

「人の姿をしてるって言うのでしょ？ なら、こうすれば分かるかしら」

女性が俺の手を頬まで持つて来ると、一瞬にして女性の姿が消えて愛用の太刀に変化した。目の前に起きている事に驚きつつも、太刀を握り締め背中に背負った。普通の者ならその場で固まり続けると思うのだが、汐殿と暮らしていると日常茶飯事だったのでもう慣れてしまった。

『あら、平然と背負うのね。てつきり長時間その場で固まるのかと思っただわ』

「日常茶飯事でな、こう言うことにはもう慣れてしまった。そう言

えば、自己紹介をしてなかったな」

溜め息交じりで答えながらも、自己紹介をしようとした。だが、どうやら彼女は俺の名を知っているらしい。誰から聞いたのか聞いてみると、やはり汐殿だった。

『さて、名前か……私には名前が無いのよね』

「はあ、名前が無いか」

名前が無い事に多少は驚きながらも、名前を考える事にした。背負った太刀を置き、一緒に考える事にした。なんせ、名が無いと何と呼ばば良いのか分からなくなる。流石に『星喰の太刀』と呼ぶのは流石に不味いだろうしな。本人が気に入ってないのだ、名を変えるのが普通である。

「何が良いものか」

『名前ねえ。衣乃月^{いのづき} 秋夜^{あきよ}何てどう？ 素敵^{すてき}な名前でしょう』

俺は黙って頷き溜め息を吐いた。性を同じにするのは良いのだが、名が流石に呼びづらかった。その名は、もう二度と呼ばない——いや、呼びたくない名だった。何故かって？ それは俺が愛し、そして――。

「まあ、別に構わんよ。さて、これから博麗神社に行くとするかな」

『へえ、博麗神社ねえ。汐が言ってたけど、神聖な場所なんですよ？ そこに妖怪の貴方が行くのは、おかしくないかしら』

全くもって正論を言う秋夜に、一瞬だけ固まってしまった。如何反論すべきか考えたのだが、それも確実に潰されそうな気がした。例えば『あそこにはよく妖怪や妖精が遊びに行く』とか『寶錢を入れに行く』とかなどあるのだが、秋夜なら速攻で潰すだろうな。

「まあ、とにかくだ。さっさと行くぞ」

俺は太刀になっている秋夜を背負い、部屋から出る事にした。俺にとつての試練とは、きつと『過去を乗り越えろ』と言うことなのかもしれない。過去を乗り切るなど、並大抵のことではない。俺の罪は一生消せやしないのだ。

（俺がこの手で壊したんだ。俺が愛したアイツとの信頼を）

そう、俺がまだ妹紅と出会う以前に守っていた人間の女性。『守山^{やま} 秋夜^{あきよ}』との信頼を、俺はこの手で壊した。彼女には真実を教えるつもりはないし、地獄まで持っていくつもりだ。

「この手は、人間の血で汚れきっている。所詮、俺も妖怪だな」

『何を呟いているの？ 博麗神社に行くんでしょ。急ぎましょう』

秋夜が苦笑しながら言うのを聞き、俺は溜め息を吐きつつ汐殿の部屋を後にした。廊下を歩いていると、何やら玄関の戸を叩く音が聞こえた。とても慌てているのか、戸を何度も叩くのを聞いて急いで玄関へと向かう。

「少々お待ちを、今そっちに向かう」

「急いでよ！！ 異変が起こってるのよ」

聞き憶えのある声に、俺も歩みを速めた。玄関の戸を開けるとそこには白いマフラーをした腋を露出した巫女服を着た少女が、真剣な表情をしている。さて、その少女の後ろの風景は一面が銀世界と言つべきか、雪が積もっていた。チラチラと雪かきをしている人間を見かけるが、それを遮るかのように目の前の少女が、仁王立ちしながら此方を睨みつけている。

「もう、聞いているのかしら」

「ん？ ああ、スマナイ。取りあえず、家の中に入りなさい。温かいお茶を入れるから」

そう言いながら、目の前の巫女『博麗 霊夢』を家の中へと入れた。隣に客間まで案内させ、俺はお茶とお茶菓子を用意するために台所へと向かった。台所では妹紅がお茶を飲んで呆けているのを見て、微笑んでしまった。その姿を見られたからだろう、妹紅が顔を真っ赤にしてあたふたし始めた。

「妹紅も可愛い所はあるのに、なんで他の人に見せたりしないのか。それよりも、御客人にお茶を出す為に火を頼めないか」

「わ、わた、私に、ま、任せろ！！ お茶だな」

『可愛い』と言う単語に弱い妹紅なのだが、此処までてんぱっている妹紅を見るのはとても楽しい。そう言えば、汐殿が『妹紅は笑うと可愛いぞ』とか言っていたな。今度、確認でもしてみようかな。

「ほれ、御茶が入ったよ。ルーミア、客間まで持っていつてくれないか。私はこれから慧音の所に行かないといけないから」

「わかった。客間まで運んでくね」

ルーミアは妹紅が淹れたての御茶をお盆に載せ、客間まで浮遊しながら向かった。そして、妹紅は頬を紅く染めたまま、無言で出てってしまった。御茶を飲んで呆けていた姿を見られるのが、とても恥ずかしかったのだろうな。

さて、御茶菓子の準備に入るとしよう。汐殿が買って来たお茶菓子があつた気がした。食器棚のどこかにある事は分かっているのだが、どこにあるのだろうか。

『上から三段目の右の戸にあるわ。汐はいつもそこにお菓子を入れておくのよ』

「なんで秋夜が知ってるんだ。って、本当にあつたな」

秋夜に言われた通り探して見ると、確かに汐殿が買ったとされるお茶菓子がそこに置いてあつた。海苔煎餅と塩大福が何個かあつた。汐殿のお気に入りである『芋ようかん』もあつたのだが、コレを出したりしたら本気で泣かれるだろうな。でも、泣いている汐殿って意外と可愛いのだよ。童顔だけに可愛さがさらに増すとか多くの女性陣には見せられない、とても可愛らしい一面である。

「さて、これだけあれば良いな」

お茶菓子の入った容器を持ちながら、霊夢の待つ客間へと急ぐことにした。さてさて、霊夢が言っていた異変とは一体何の事か考えて見た。ああ、すぐに分かるさ。今が何月か分からない馬鹿はいない。

「5月にもなつて、未だに冬。つまり、コレを異変と呼んでいたのだな」

『ええ、そうらしいわね。で、この異変に介入するつもり？ 私を上手く使いこなせていない貴方が』

全くもつてその通りだ。汐殿から頂いた『星喰の太刀』は、未だに使いこなせていないのだ。一振りすることに理性を保たなければ、魂を持つてかれてしまう。それほど危険な太刀なのだ。汐殿曰く『どのような神がその太刀を使用しても、魂は喰われ続ける。天夜だけが扱うことが出来る、太刀だからね』だと言っていた。

「それでも、俺は約束したのだ。何か異変が起こったら、俺が助けるとな」

『あつそ。なら、仕方がないわね』

秋夜がぶつきらぼうに言うのを聞いて、俺は溜め息を吐いてしまった。汐殿の苦労が凄く分かったような気がした。だが、なんとなく怒る気もなくなってしまった。

さて、こんな会話をしながらも客間に着くと、また一人新しい子が追加されたみたいだ。白黒の魔女服とか言うのを着た女の子が、御茶を飲みながら霊夢と話をしている。彼女の名は「霧雨 魔理沙」と言い、霊夢と同じ異変解決のプロだ。

「異変は何処で起きてるんだぜ」

「大体分かるわ。ただ、そこに行くのに天夜を連れて言った方が、楽になるような気がしたのよ」

「いつもの感って奴だな。博麗の感は凄く当たるから、本当に凄
ぜ」

息を合わせてお茶を飲む霊夢と魔理沙に、軽く溜め息を吐いてしま
った。お茶菓子を霊夢たちに出したと同時に、軽い頭痛が起こっ
た。頭の中に流れる情報がとでもリアルすぎる。満開に咲く桜の下
を舞う一人の女性に、それを守護するかのように刀を持った少女の
風景。そして、その下で血の池を作りながら倒れた俺の映像が一瞬
だけ現れ消えた。

「ツチ、変なのを見ちまった。で、目的地は何処だ」

「行く気満々らしいぜ。場所は——白玉楼。西園寺 幽々子のいる、
白玉楼だぜ」

白玉楼と言う名を聞いて、紅霧異変を思い出した。異変解決後に
開かれた宴会で彼女たちと知り合ったのだが、まさか彼女たちが異
変を起こすとは思わなかった。『魂魄 妖夢』と言う少女との約束
だって、まだ叶えてもないのにだ。

「そうか。（俺が死ぬか……まあ、それもありか）さて、現地に行
くのだろ？ 案内を頼んでも良いか」

「ええ、構わないわ。と、言うよりも強制的に連れて行くわ」

霊夢への拒否権ってないに等しいみたいだ。まあ、迷惑ごとに巻
き込まれなければ、俺にとってはどうでも良い事だ。

「さてと、そろそろ時間ね。妹紅、御茶美味しかったわ」

「そうだな。汐が居なかったが残念だったけど、仕方がないぜ」

軽く思った事を言わせてくれ。こいつら、汐狙いみたいだ。主に雑用を押し付けるつもりだろうな。絶対にそれは阻止するでしょう。巫女が神様に雑務とか、おかしい気もするがな。

「では、行ってくる。ルーミア、後は任せたよ」

「うん！！ 行つてらっしゃい」

こうして、霊夢と魔理沙と共にこの異変の元凶である『西園寺幽々子』の住む白玉楼へと向かうことになった。あの時見た映像が未来を映し出しているのか、分からないまま霊夢たちの愚痴を聞きながら溜め息を吐きながら向かうのだった。

十七話 汐殿の試練（後書き）

はい、これで異変に介入しますね。

次話では、白玉楼に向かいます。それも、一直線で白玉楼に行きま
すよ。

何故かって？ 理由は簡単です。

あの子に——さて、これ以上はネタバレになるので今回は此処まで
です。

では、次話で会いましょうw ノシ

十八話 猫と氷と雪女と（前書き）

更新が遅れまして、申し訳ありません。

いやあ、案が浮かばないのは怖いものでして、なんとか書くことができました。

では、あとがきで会いましょう ノシ

十八話 猫と氷と雪女と

空は曇っており、時より吹く冬の風が頬に当たり痛くも感じた。だが、空から降り続ける雪はとても美しく、ゆっくりと降る白い雨の中を飛行している。そして、俺はと言うと――

「アイツら、俺を置いて先に行きやがった」

迷子状態になっている。どうして迷子になったかと言うと、霊夢と一緒に移動してたのだが、魔理沙のタックルで吹き飛ばされた。魔理沙が悪いのだが、アイツも寂しかったみたいだし、そこは許すでしょう。

「さてさて、妖精達も攻めてくるとは……これは、本格的な異変だな。汐殿だったら、異変を起こした者達を一日中説教と反省文三千枚書かされるのだろうな。ただ、一つ言える事は、本当にアレは辛かったな」

説教というレベルを超えているがな。能力を封じられた状態での、活火山の所に落とされ、山が噴火したと同時に溶岩が流れる中を全力で逃げ続けると言う地獄が待っている。もう一つあるのだが、それこそ一番の恐怖である。それは『七夜殿の趣味につき合う』である。俺は経験したことがないが、レミリアとフランが経験したらしく、全力で土下座をしていたのを見て驚いてしまった。七夜殿の趣味は、それほど恐ろしい物らしいな。

「ふむ、どうしたものか」

「おお、良い人ニヤス」

聞き覚えのある声が前方から聞こえた。なんだか見覚えのある姿をしているので、もう一度確認してみた。猫の尻尾と虹色に輝く羽を生やした、上半身を全て覆う薄茶色のコートに紅い短パンを穿いた妖精が、此方へとやって来る。顔は相変わらず暗くて見えない。その暗い顔から現れる電光掲示板に使用される顔文字（最近、汐殿が教えてくれた）で表情を表現する。うん、多分あれが顔なのだろう。俺はそう納得することにした。

「メルじゃないか。お前は此处で何やっているんだ」

「氷の人と一緒に雪合戦してたのニヤス！！　良い人も参加するニヤス」

とても楽しそうに俺の腕を引っ張るメルに、苦笑しつつも逆らうこと無くついて行く。メルは俺を引っ張られながら目的地へと連れて行くと、急に立ち止まった。どうやら迷子になっただけ、周りを見回しながら困った表情に変わった。

「どこへ行くとしたのか忘れたニヤス！！　良い人、知らないニヤスカ」

「いやいや。俺が知るはず無いだろうに。全く、お前と言う奴は」

軽く目眩を覚えつつも、メルと共に飛行しながら真っ直ぐ進む。なんとなくだが、此处には不釣り合いな力を感じた。そして、そちらへと向かうに連れて妖精達が邪魔をしてくるので、それを蹴散らしつつも目的地へと向かう。妖精達に効果的な「汐殿お手製の一口饅頭」を妖精の口へと全弾命中させ、撃墜したのは言うまでもない

事だろう。意外と人気なのだ、汐殿お手製の一口饅頭。だが、今はコレが弾幕だと思うと悲しくなるのは何故だろう。

「美味しそうニヤスね。メルも食べて良いニヤスカ」

「ああ、まだ結構あるからな。ほれ」

衣から出した包装紙に入った一口饅頭を一個取り出し、口の中へと投げ込んだ。それを口にした時のメルの嬉しそうな表情に変わった。そんなに美味しいのなと思い、俺も一個取り出し口の中に入れた。とても甘い粒あんがたっぷり入った、凄く美味しかった。

「美味しいニヤスね」

「ああ、それ以外の言葉が思い浮かばんな」

さてさて、ようやく目的地が見えてきたようだ。遠くの方で氷の結晶を背中に六枚生やした妖精と、蒼い上着に白い帽子とマフラーを着た女性が楽しそうに話していた。多分、あそこにいるのがメルの友人なのだろう。

「メル、あいつらのことか」

「そうニヤス！！ でも、あの青い人は知らないニヤスね」

メルは不思議そうに言うと、俺の振袖に手を突っ込み一口饅頭が入った包装紙を盗み、美味しそうに食べ始めた。俺の偽弾幕を全部奪われてしまったが、それほど困ることもないので別に良いのだがな。何個か口に頬張りつつ、メルはとても幸せそうな表情に変わる。

「それにしても、これは本当に美味しいですね」

「ああ、そうだよ……え？　メルだよな、お前」

「はい？　私はいつもの私ですが……そんなに私が変ですか」

なんだか落ち込んでいる表情に変わってしまい、俺は混乱しながらも謝った。しばらくして、元通りのメルに戻ったのだが、この饅頭には何が入っているのか、すごく気になってしまった。

「あれ、あそこに居られるのは汐様ではございませんか？　後あれは、冴月麟さんでは」

「え、なんだと」

メルが指を指す方向を見ると、そこには確かに汐殿と麟の姿があった。だが、麟の姿が薄れているように見えた。何故だろうか、消え始めているように見えた。取り敢えず、そちらの方へと向かうことにした。

「何か話しているようですね」

「ちょっと距離が離れているが、姿はなんとか見えるな」

互いに向き合いつつ、なにやら話している。内容は聞き取れないが、麟がだんだんと薄れていくのを見て、汐殿はゆっくりと麟を影の中に取り込んでいく。麟が完全に影の中に入ったのを確認した後、汐殿は袖で目元を拭う。その光景を見て、俺たちは止まってしまった。

「汐殿……麟を喰らったのか。でも、何故だ？ 麟を喰らう必要なんてあったのだろうか」

汐殿がどうして麟を喰らったのかを考えようとしたとき、メルが急に俺の腕を掴み先程の妖精の元へと引つ張り始めた。メルの方を見ると、先ほどと全く変わらないメルがいた。

「メル？ 急にどうしたのだ」

「さっさと行くのニヤス！！ 早く氷の人の元へ行くのニヤス」

元に戻っていた。ああ、何となくが感じていたさ。それに、メルの握力はそこらへんの鬼と互角にわたり合えるほど強く、振り解くこともできなかった。

『ふむふむ。そう言うことね。麟って子を救うために、七夜様の元へと送ったと。相変わらず、汐は甘いとかほつとけば良いのにえ、家族だから？ ふ〜ん、家族のためにねえ』

秋夜がさっきから誰かと話しているようだ。普通に話しているのに、メルには聞こえていないらしく気づかないままである。まあ、そんなことはどうでもいい。汐殿が麟を喰らった件について分かっただけなので、秋夜に聞いてみることにした。

「秋夜、何かわかったのか」

『ええ、分かったわ。さっきのアレの件だけど、どうやら麟って子は「幻想郷から忘れられかけていた」らしいのよ。幻想郷という世界から忘れ去られる前に七夜様の元に送ったらしいわ』

秋夜の『幻想郷から忘れられかけていた』と言う一言に、俺は疑問を覚えた。確かに彼女の力は『忘れられる程度の能力』だったか、俺にも思い出せない。

「世界が忘れたらどうなるんだ」

『世界に忘れた者は、他世界に落とされる。でも、もう一つ可能性があるとすれば、零に戻されるかしらね。魂も肉体も、何もかも粒子状に分解されるわね。その可能性に、麟が該当したみたいね』

良く分からないのだが、つまり先程の麟が透けていたのは『その可能性』に該当したからと言うことが理解できた。つまり、天音ちゃんと同じことをしたのだろう。汐殿にとって家族は大切なのは知っているが、限度というものがある。どんな生き物にも『死』は必ずある。汐殿は何故そこまでして麟を喰らったのだろうか。俺には全くわからない。

『なんで汐が彼女を喰らったのか。それは契約よ。彼女は貴方の知らない間に、契約をしたのよ。悲しい契約をね』

秋夜は何か知っているみたいだ。だが、それ以前に『契約』とは何なのか分からなかった。式神としての契約なのかと思ったのだが、それとは全く違うものだと感じた。そんな事を考えていると、秋夜が何か面白いことに気がついたらしく、クスクスと笑いながら言い始めた。

『あら、もう席は埋まっちゃったから食べることもないのね。安心したわ、これ以上増えてしまったら私ですら困るもの』

「どういうことだ？ 席ってなんの事だ」

『あら、知らないみたいね。席とは、いわば汐の力を止める関を管理する者のことよ。汐のなかにある席は……何個か忘れたわ。ただ、ひとつ言えることはね……汐の右腕に打たれた席に座る者は一人だけ。だから、いつも汐は七夜様を席にしているの』

何となくが分かった。汐殿がどうして天音ちゃんなどを喰らった理由も、助ける事とその席に置くためだったのだろう。汐殿は家族を大切にする人だ、好きで喰らうはずはない。そこで秋夜が言っていた『契約』が気になった。この異変が解決した、汐殿に直接聞くでしょう。

『でも、もう席は埋まったのよ。許容人数は満員まで集まったみたいだから、もう契約で喰らうこともない。でも、汐の心は複雑よね。大切な人たちを喰らうなんて、心が壊れちゃう程よ？ それに耐え続けるなんて凄いことだと思うわ』

「確かにそうかもな。昔の俺じゃ、きつと耐えられなかったと思う。ハハハ、考えてみれば昔の俺も近いことしたじゃねえか。全く、困ったものだ」

「何、独り言を言ってるニヤスか？」

今までの会話を聞いていたらしいが、秋夜の声は聞こえていないらしい。どうしてなのだろうか、考えてみたのだが結局は分からず、考えるのを止めた。秋夜に聞いてみようと思ったが、返事なかった。

「回線を切ったなあいつ。絶対に許さんから、七夜殿に言ってやる」

軽く弱みを握ることにした。さてさて、ようやく目的地についた。意外に遠かったのに驚きを隠せなかったがな。まあ、汐殿の方向に向かつてからメルのための地まで飛んでいたのだ、それなりの距離になるのも当然か。

「氷の人おおおお」

「メルじゃない！！　どこ行つてたのよ」

頬を膨らませながらメルと話している、とても可愛らしい六枚の氷の結晶を背中に生やした少女。その光景を見ながら苦笑する俺に、蒼い上着に白い帽子とマフラーを着た女性がやってきた。青い短髪に白い帽子をかぶった美しい女性だが、所々に傷があり右腕を包帯で巻かれていた。

「貴方は誰？　メルさんのお友達かしら」

「ああ、その通りだ。俺の名は衣乃月　天夜だ。天夜と呼んでくれ」

「私は『レティ・ホワイトロック』よ。レティで良いわ」

互いに挨拶を交わした後に、これまでの経緯を説明し合った。俺は霊夢と共に異変を解決をしに向かったが、離ればなれになってしまったことを話した。レティはその霊夢たちにやられて傷だらけになった所を、氷の妖精であるこのメルと話している少女。名前は『チルノ』とか言うらしいが、彼女に手当てしてもらったらしい。だが、やはり初心者だけに包帯の巻き方が少し下手で、今にも解けそうになっている。レティの腕に巻かれた包帯を解き、優しくも解けないように巻きなおした。

「あら、とても上手ね。……………、ありがとう。貴方は彼女たちとは違って優しいのね」

「いやいや、汐殿の包帯を巻くよりは楽ですよ。昔はよく包帯を巻いてたからな」

包帯を巻き終え、近くにあった岩の上に二人で腰を降ろし袖の中から竹で作られた水筒を取り出した。中に入っているのは、ぬるい緑茶である。まあ人肌ならぬ妖肌で温めつつ此処まで来たからな。さて、俺は水筒の中に入っている緑茶を飲む。レティが此方を見て面白そうに微笑んでいるので、俺は飲んでいた水筒を渡した。

「飲むか？ まだ、沢山あるから飲んで良いぞ」

「え、あ、え。ええ、ありがたく貰うわ」

俺の飲みかけだったのが嫌だったのだろうか、何故だろうか頬を赤く染めている。緊張しているのだろうか、手は少し震えながらもゆっくりと口元に運ぶ。

「美味しい…………私にも丁度良いわ」

「当たり前だ。汐殿が他世界から持ってきた、妖力を回復するお茶だ。雪女でも熱いのを飲めるらしいからな、全くもって不思議なお茶だよ」

レティは驚きながらも、美味しそうにお茶を飲んでいった。お茶だけでは可哀想なので、予備の一口饅頭をレティに渡した。嬉しそうに食べているのを見て、微笑みながら空を見上げた。

「あいつら、一体どこ行っただ」

俺はため息混じりで言いながらも周りを見渡した。やはり、霊夢たちの姿はなかったのだが、微かだが神力を感じた。どうやら、誰かと戦闘でもしているのだろうか、力を感じた。

「さてと、俺はそろそろ行くとするか」

「どこへ行くの」

レティの優しい声で問いかけてきたので、苦笑しつつも立ち上がりレティの方へとむいた。

「白玉楼だ。早く皆と花見がしたいからな」

「そう……私は無理ね。春になったら、私は眠ってしまうから」

とても悲しそうに言う彼女を見つめ、俺は黙って彼女の右頬に手をそつと触れた。突然のことで驚いたのか、頬を赤く染めながら口を開けたり閉めたりしていた。

「なら、今度会うときに花見をしよう。冬に咲く桜が来年の冬に咲くらしいからな。じゃ、また会おう」

レティの頬から手を離しその場を後にした。早くあいつらの元へ着くように、飛行速度を少し上げて向かうのだった。

side レティ

私の頬に触れる手を離し、天夜は急いであの巫女たちの元へと向かっていった。私は何故か、天夜に触れられた右頬に手を添える。何故だろう、もっと彼と一緒に居たいと思ってしまった。

「衣乃月 天夜。いつか、また会えるよね」

私は彼の名を何度も呟きながら、彼の忘れていった竹で作られた水筒を見つめる。彼との間接キッスだが、この水筒を宝物にしようと思った。

「レティー、一緒に遊ぼうよ」

「雪の人！！一緒に遊ぶニヤス」

チルノとメルは嬉しそうにこちらへと手を振る。私は水筒をポケットの中に入れ、彼女たちの元へと向かう。

「ええ、遊びましょう」

私はそう言いながら、彼女たちと遊ぶのだった。

十八話 猫と氷と雪女と（後書き）

天夜つて罪づくりなお人ですわ。

なんて言いながらも、次話では行き成り白玉楼に向かいます。

では、また次話で会いましょう ノシ

十九話 交わる刀（前書き）

どうも、こんばんは。

最近、体調不良と東方の新作をプレイしてて書くのを忘れがちな私ですw

さてさて、今回も頑張って載せて寝ます（今現在 午前2時）

では、あとがきで会いましょう ノシ

十九話 交わる刀

しばらく飛んでいると、霊夢たちと合流することができた。どうやら俺を待っていてくれたらしく、じつとこつちを見て固まっていた。まあ、それもそのはずだ、先程から妖精たちに抱きつかれた状態でここまで来たのだ。軽く頭にキテいる状況だったため顔に出ていたのだろっ、皆が固まっても仕方がない。

「なんでこうなった」

妖精にも胸の置きさに違いがあり、小さい奴もいれば、大きい奴もいる。まあ、先程から胸が当たっている。そう言えば、あのお茶を飲んでからこの現象が起こった気がするのだが、あのお茶には一体なんの効果があるのか分からない。

さて、霊夢たちと合流し目的地に向かっているのだが、妖精たちは離れようとはせず目的地へそのまま向かっている。なんでも俺が居ない間に何体か妖怪たちを倒したらしい。

「まあ、楽勝だったわ。それよりも天夜、何でその状態なのかしら」
「分からん。もしかしたら、お茶のせいかもしれん」

魔理沙と霊夢は首をかしげながらも、目的地へと速度を上げ始めた。俺も霊夢たちの後を追うように速度を上げつつ、くつついている妖精たちを振りほどく。名残惜しそうに下へと落ちていく妖精たちを見て、また『守山 秋夜』の事を思い出してしまった。思い出すにつれ、心臓が締め付けられるような痛みを感じた。左手を心臓の位置に置きながら、霊夢たちの後を追う。

「天夜、どうしたの？　なんだか苦しそうだけど」

「辛かったら先に帰ってて良いぞ？　後は私たちが解決して見せるぜ」

俺の異変に気がついたのか、此方を顔を向け心配そうな顔をしている。霊夢はすぐに「足でまといにだけは、ならないでよ」と言いつたのだが、心配をしてくれているのか速度を少し落としてくれた。魔理沙は魔理沙で、隣に近づいて俺の顔を覗いている。

「大丈夫だ。さあ、さきを急ごう。早くこの異変を解決しないとな」

未だに締め付ける痛みが残ってはいるが、速度をさらに上げると目的地が見えてきた。地面から続く先の見えない長い階段を飛んでいると、稗田家の家と同じように大きい門が目の前に現れた。どうやら、ここが目的地である「白玉楼」らしい。

「さてと、ここが目的地よ。ここからが本番と思って良いわね」

「ああ、腕が鳴るぜ」

「お前らは本当に元気な奴らだな。まあ、足を引つ張らない程度に頑張るさ」

互いに武器を構え直し、目の前の門を通り抜けた。門の中は広く、奥の方には屋敷が見える。真っ直ぐ行けば良いのだろうが、寄り道とをすれば本気で迷子になれる自身がある。

「侵入者ですね」

目の前に魂を連れた白髪の少女が現れた。確か彼女の名には覚えがある。そうだ、紅魔館での宴会で汐殿に紹介された少女の名だ。

「魂魄 妖夢か。ふむ……、霊夢たちは先に行ってくれ、ここは俺が相手をする」

その一言を聞き、霊夢たちは黙って頷き先へと向かった。そして俺はいつも通り『星喰いの太刀』を握り締め妖夢の姿を睨みつける。妖夢もこちらを睨みつけながら、腰に差した二本の刀を握りしめる。スキのない立ち振る舞いに、ついつい笑ってしまった。

「な、なぜ笑うんですか」

少し警戒しつつも刀を抜き、刀を此方へと向けて反論してきた。何故だか、心の底から笑いが込み上げてくるのだ。なんと言えば良いのだろうか、この気持ちは一言で言えば『歡喜』だろうか。何故だろうか、こんなにも、こんなにも――

「楽しくて仕方がない」

『ふふふ。そうでしょ？　これが、王妃側につく私の力よ』

「な！？　今の声は誰」

どうやら秋夜の声が聞こえたらしいが、俺のは全く関係がなかった。この力が王妃側であることを知り、意識を少しだけコントロールする。笑うことはなんとか抑えられたのだが、戦いたくてウズウスする。

「気にすることはないさ。さあ、始めようじゃねえか」

太刀を抜き妖夢へと走り出す。出遅れたのか、それとも様子を見ていたのか、走り出してから数秒してから妖夢は動き出した。

「はああああああ」

互いに降り下ろす刀がぶつかる。ぶつかり合う金属音に、心が踊り始めた。だが、それによって思い出さたくない記憶が、走馬灯のように駆け巡る。この戦いで死ぬわけではないのに、何故こんなにも思い出してしまうのだろうか。

「この程度なのか？ 遅すぎる」

妖夢の一撃一撃を片手で全て伏せぐ。妖夢は驚きつつも攻撃の手を緩めずにぶつかる。弱いわけでもなく、強いわけでもない。だが、諦めない姿勢と真剣な表情が、何かを思い出させようと訴え続ける。それがきつと一番思い出すべきものであることは分かっているのだが、なんなのか思い出せない。

（なんだ。何を訴えている。何を思い出せと言っんだ）

ぶつかり合うにつれ、少しずつ思い出し始める。妖夢の攻撃は速いのだが、それを全て防ぎつつ妖夢から距離をとるため振り払う。

「どうしたのですか？ 顔色が悪いようですが」

「ハハハ。気にするな」

妖夢は平然と立っているのだが、俺は軽く吐き気を覚えている。汐殿が完全体に戻るまで、思い出すたびにこのような苦痛に耐え続

けていたとは、本当に凄い人だな。流石にここまで来ると、我慢するのも苦勞する。

「さあ、続きと行こうか。さっさとあいつらを追わないと、いけないからな」

「……、良いでしょう。天夜さん、貴方を倒します」

妖夢は構え直し、こちらへと走り出す。先程よりも速さが増しているが、なんとか妖夢の一撃を後方に回避しつつ太刀を構え直して妖夢へと下段から振り上げたが、すぐに回避を取り攻撃を避けた。

「ハハハハハ。やるじゃねえか」

「本調子ではなさそうですが、一体どうしたのですか」

心配しているのだろうか、刀を下ろした状態で問いかけてきた。本来ならこのチャンスを活かし攻めるところなのだが、俺には流石に無理があつた。吐き気が限界まで来ている。そして、さらに寒気まで来ているのだ。これは一体どういうことなのか、頭の中で考えているのだが全くもって分からない。

「吐き気がするだけさ。後は、寒気が襲ってきているかな」

「……。良かったら一時休戦しましょうか」

下ろした刀を鞘に戻しこちらへと心配そうな顔をして向かってくる妖夢を見て、いきなり頭を酷い激痛が襲いかかる。なんだろう、この激痛は今まで味わったことがない。もう立つのもやっとなほどだ。太刀を地面に刺してなんとか立っているのだが、激痛は未だに

止むことなく襲い続ける。

『なんで……なんで、貴方は』

「ツク、秋夜……お前まさか」

秋夜の声が聞こえたと同時に、俺は地面に膝をついた。激しい激痛に頭が割れそうになるが、なんとか耐え続ける。秋夜が俺の記憶を見ているのは何となく分かるのだが、何故それで激痛が襲うのか分からなかった。

『なんで、なんで教えてくれなかったの』

秋夜の切ない声が、だんだんと強くなる。それと同時に、俺はようやく思い出した。もう一つ思い出さなければならなかったもの、それは『守山 秋夜の兄と約束』であった。そして、確信した。相棒こそが『守山 秋夜』本人であることに。姿も声も何もかもが変わりすぎて分からなかったが、確実に本人である。

『天夜、なんで——』

「……、妖夢。後は頼む」

そして、俺の意識は確実に闇へと落ちた。もう耐えることすら限界に達してしまった。多分、後はあいつらが何とかしてくれるだろう。妖夢の慌てる声が聞こえたのだが、だんだんと小さくなっていく。そして、完全に聞こえなくなったと同時に、俺はあの日の記憶を思い出した。

十九話 交わる刀（後書き）

次回、天夜ちゃんの過去に迫ります。

天夜ちゃんは何故、思い出したくなかったのか。
天夜ちゃんと秋夜の関係とはなんなのか。

次話でそれが、語られたり、語られなかったり？

取り敢えず、次話で会いましょう ノシ

二十話 語られぬ記憶（前書き）

なんだかんだで、もう二十話まで来たんだなあ。

この物語は、永夜抄で終わりになります。

何故かって？ それは、私のネタが無くなってきたからです。

だから、節目の良い永夜抄あたりで終わりにすることにしました。

まだまだ、下手な私ですが、最後まで付き合ってもらえれば幸いです。

では、第二十話『語られぬ記憶』をどうぞ ノシ

二十話 語られぬ記憶

青空の広がる昼下がりの午後、神社の境内での日のことだ。俺はこの里に来てもう二年経つのだが、里の人間たちと未だに距離を近づけることができず、お気に入り場所であるこの神社の境内でお茶を飲む。里の人間たちは優しいのだが、俺はこれでも恥ずかしがり屋なのだ。人間たちから近づいてくれているのに、距離をとってしまう。

「はあ。なんで、こうもダメなのだろうか」

お茶を飲みながら、深いため息を吐いてしまった。これほど深い溜息を吐いたのは、何ヶ月ぶりだろうか。この里に来て、未だに里に慣れないなど、普通に考えてもおかしいような気がする。

「俺は何故、人間と向かい合って話すことが出来ないのだろうか」

また、深いため息を吐いた。どうしたら目を見て話すことができなのか、未だに分からないのだ。そんな俺に対し、背後から二人の声が聞こえた。一人はとても若い少女の声。もう一人は大人びた声をした男性の声だった。

「まだ、そのような事で悩んでおられるのですか？ 天夜様は、度胸がないのかと」

「いやいや、そこが良いという人もいるからな」

そして、また深いため息を吐き後ろを振り返る。そこには巫女服を着た少女と、蒼い着物と黒い袴を着た少年が木刀を持って話して

いる。彼らはこの神社の子である。この神社には名がなく、この神社を守る守山家の一族の兄妹である。確か名前が「守山 秋夜」と「守山 鏡」だ。この子達は、俺の武術を学ぶために来た生徒である。

「お前らな、人の気も知らないで」

「「いやいや、そこは妖怪の気も知らなでのほうが良いと思います
が」」

「声を合わせて言うな！！ はあ、全くもつ」

ため息を吐きすぎて、今度は頭が痛くなってきた。それでもこの二人は二十歳であるのだが、どう見てもまだ子供にしか見えない。これが彼ら守山家の一族の呪いで、姿も年齢も『十代』で時間が止まってしまつのだ。

「さて、練習を始めるぞ」

そう言うと、二人は廊下から外へと出て木刀を構える。互いに向き合い真剣な表情に変わり、互いにぶつかり合う。どこかの武士が見たら、きっと驚くであろうな。普通の武士や腕の立つ者でも、彼らの攻撃は見えないだろ。守山家は忍と互角に戦えるとか、いろいろな歴史があるらしい。

「ほらほら、もっと速さを上げろ」

「「はい」」

さらに速さを上げる二人を見つめながら、二人の為に刀を作ろう

と考えている。俺の能力は『刀を作り出す能力』である。それでも、名刀と言われた物は何本も作ってきた。そして、この兄妹にも刀を渡す予定なのである。そのためには、今現在の力量をこの目で見ておきたかったのだ。

「よし、今回はここまでだ」

「ありがとうございます」

こちらにお辞儀をした後、互いに反省点を言い合う。ちなみに、今回の技を見てなんとなく理解したのは、二人ともまだ刀を持つには早すぎると言うことだ。まだ、速さが足りないのだ。実際に刀を持った者が、今と同じ速さで戦えるかと言えば、それは不可能に近い。軽い物であれば出せると思うが、それ以外は流石に無理である。

「刀を持つには、まだ早いな。もう少し速さを手に入れたら、許可するかな」

「ええ、そんな」

「だから、声をあわせて言うな！！それにしても、お茶が美味いな」

お茶を飲みながら、二人の速さと技のキレを思い出す。速さはまだ足りないが、それなりには出ている。だが、一番駄目なのは、力で押し切る面が出ていることである。そこも忠告しつつ、二人と共にお茶を飲む。最近の里の人間の話や、お菓子の話など他愛のない話である。でも、そんな一日がとても楽しく感じられた。この時間が長く続けば良いと思っていた。

そうー続けば良いと思っていた。だが、あの日をさかいに俺は沢山の大切なものを失った。里の人たちの信頼、守山鏡、そして守山秋夜を。

俺が、全てを自身で壊したのだ。二度と戻らぬ、大切なモノを壊したのだ。

それは、あれから何年か経ったある日の事だ。鏡たちのおかげで里の人たちと目を見て話すことが出来た。二人が練習相手に、子供たちを呼び俺と遊ぶという簡単な方法をしてくれた。そのおかげで、恥ずかしがり屋だった性格も、なんとか治ったのだった。

「はあ、アラ治療にも程があつたような気がするがな」

俺はため息を吐き、神社の境内で素振りをする。一振り一振りに力を込め、昔のことを思い出す。一つは、里に住む事での約束だ。それは『里の者を殺さない』と言うものだ。妖怪である俺が、里に住むために必要な約束であった。そのことを思い出しながら素振りをしていると、目の前に一匹の少女が現れた。黄色い狐の耳に二つの尻尾を生やした少女。どうやら妖怪みたいなのだが、こちらに気づかずに飛んでいる蝶を追いかけて捕まえようとしている。

「おい、その妖怪。何をしているんだ」

俺が問いかけると、驚いたらしくこちらを見て固まってしまった。見た目は、水色の着物を着た黒の短髪の可愛い少女なのだが、耳や尻尾を妖力で隠していたのだろうが、蝶を追っているうちに解けてしまったらしい。少女は緊張しているので、どうしたものかと考えていると、声を震わせながらも彼女から聞いてきた。

「ああ、貴方も妖怪」

「ああ、その通りだ。俺は衣乃月天夜って言うんだが、お前さんは俺が妖怪だと分かり安心したのか、緊張が解けたのを見て笑ってしまった。それを見て驚いてしまったらしく、社の近くに生えている木の方へと逃げ出した。」

「私は天音だよ。天夜兄さんは、どうしてここにいるの」

「ああ、そうだな。俺が何故ここににいるのかだな」

俺は社の縁側に座り、秋夜が入れて置いてくれたお茶を飲む。その姿を見てか、天音は隣に座ってきた。お茶菓子が気になったのだろうか、じつと見ていた。

「それは食べていいぞ。なんなら、他にも持ってこさせようか」

そう言つと、天音は首を横に振りお茶菓子を食べ始めた。よつぽどお腹が空いていたのだろう、美味しそうにお菓子を食べていた。そんな姿を見て、俺は微笑みながらお茶を飲む。なんでも高価な茶葉らしいのだが、俺には全くもって分からない。ただ、普通のお茶に比べると飲みやすい事は分かった。

「まあ、話せば長くなるのだが。昔にな——」

そして、俺はしばらく天音に過去の話をした。何故、この里に住んでいるのか等、他愛もない話だが楽しそうに聞いてくれた。俺にとって懐かしい思い出だが、それを楽しそうに聞いてくれるのは嬉しいものだ。

一通り話し終え、お茶菓子を食べながら楽しい会話をしている。

そんな中、不吉な事を話し始めた。

「あのね。最近だけど『人間も妖怪も関係なく殺す者』が現れたって、狐たちが言ってたよ」

「そう言えば、里の人達も言っていたな。凄腕の剣豪ですら勝てなかったとか」

陰陽師たちが年に一度この里に来て、この神社に封じられている妖刀に封印の儀を行なっている。この『名もなき神社』には、神すら断つことができる妖刀が眠っている。それを人間が持てば『誰かを斬らずにはいられない』と言う衝動に負け、誰彼構わず斬り続けることになる。それを防ぐために、何百年もこの神社で厳重に封印されてきたのだ。その封印の儀を行う為に、陰陽師たちは剣士たちを雇い、この里まで向かうのだ。多分だが、そのうちの一人がここに来る間にやられたのだろう。

「うん。だから、夜はあまり出歩かない方が良いよ」

「ああ、その通りだな。だが、俺はこの里の警備を頼まれているのでな、里の者たちに伝えとく」

俺は刀を拭く紙を取り出し、先程の忠告を書き始めた。そして、余った紙をいつの間にか天音ちゃんが奪い、何か文字を書き始めた。文字のような、絵のようなよく分からモノを書いている。それも結構楽しそうにだ。何を書いているのか凄く気になり質問してみることにした。

「天音ちゃん。何を書いてるんだい」

「天夜兄さんの絵」

衝撃の新事実だった。この文字のような絵のような、全くもってよく分からないものが、俺なのらしい。まあ、文字と絵の複合体とでも言うべきなものだが、遠目から見れば確かに似ているような気がした。

「上手いでしょ」

満足げに言う天音ちゃんに対し、俺はどう反応すれば良いのか分からなかった。下手とも上手いとも言えず、だが確かに遠目から見れば俺の似顔絵なのだ。近くで見ると絵に見えない。この時の俺はまだ知らなかったのだが、汐殿と出会ってから聞いたのだが『数字の羅列で作られた似顔絵だね』と、言っていた。

「うむ、確かに上手いな。天音ちゃんは天才だな」

「えへへ。褒められちゃった」

嬉しそうに笑う天音ちゃんを見て、俺はふと何かの気配に気がついた。それは確かにこの社の中からである。確か中では陰陽師たちが『封印の儀』を行なっているはずだ。だが、これほどまでに禍々しい気は初めてだ。

『待て、これは偽物だぞ！？ これはどう言うことだ』

社の中から聞こえる叫び声に、俺たちは驚いてしまった。偽物という言葉と同時に、禍々しい気が此方へと向かってくるのを感じた。天音ちゃんは、怯えながら俺の襟を必死に掴んでいた。

「ここは俺が何とかする。天音ちゃんは、早く逃げなさい」

首を横に振り、ずっと掴み続ける天音ちゃん。俺は天音ちゃんを掴んだまま、その場から離れた。すると、そこに一人の少年が刀を持ったまま立っていた。見覚えのある姿に、俺は固まってしまった。

「鏡……なんでお前が」

俺の言葉が聞こえていないらしく、ユラユラと体を揺らしながら刀を鞘から抜いた。どうやら自我がないらしく、殺気だけを出して此方へと向かってくる。天音ちゃんを掴み草むらの方へと投げ、腰に差した刀を抜き鏡に呼びかけた。

「鏡！！ いい加減目を覚ませ！！ お前はそんなに弱い人間なのか」

俺の呼びかけに反応したのか、少しだけ動きが止まった。その瞬間を見逃さず、鏡が持つ刀を上空へと弾き飛ばした。その反動でか、鏡はそのまま吹き飛ばされ、地面に倒れ伏せた。弾き飛ばした刀は上空へと飛び、そのまま地面に突き刺さった。その刀を掴むと、凄まじい狂気の力を感じ取り、放してしまった。

「な、なんだこの力」

とても凄まじい力に、意識が一瞬だが吹き飛ばされた。これを持っていた鏡を心配になった。もしも、この刀に魅入られていたとしたら、もつどうしようもない。

「あれ、師匠？ どうしてここに……あれ、確か俺は刀を運んでいる最中で」

その一言を最後に、背後から現れた何者かに背中からバツサリと着られた。その瞬間、全ての時が止まった。俺の目の前で切り裂かれた鏡を見て、俺の意識はここで途絶えた。次に意識を取り戻したときには、鏡が握っていた妖刀を握り、鏡を殺した者の首をはねていた。その者に俺は見覚えがあった。この社を守る守山家の一人、鏡と秋夜の父親だった。

「あ、ああ……血、人間の血が」

初めて人間を斬った。それも、俺は身内を斬り殺したのだ。俺はどうして殺したのか、分からなかった。別に殺す必要もなかったのに、俺は殺してしまったのだ。

「し……しょう」

「き、鏡」

息が切れかかっている鏡の元へと急いで近づく。背中から斬られたが、まだ意識はかろうじてあるらしく、俺へとか細いが話し始める。その言葉に、俺は驚いてしまった。

「この、ことは。ハアハア、他言無用で、お願い、します。守山家が、妖刀を、使用して。ハアハア……、人を殺したなど。里の、秋夜には、知られたくは」

「あ、ああ、分かった。だから、もう喋るな！！　今、医者を」

医者と呼ばうとその場を立ち上がろうとしたが、鏡が俺の袖を握り締め首を横に振る。だんだんと呼吸が少なくなり、鏡は目を閉じ

つつも最後の一言を言う。

「最後まで、師匠の。ゴホ……ハアハア、刀をにぎれ、なかったけど。師匠と、の修行。ハアハアハア、楽しかった、です」

その一言を最後に、微笑みながら鏡は息を引き取った。頭の中が真っ白に染まった。鏡の死がこれ程までにも辛く、そして人間を殺してしまったと言う事が余りにも衝撃的で、俺は叫んでしまった。大切なものを奪い奪われたのだ、誰だって叫んでしまう。そんな中、背後から聞こえる陰陽師たちのざわめきと、聞き覚えのある少女の声に、俺は振り返ってしまった。そこには、口を抑えつつもこちらを見つめる秋夜と、里の者たちの姿があった。

「あ、ああ」

俺はその途端、その場から逃げ去った。鏡の腰に差した妖刀の鞘を奪い、その場から逃げた。誰にも追いつけない程の速さで、その場を去った。誰にも言えない、全ては俺がやったことにする。それで守山家が守られるなら、俺はその罪を喜んで被る。そして、誰にも言うこともないだろう。鏡との約束だから。俺は里から逃げたのだ。その後、能力が『妖刀を作りだし扱う程度の能力』へと変わってしまった。それからと言うもの、俺は俺の罪を忘れぬために、刀を打ち続けた。誰にも語ることはない、あの日の記憶を思い出しながら、一本一本に己の罪を込めて打ち続ける。

「鏡、約束は果たすからな。地獄のそこまで持つていく」

その後、俺は誰にも言うことなくさ迷い続けた。そんな俺を藤原殿が見つけ、事情を知った藤原殿が屋敷へ一緒に住まないかと誘われ、俺は藤原殿の家に住むことになり、今に至るのだった。

二十話 語られぬ記憶（後書き）

次回、この章のラストです。そして、キャラ紹介コーナーをやります。

いやはや、なんだろうかネタが切れるのも早いものです（ー；

では、次話で会いましょう ノシ

二十一話 復讐と桜と（前書き）

なんだかんだで、なんとか書けました。

最近、PCの調子が以上に悪い気がする。だけど気にせず書き終えました。

では、あとがきで会いましょう ノシ

二十一話 復讐と桜と

嫌な記憶から目が覚め、俺はため息を吐いた。何故、ため息を吐いたかと言うと、妖夢の膝枕状態で俺が寝ているからだ。意外に柔らかい妖夢の太ももに、もう少しこのままでいたい気がしまった。

「あの、天夜さん。起きてくださいよ」

「いや、あまりにも気持ちよすぎて」

その一言で、顔が真っ赤に染まる妖夢。そんな姿を見ながら、俺は記憶を思い返す。鏡が言っていた「守山家の恥」を思い返すと、おかしい点が多すぎる。第一に鏡の父親は、優秀な封印師である。代々守山家の長男がその技を受け継いできたが、その中でも鏡たちの父親は守山家の中で先代以上であるとか。しかし、あの時の鏡の目と鏡の父親の目は確実に死んでいた。鏡は妖刀に操られていたが、妖刀を持っていなかった父親があの子をしているのは、どうしてもおかしい。

（どうして妖刀に触れていないのに、あの目になっていたんだ。いや、生氣すらなかった）

「どうかしましたか」

妖夢の困ったような声を聞いて、重い体をゆっくりと起こした。吐き気や寒気は無くなったのだが、疑問という言葉が脳内を駆け巡っている。目の前に見える地面に突き刺さった太刀。全ての疑問を解くには、秋夜にも聞かなければならない。

「秋夜。お前に聞きたいことがある」

『何かしら』

太刀から聞こえる女性の声に、妖夢は驚いている。それはそうだが、太刀が喋るなどありえない。誰だってそう思うものだ。だが、そんな事は気にせず、秋夜に『妖刀』について問いかけた。

「守山家が封じていた妖刀には、どんな能力があるんだ」

『昔の私に分かる範囲では、代々守山家が封じてきた妖怪を封じるために作られた刀』

ふてくされたように言ったのだが、秋夜の機嫌を治す方法は熟知している。それは一体何かというと、この『大きいどら焼き』だ。メルによって一口饅頭は全部食べられたが、これだけは死守したものだ。

「話してくれば、この汐殿特性のどら焼きをあげよう」

「そんな物で釣れるとおも——あ」

見事に太刀から人の姿に戻った。秋夜の釣り方はただ一つである。それは『俺+どら焼き』だ。俺の手にあったどら焼きを奪い美味しそうに食べている秋夜と、それを見て苦笑する俺、そして太刀が人の姿に変身したことに驚いたのだらう、妖夢は絶句して固まっている。

「さて、話してもらおうか。もし話さないと云うのなら、七夜殿に

突き出すが」

美味しそうに食べていた秋夜の手が止まった。額から出る大量の汗を見て、俺はニヤリと微笑み更に追い詰める。トドメの一撃も用意してあるので、最後に突き立てれば良いだろうが、今この流れを止めるわけにはいかない。俺は、最後の一撃も叩きつける。

「それとも、二十歳にもなっておね——」

「分かったわ！！ 言うから、それ以上は言わないで」

秋夜はその場で土下座をした。やはり、最後の一撃は切ないものだ。たった一言で秋夜のプライドを破壊したのだ。秋夜のことならなんでも知っている。というか、秋夜の方から喋り続けるので、頭に叩き込まれてしまった。

「はあ。あの妖刀には、妖怪が封じられていたの。人が触れれば操り、殺し合う。そうだった妖怪よ」

「つまり、秋夜の父親はその妖怪に操られた」

妖怪の仕業である事は何となく分かった。だが、はっきり言って俺にもよく分かっていないのだ。嚴重に封印されていた妖刀が、そんな勝手に解けるはずがない。誰かが人為的にやったとしか言いようがない。そんなことを考えていると、秋夜が何か気になったのだろう。

「でも、あの刀は誰かが抜かない限り解けないはずよ。それに妖刀を抜いた者が操られると言っていたけど、なんで父を殺したの」

「お前の父が、背後から鏡を切り裂いたのを見たとき、意識が一瞬だけなくなった。気がついたときは、殺していたんだ。お前も俺の記憶を見たのだろう、あれが全てなんだ。ただ、鏡が死んだ目をしていたと言うことしか」

俺にはそれ以外に言いようがなかった。その後、お互いに黙り込み考え続けた。だが、結局は答えが出ることもなく、ただ時間が流れるだけだった。妖夢は妖夢で、まだ固まっていた。いや、気絶をしているのかもしれないな。

「ただ一つ可能性があるとするれば、妖刀の封印が予想以上に早く解けた」

「私も、それ以外考えられない。ねえ、もしその可能性が当たっていたら。もし、目の前にそいつが現れたらどうする」

「決まっているだろう。俺がこの手で、決着をつけるさ」

まだ、その可能性が当たっているとは限らないのに、こんなにも『怒り』という感情が湧いたのは初めてだった。俺の目を見て微笑む秋夜を見て、俺は立ち上がり妖夢を背負い歩き出す。目的地は決まっている。早く霊夢たちの元へと急がないと、彼奴らに怒られる。

「はあ。貴方って本当に変わっているわ。気絶している子を背負っていくなんて、普通の人ならしないわよ」

「そうなのか？ 妹紅が慧音を怒らして頭突きをもらって気絶するから、いつもこうして家まで運ぶのだが……その癖がついたのかもしれないな。それよりも、太刀に戻ってくれないか。すぐに戦闘になるかもしれないからな」

秋夜は黙って頷き大刀の姿に戻ったかと思いきや、俺の影の中へと入った。どうやら太刀に戻るよりも、俺の中に入っている方が良いらしい。確かに、背負っているのに太刀を背負うのは少し無理がある。

「さて、行くとしよう。さつさと行かないと、本当に怒られるかもな」

さつきより気分が良くなった気がする。体の重みも今は軽く、いつもの俺に戻ったような気がした。さてさて、妖夢を背負っていたのだが、目が覚めたらしく、奇声と共に顔を真っ赤にしている。

「なんで、天夜さんの背中が目の前に」

「耳が痛いのだが、驚かない方がおかしいな」

取りあえず、今の状態を説明することにした。分かったらしいのだが、降りる気はなく顔を真っ赤にしている。まあ、俺にとっては妹紅の事を思い出して、会いたくなってしまった。この気持ちがないのか分からないのだが、不思議な感覚だった。

「さて、さつさと行くぞ」

霊夢たちの元へと向かうために、空を飛行して白玉楼の奥へと向かう。この屋敷の目の前にある家——いや、館の奥の方にある庭にいらしいのだが、迷子になってしまった。案内されるも、途中で迷子になりそうになったが、妖夢の案内でなんとか目的地が見え始めた。屋敷の中庭に出てすぐ目の前に見覚えのある二人の少女が困ったような表情で立っていた。

「どうしてかしら。西行妖が花開き始めてる」

「お前ら、何をしているんだ」

背後から俺の声が聞こえた事に霊夢が驚いていた。そこまで驚くことなのだろうと、言ってから妖夢を降ろした。さっきまで気絶していたのは覚えているが、なんでそこまで驚くのだろうか。その答えは、魔理沙が教えてくれた。

「さっき、天夜の妖力がなくなつたて霊夢が言ってたんだよ。でもって、天夜が死んだと思つたんだぜ」

「ふむ、俺は死んではないが……気絶はしていた」

ここまでの事情を魔理沙たちに説明している中、妖夢が西行妖の目の前に立つ青い着物を着た女性へと走り出す。目の前の女性もなにやら混乱しているらしく、妖夢の気配にも気づかずに固まっていた。その隣にいる見覚えのある紫色の服を着た女性も固まっていた。

「幽々子様、紫様！！これは一体どういう」

「私にも分からないわよ！！こんな事になるなんて、私にだって分からなかったわよ」

妖夢の問いに半ば苛立ちながら答える紫殿に、幽々子殿がその場から離れ始めた。どうやら開花し始めたようで、皆が混乱している。ただ、その場にいる俺を除いてだがね。何故、そこまで怯えるのだろうか。確かに危険な香りは凄くするのだが、この桜が咲くのがそんなに駄目なことなのだろうか。

『あらあら。咲き始めているのに、皆に咲いて欲しくないと目で見られて可哀想ね。こんなにも美しい桜を咲かしてくれているのにね』

「ああ、そうだな。でも、そこにいる黒いのが邪魔でよく見えないな」

今、俺の目に写っているのは、西行妖という桜から離れた霊夢たちと、その桜の樹の上で此方を見ている黒い物体である。そして、黒い物体から出された妖力は、何故か懐かしく感じた。いや、何故かではない。どうも、見覚えがある姿をしている。

「ああ、秋夜。どうやら、復讐がすぐに成し遂げそうぞ」

「ん？ これはこれは、君とまた会えるとは——運命というのは怖いものだね」

西行妖から飛び降りた黒い物体に、霊夢たちは戦闘態勢に入る。黒い物体がゆつくりと解け、一人の青年が現れた。見覚えがあるというよりも、俺が今一番会いたくて、二度と会えない人だった。

「鏡の姿をしているということは、お前があの妖刀の」

「ああ、そうだよ。僕の名前は『影^{えい}』だよ。能力は、言わなくてもいいよね。君の中にいる絶に聞いてよ」

満面の笑みで見つめる影と呼ばれる男に、今さっき脳内で秋夜が真剣な声で教えてくれた能力を言う。その能力を聞いて驚きもしたが、何となく納得してしまった。

「『相手の意識を奪い取り操る程度の能力』だな。また、厄介な能力だな」

「おお、流石は『絶に選ばれた子』だけはあるね。一般の絶でも、僕の情報を手に入れるのは難しいのにね。汐が言っていたけど、中々だね」

汐殿の名が出たことに動揺した。だが、何故だろうかすぐに動揺が解け、ゆっくりと深呼吸をする。影はただ笑いながら今の現状を楽しんでいる。桜から離れるにつれ、開花し始めていた西行妖の蕾が閉じ始めた。どうやら、影が近づくと花は開き、離れると花が閉じるらしい。

「つま、僕もまた彼の一部であり反乱した異端者とも言うべきか。秋夜を此方側に招いたのが僕だけど、すぐに汐に奪われたんだよね。今度会ったら仕留めとかないと」

「秋夜を絶の一部にし、更に汐殿を殺すというのなら、もう言うことではないな」

俺の中で何かが踏ん切れた感じがした。ただ、今まで以上に体が熱く、心が踊り、全ての者に『絶望』を味あわせたい気持ちだ。永遠の恐怖こそが秋夜の喜びであり、俺の喜びでもある。そう頭の中に訴え続ける何かの存在がある。

「僕を殺すのかい？ 今の君なら確かに下っ端くらいなら互角で戦えるけど、僕にはまだおよ……え、どういうことだい」

「ああ、久しぶりだ。これほどまでに、怒りに縛られたのは」

何を言っているのか、自分ですら分らない。ただ、体が熱く燃えるような感じなのだが、意識はしっかりしている。右腕が黒い物体に覆われ始め、体中の妖力が何かに変わり始めた。なんだろうか、この力はなんと言えば良いのだろうか。汐殿と同じような、でも、全く違う力を感じた。

「なんで、僕らを殺す力を持つてるの？ 奴の力を、なんでなんでなんでなんでなんで」

狂った人形のように『なんで』と繰り返し、怯え始める影を見つけた。これ程までに『相手を喰らいたい』と思う衝動に駆られたのは初めてだった。

「これが、汐殿の力？ 自身が狂い相手を喰らいたい。肉喰らい、血を啜り、世界という情報の端末を喰らい、知識を得たい。これが、本当の絶の力？ これが、絶に喰われると言うこと？ 分からない。だが、分かることがある」

「な、何が分かったのよ」

霊夢たちの存在を忘れていた。まあ、彼女たちも美味しそうなのだが、対象外である。彼女たちに対しては、汐殿が『食べちゃダメ』と言う情報があるため、食うことはできない。そんなことを考えている中、秋夜が楽しそうに霊夢に向けて言う。

『フフフ。こんなにも美味しそうな獲物がいるのだから、もう決まっているじゃない』

そうだ。もう決まっている。復讐を成し遂げる。ただそれだけだ。

『「影よ、貴様を喰ってやる。生きたままじつくりとな」』

全てが一つに繋がり、今この瞬間の衝動を抑えることが出来なくなった。気が付けば、目の前にいる影を殴り飛ばしていた。それどころか、相手の魂の色、形、質、存在過程が一瞬にして頭の中に記憶される。

「あああああああ！？　なんで、なんで、なんで！！　どうして、その力を使えるの！？　僕らが一番欲していた力を何故」

影の声が聞こえたと同時に、左腕にまで絶が楽しそうにまとわりつく。この力が何なのか分からないが、今はただ目の前の獲物を食い殺すことだけが頭を駆け巡る。

「奪ってやる。お前を喰らって、その力を」

影の体に黒い物体が駆け巡り汐殿と同じ力を感じた。どうやら、これが本来の絶の使い方らしい。汐殿もこんな姿になるのか、俺は一体どんな姿なのか、皆にはどう映っているのか。そして、何故だろうか。

（なんで、西行妖の情報が入ってくるんだ。切ないものだな、この桜が満開になれば、人間の精気を吸い取り殺す。そして、幽々子殿の――だからか、この桜を満開にさせたくないのか）

わざと空きを与えてやったのに、攻撃をすることはなく西行妖を見ていた。頭の中に流れる情報はどうやら共通らしく、俺も西行妖を見てしまった。そんな中、影から驚きの一言を放った。

「戦うの止めた」

「……、そうだな」

互いにまとわりつく絶が消えた。周りから見れば急に戦闘を止めたのに理解できないであろう。現に霊夢たちもその言葉を聞いて固まっていた。だが、戦う気力が一気になくなったのだ。

「はあ、本当は殺しあいたい気分だったのに、この桜からの情報が重すぎて戦えなくなつたよ」

「傷つけない気持ちだが、ここまで来ると戦う気にもならんな。だが、お前をこのままにする訳にもいかない」

俺が何を言いたいか分かつたらしく、クスクスと笑いながら近づいてきた。俺としては、ここで此奴を封印するのが良いと思っていたが、さっき殴ったことで、影の情報が一気に頭の中に入ってきた。それによって、俺の気持ちは変わってしまった。

「それに、君に殴られたことで情報が入ってきたし。僕の欲しい情報はなかった。さあ、食いたければ食えば良いさ。もう疲れちゃったしね」

「そうだな。お前を食えば全てが終わる。その前に聞きたい——お前は鏡をどうしたかったんだ」

何も答えることなく桜を見つめる影を見て、俺は何も言わずに影の足元に絶を放った。もうすぐ影は食われるのだが、微笑みながら此方を見て最後の一言を口にした。

「友達になりたかった……かな」

それを最後に、影は絶に食われた。寂しそうな微笑みと共に食われた影の姿を見て、俺は何も言わず桜の気を見つめた。そんな中、霊夢と魔理沙は何かを思い出したかのように話し始めた。

「なあ、霊夢。異変は……解決したんだよな」

「え、ええ。そうよ、異変は解決したわ。さあ、天夜も帰るわよ」

霊夢たちの声を聞いて、俺は黙って頷き霊夢たちと共に家に帰ることにした。こうして、この異変は解決した。俺は絶の恐ろしさを知り、汐殿が帰ってきたと同時に質問攻めをした。汐殿は驚きつつも、質問に分かり易く答えてくれた。その後、白玉楼にて宴会が開かれこの異変は無事に終わりを告げるのだった。

二十一話 復讐と桜と（後書き）

どうも、これでこの章は終わりです。

次章では、萃夢想編になります。

ですが、その前にキャラ紹介コーナーをやります。

そして、萃夢想ラストでキャラ紹介コーナーをやrimして、最後の永夜抄となります。

では、キャラ紹介コーナーで会いましょう ノシ

キャラ紹介コーナー 其の三（前書き）

瑠羽『どうも、また会いましたね』

汐『今回は誰を紹介するの』

瑠羽『七夜さん達です』

汐『そうですか』

キャラ紹介コーナー 其の三

瑠羽「さて、始めました！！ 第三回キャラ紹介コーナー」

汐「テンションが高いね」

瑠羽「テンション高くないと、冬眠しちゃうんで」

汐「え……なぜに」

瑠羽「まあ、気にせず紹介しますよおおおおお」

.....

名前：紅山 七夜 ・ 衣乃月 秋夜

誕生日： 不明 ・ 6月7日

年齢： 両者不明

能力：ありとあらゆる者を殺す程度の能力（両者）

物を作り出す程度の能力（両者）

種族： 狂い神 ・ 喰らい神

身長： 両者不明

体重： 両者不明

スリーサイズ： 両者不明

好きなもの： 紅山 汐 ・ 衣乃月 天夜

嫌いなもの： 両者無し

【容姿・格好】

常に姿を変えるため、特に固定されていない。子供の姿になったり、大人の姿になる等、好きなときに好きな姿になるため、体重も身長も何もかもが不明である。ただ、汐や天夜が好きな彼女らは、

その好みの姿になったりなどするため、たまに同じ姿になることもあるのだが、実際のところは不明である。

【性格】

二人とも、基本的に温厚ではある。だが、七夜は昔、数多くの世界を喰らい知識を多く得ているため、時たまそこらへんにいる悪戯好きの妖精を捕まえては、自分の楽しみである調教をすることがある。そのため、汐に分かりいつも怒られるのに快感を覚えてつづける。

・・・・・・・・・・・・・・・・

瑠羽「てな、感じですね」

汐「七夜ってDMだったけかな」

瑠羽「汐って、七夜が悪さしたときにどんな感じで叱るの」

汐「それは、何時間か正座させたのちに、カツ丼を用意して、自白させ」

瑠羽「刑事ドラマの見過ぎではないかな、それって」

汐「まあ、そんなわけで、この回も終わりました。では、また次章会いましょう」

瑠羽「またねえ〜。ところでさ、最近の刑事ドラマって、面白いよね」

汐「うん。確かにそう思うよ・・・・・・・・・・」

キャラ紹介コーナー 其の三（後書き）

そんなこんなで、また次章で会いましょう。

次章では、萃香さんが出ます。幼女が出ます。汐の逆鱗買います。

この三本でお送りします。では、ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7503u/>

東方狂喰録

2011年10月24日01時03分発行